薪　朝　文　庫

英国寮生物語
（1）

祥曲星祈/和海　共著

仔牛ともぐら舎版

目　次

一　ある秋 (Side vision of Camus)……（三）
二　ある秋 (Side vision of Aiolos) ……（三一）
三　ある幽霊……（五七）
四　ある観察（マイケル・ガーネットの手記より）……（七二）

ある秋 (Side vision of Camus)

Prologue

ロンドンのチェリングクロス駅からヘイスティングス行きの列車に乗って小1時間、「イングランドの庭」と呼ばれるケント州の美しいカントリーサイドの一角に、十六世紀から続くパブリックスクールがある。所謂クレランドン・スクールズからは漏れているものの、数年前イートン、ハーロウ、ウィンチェスター等の校長を歴任した人物が校長の椅子についてから、順調に学業成績を伸ばしている進学校だ。

完全な全寮制ではなく、少数だが通学の学生も在籍する。十三歳（3rd form）から十八歳（upper 6th form）の学生たちを集める男子校で、ロンドンから比較的近いため、都市部からやってくる学生が多い。パブリックスクールに息子を通わせるのは中・上流階級家庭のステイタスであり、地理的条件も反映して、この学校では比較的裕福な一般家庭の子息が大半を占めていた。一般家庭の、というのは、所謂貴族はほとんどがイートン、ハーロウなどのクレランドン・スクールに行ってしまうからだ。

ロンドン郊外の銀行員の元に次男として生まれたカミュ・ルーファス・バーロウもまた、そのような大多数の一人だった。真面目で優秀な兄と美術的なセンスに恵まれた弟の間に挿まれ、あまり両親の手を煩わすことのなかった彼は、家庭でも学校でもあまり目立たない存在だった――「赤毛（ルーファス）」という名前通りの鮮やかな赤い髪と、それに誂えたような赤茶色の瞳以外には。実際、彼の容姿は初対面の人間にある程度以上の印象を与えるが、彼の人となりを知るにつれ、その印象は薄れていくのだった。人付き合いもよく、勉強もそこそこ出来、クラスで問題を起こすわけでもない。どこにでもいる、普通の少年だ、と。彼の最も非凡な部分は、ひそやかに彼自身の世界にしまい込まれていて、限られたごく一部の人間にしか垣間見ることはできなかった。

そんな彼が、それと知られることなく行った主張があるとすれば、この音楽奨学生を多数輩出している学校を選んだことだった。父親は、兄のようにイートンを選ばなかったカミュに最後まで不満を抱いていたが、カミュにピアノを買い与えた母親の方は、黙って息子を新しい学校に送り出した。…どんな助言や薬、質の高い友人よりも、この子を支えるのは音楽だと、彼女の血がそう告げていたので。

そんなわけで、カミュの両親や友人も、カミュ本人も、新たな生活に際してそれほど劇的な変化を期待してはいなかった。そこそこ進学率のよいパブリックスクールを出、オックスブリッジに進学し、たまに、音楽で気晴らしができればいい。その程度の認識であったものが、親類縁者どころか友人・知人の類に至るまでが驚愕の渦に叩き込まれるほどの激変の幕開けだったとは、このとき、カミュ自身でさえ想像もつかなかったのである。

1st week

「ルーファス！　ルーファース！」

堅牢な石畳の小道を軽い足音と共に駆けてくる小さな人影をみとめて、カミュは化学棟に向かう足を止めた。カミュより頭一つ分ほども小さな同室のクラスメイト、ポール・フェリックス・リッジウェイが、華奢な右手を精一杯にふって駆け寄ってくるところだった。

「きいてきたよ！　スクール・クワイヤの練習、今日の夕方やってるって！」

ライトブラウンの巻き毛を汗で張り付かせ、きらきらした二つの瞳がカミュを見上げる。弾んだ息の間から零れたその声は、鈴のようなボーイソプラノだ。

「情報が早いな：君、この学校の聖歌隊に知り合いがいるの？」

「勿論！　うちの町の聖歌隊から何人もここに来てるし、従兄弟もいるもの。従兄弟は、君の声を聞くのをとても楽しみにしてるんだ！　僕が何度も君のことを話したから？…」

カミュは、首をかしげてほんの少し笑った。その微笑みは、夏の名残の陽光を浴びて涼やかに見えたが、彼をよく知るものならば『困ったな』という類いの笑みであることに気付いたかもしれない。

ポールは、この学校でのカミュの唯一の知り合いだった。案内されたハウスの自分のベッドの横にポールの姿を見つけたときは、びっくりすると共になるほど、と納得もしたものだ。自分だって音楽目当てでこの学校に来たのだから、ポールにとっても当然の選択だったに違いない、と。…もっとも、カミュを見つけたポールが椅子を蹴って立ち上がり、「ルーファス！」と大声でぶちまけた時には、ほんの少し彼の選択を恨んだものであるが。

ポールと知り合ったのは、地元付近の町の聖歌隊が集まって合同コンサートを行ったときだった。当時アルトを歌っていたカミュが、デュエットで組まされた隣町の合唱団のボーイソプラノがこの少年だったのだ。ポールはカミュの声とサポートがいたく気に入ったらしく、二人の間にはその後しばらく文通が続いた。カミュは地元ではミドルネームで呼ばれているので、ポールもカミュのことを『ルーファス』と呼ぶ。カミュはこの、父親が自分と同じ赤毛を持って生まれた息子につけた名前を好んではいたが、あまりにも無視され続けているファーストネームの響きも気に入っていた。誰も知らない環境に移行するにあたって、ミドルネームは秘密にしておこう、そう思った矢先の出来事だったのだ。

「ポール、悪いけど……僕は、まだスクール・クワイヤに入るとは決めていないんだ。」

弟と大して変わらない背丈の少年と並んで歩き出しながら、カミュは唇の端に笑みを残しつつ慎重に言葉を選んで言った。

「そりゃ、僕だってそうだよ！　ここには、スクール・クワイヤの他にまだ二つも聖歌隊があるんだもの。当然、他の二つも聞いてから決めるだろ？」

「そうじゃなくて……合唱をやるかどうか迷ってる。少なくとも、歌はやらないつもりなんだ…入るなら、伴奏で入れてもらえたら、と思ってる」

「え…？」

恐らくかつてのカミュを知る誰が聞いても驚くであろう、しかしカミュにとっては自明の返答に、小さな少年の足取りが鈍る。

「どうして？　君みたいなアルトは滅多にいない逸材だって、リード先生も言ってたのに！」

「その評価は有難いけど……実はあの後、僕はオルガンに転向したんだ。だから、ここ二年ほどは主に伴奏を受け持っていて、あんまり歌っていない」

「えええっ?!」

二の腕を強く引かれ、カミュは小径の途中でやむなく再度立ち止まった。大きなブルーグレイの瞳が、こぼれ落ちそうなほど見開かれて、カミュを見上げている。何故、どうして、と訴える眼差しが、二年前の事件を思い起こさせる。

カミュがオルガンに転向する、と言った時の、主席を争っていたボーイソプラノ二人の凍り付いた瞳……

「そ…そうだったんだ……知らなかった……」

明らかに気落ちしてうつむいたポールを見て、カミュは遂に己にも聞こえないほど小さく嘆息した。…ポールのカミュに向ける眼差しは、純粋だが複雑だ。彼のソプラノを引き立たせるアルトに対する所有欲、年の割に大人びた友人に対する憧れ、同世代の子供たちから明らかに抜きん出てしまっている、音楽に対する知識を共有出来る仲間への同族意識、そして、彼自身が一番よく知っている、少年合唱の寿命の短さを思う時の惜愛の念……

頭では理解出来ても、カミュには真正面から受け止める勇気はなかった。自分には、同じ強さの情熱を返せない、と思うからだ。……同じ理由で、二年前、アルトをやめてオルガンに逃げた。自分の適性を考えれば結果的に正しい選択だったと思っているが、逃避であった、という事実は変わらない。

音楽をやるなら、一人がいい。少なくとも大人になるまでは。あれからずっとそう思っているのに、こんなにも素直に落胆されてしまうと、その決意が揺らぐ。

ポールはまだ変声までゆうに一年、うまくすれば二年あるかもしれないが、カミュは自分の変声までを長くてあと一年と見積もっていた。もともと、歌が嫌で止めた訳ではない。ならば、一生で最後の一年くらい、歌ってもいいのではないか、と思ってしまうのだ。この一年を捨ててしまうことで、後で後悔する羽目にならないか、と……。

結局、見学に行かないとも言えず、カミュは化学の実験が終わったら聖歌隊の練習を見に行くと約束をした。化学棟に着い

て、それぞれの班の席に別れる寸前、ポールはもう一度カミュの袖を引いて言った。
「ルーファス！　きっとだよ！」

　最初の化学実験は、ガラス細工から始まった。つまり、これから化学実験で使うガラス器具を自作せよというわけだ。直径六ミリ、長さ三十センチほどのガラスチューブが教壇の前に山と積まれ、一班に二つずつガスバーナーが配布される。まずガスバーナーの扱い方を全員が学んだ後、化学教授のミスター・フリッツがおもむろに洗面器一杯の氷を一班にひとつ配り始めた。ざわつく生徒を前に、教壇の前に立ったフリッツ教授はひときわ大きな声を上げた。
「紳士諸君！　あらかじめ言っておくが、この実験は必ず毎回火傷をする者が現れる。今、君たちの前にボール一杯の氷を用意したが、これで足りる怪我でとどめておくように！　万が一、酷く痛む場合は、我慢せずにすぐに申し出る事。医局も準備を整えておる。よろしいですな？」
　教室がしんと静まり返る。一体何をさせられるのだろう、と、どれも不安気な眼差しだ。
「作ってもらうものは二種類ある。一つはスポイトだ。これから三年間使うから、予備も考えて四、五本あればよろしい。もうひとつは毛細管だ。試験管内の液体を熱する時に突沸を防ぐため、沸騰石の代わりに入れる。太さは二ミリ程度。これも五本程度作成すること。作り方を実演してみせるから、よく見ているように。」
　フリッツ教授はガラス管を一本とると、両手に捧げ持ち、その中央をバーナーの火で炙り始めた。一見したところでは、もとのガラス管と異なる部分はない。教授は何度かガラス管を火から外し、何事かを確かめた後再びバーナーにかざす作業を繰り返した。変化は一瞬で起こった。四度目に火から外された時、ガラス管を捧げ持った両手が一気に左右に離れたのだ！　学生たちがあっと息を飲んだ瞬間に、ガラス管は炙られた部分が細く引き延ばされ、左右に一対のスポイドの形が出来上がっていた。
「…すごい！」
　一気に教室がざわめいた。まるで、手品を見ているかのようだったので。
「静かに！　御覧の通りだ。理屈はわかるな？　ガラスを溶かし過ぎると、重みでガラスが垂れて真直ぐなスポイドが出来ない。一気に引っ張る事が重要。力を込めなければ引っ張れないようでは加熱が足りない。これをもっと長く引き延ばして、真ん中の部分を切ったものが毛細管だ。御覧の通り」
　騒ぎたいさかりの学生たちが、固唾をのんで教壇を見守っている。カミュも真剣に演示を見つめていたが、ふと、目の端に斜めから差し込んで来た反射光に教壇から視線をそらした。
　光の主は、斜め前に座っていた。ポールに負けるとも劣らず小さな身体をした、金髪の少年だ。

――ああ、フェアファックスか……――

彼と授業で同じ班になるのは初めてのことだった。入学してから、まだ喋ったことはない。

最初のホームルームで、名前を読み上げられた時に、造りの繊細な顔に似合わない大声で返事をして、クラスの笑いを買っていた。それは決して馬鹿にした笑いではなかったのだが、白い頬を真っ赤に染めたまま、一言も紡がず黙って正面の黒板を睨み付けていたのが印象的だった。フェアファックス、というのはスコットランド起源の姓だから、北の方の出身なのかも知れない。…もっともその後の彼の行動は、黙っていれば女の子と間違えそうな容姿とはかけ離れたもので、カミュの印象としてはむしろ活発で少し騒がしいくらいのものだったのだが。

すぐに教壇に視線を戻すつもりが、カミュはなかなかその少年から視線を外せなかった。少年が、あまりにも真剣な眼差しで、教授の手元を見つめていたので。

――ものすごい集中力だな……――

カミュ自身、それなりの集中力には恵まれているつもりだったが、こんな人目をひかずにはおかぬ程の集中力にはついぞ出会ったことがなかった。

「…と言う訳だ。では作業上の注意を三つ述べる」

フリッツ教授のよく通る声が聞こえて来て、カミュははっと教壇に視線を戻した。

「一つ。標準をしてスポイドと毛細管を同時に作るなどということは考えないように。長く引き延ばしすぎると曲がる。一つ。ガラス管の廃物利用はしない。火傷したくなければケチらずに長いものを使うこと。一つ。これが一番大事だ。熱した部分は当然だが数百度になっているので、完全に冷めるまで絶対に触らない事。以上、作業開始！」

一気に、教室は喧騒に包まれた。教壇の前に学生が殺到し、早速誰かがガラス管を割って教授に怒られた。カミュが自分の分のガラス管を手に入れて自分の班に戻ってくると、四人のうち二人は既にペアを組んで作業を開始していた。バーナーは二つだから、カミュは残った一人と組むことになる。待っていたのは、フェアファックスだった。

「…よろしく。」

そう声をかけて、この華やかな外見をもつ少年のファーストネームを忘れてしまったことに気付いた。皆は『金髪』と呼んでいるが、本人はどうも気に入らないらしい。カミュは物心つく前から『赤毛』と呼ばれているので気にならなかったが、彼は慣れていないのだろう。

「…ごめん。君の名前覚えてないんだ。…なんて呼べばいい？」

既にクラスの有名人になりつつある彼の名前を覚えていないとは、却ってわざとらしくて気を悪くするかも知れないと思ったが、少年はほんの少し両目を見開いただけで、ミロ、がいい、と返してきた。

そういえば、彼と同室のアイオリア・エインズワースがそう呼んでいたような気がする。

「じゃあ、宜しく、ミロ。」

「君は？」
「カミュ・ルーファス・バーロウ。呼ぶのはどれでもいいよ。」
「カミュ・ルーファス・バーロウ……じゃあ、カミュ。」
笑って手を差し出したら、意外に大きな手が握り返してきた。ピアノ弾きのカミュと大して変わらない大きさだ。身長が頭ひとつ分離れていることを思えば、かなり大きな手と言ってよいだろう。
交代でバーナーを使い、まずはスポイドを作る作業が始まった。ガラス管を持つ左右の手にかかる張力を確かめながら、一気に引く。スポイドの口をガラス管の丁度中央に持ってくるには、ガラス管をまわしながら、引き延ばす部分を均等にあたためなくてはならないが、これがなかなか難しい…引き延ばされた部分が溶けたガラスの重みで下に垂れ下がり、スポイドの口が傾いてしまうのだ。
二本ほど傾いてしまったが、漸く指定の五本を作り上げると、ミロが先の凄まじい集中力でバーナーに向かっていた。何とはなしに、彼の作り上げた作品を見て、カミュはぎょっとした。
工芸品のように美しく形のそろった完成品が、綺麗に並べられていたからだ。
意外だ……
思わず、不躾なほどまじまじと眺め直してしまったが、ガラス細工に全神経を集中している少年は気付かない。
まっすぐな眼差しが、青い炎から引き上げられた透明なガラスを見つめていた。その視線の先には、他の四本と同様、完璧な曲線を描くスポイドが出来上がっている。
ふと、カミュは奇妙な違和感に捕われた。目の前の少年の集中力が、先ほどとは別のところに向いているような気がしたのだ。
ミロが左手をガラス管から放した。漸く冷えて来たガラス管は、スポイドの形を保持したまま固まっている。ミロは暫くその中心を眺めたあと、ふとその指を今火にかざしたばかりの細いくびれに伸ばした。
――あ！――
「…熱つ!!」
小さな悲鳴が上がって、小さな少年は半歩ほども飛びすさり、折角上手く出来た作品を取り落とした。軋るような音をたててガラス管が粉々に砕け散る。後ろの班のペアがぎょっとして振り返り、床に散ったガラス片を見て、納得したようにまたすぐに自分の作業に没頭していった。
「ミロ！　大丈夫か?!」
カミュは慌てて机を半周し、眉をしかめて左手の指先を見つめているミロの近くへ寄った。きっかりと焼きごてで押したように、人さし指と親指の先にガラスに触れた痕が残っている。すぐに手を離したお陰で、それほど酷い火傷にはならなかったようだ。
「え？　ああ、大丈夫…びっくりした…熱いんだ…」
「当たり前じゃないか…すぐに氷水で冷やした方がいい。絆創膏を貰ってくるよ」

失礼、とあとの二人に断って氷のボールを取り、ミロの目の前に据えておいて、カミュは教壇に絆創膏を取りに走った。よくよく見渡してみれば、既にどの班も一人や二人は氷水のお世話になっていて、なるほどフリッツ教授の注意は誇張ではなかったのだと納得したのであるが。

――…それにしても、普通、わざわざ触るか？　――

目の前で起こった出来事をもう一度頭の中で再生してみる。…あれは、不注意ではない。あきらかに、わざと触ったのだ。どうやら、熱い、ということを忘れていたようだが、それにしても……

直前に感じた違和感は、突拍子もない何かをやらかしそうだ、という予感だったのか。

つらつら考えながら机までもどってみると、ミロが眉を顰めながら、氷水に左手を浸していた。

「もう出してもいいかな？　なんだか痺れてきた。」

「仕方ないよ。火傷した分は冷やさないと。でもまだ毛細管を作ってないから、とりあえず傷を覆って先に作ってしまわないか？」

傷の痛みより何より氷水が冷たかったらしい。ミロは一言そうする、と呟くと、ほっとしたようにボールから手を引き上げた。きちんとアイロンの当たったハンカチをポケットから出し、傷を避けて手を拭う姿を横目に見ながら、貰って来た絆創膏を差し出そうとして気づく。人さし指と親指をやられているから、絆創膏の紙を剥がせない。

おもむろに絆創膏の紙を剥いて差し出したら、またびっくりしたような瞳がこちらを見上げていた。

光の加減で、少し碧がかって見える。本当に、綺麗な青の瞳だった。

「手。かして。」

嫌がるかな、と思ったが、とりあえず否定の言葉がないので、なるべく傷が擦れないように絆創膏を巻く。親指を手当てして、人さし指にも巻こうとしたとき、傷の近くに小さなたこがあるのに気付いた。

――…あれ？　――

よく見ると、他の三本の指にもあるようだ。不意に身長の割に大きな手の理由に思い当たり、カミュはああ、と納得の形に口を開きかけた。

何か弦楽器をやっているのか。

尋ねようとしたまさにその時、背後からフリッツ教授に肩を叩かれた。

「ほう、とうとう六班もやったな。大丈夫か？　フェアファックス」

「大丈夫です」

「よろしい。実験を続けたまえ。ただしその前に床の残骸を片付ける事。掃除機はあとでまとめてかけるから、大きな欠片だけ帚でまとめて前の廃棄バケツへ。くれぐれも破片で手を切らんようにな」

「はい」

「それと、ちゃんと時間内に終わる事！　丁寧な仕事は結構だが、まだ毛細管を作っておらんのは君たちだけだぞ？」

　気が付くと、既に日は傾きかけていて、早い班は既に後片付けを始めている。慌てて引っ張りだこの帚を借りて来て破片を片づけ、毛細管を作り、後片付けを済ませた頃には、すっかり授業の終了時間も過ぎていた。教室の出口で、じりじりしながらポールが待っている。仕方なく、カミュはまだ今日の実験記録を書いているミロに声をかけた。

「ごめん！　ちょっと約束があるんだ。先に失礼してもいいかな？」

「え？　ああ、ごめん。どうぞ」

「それじゃ、また！」

ブックバンドで留めたノートと教科書を抱えて、化学棟から駆け出す。遅いよ、もう！　とふくれるポールに謝り、音楽棟に向かいながら、カミュはミロの楽器経験を聞きそびれたことを思い出していた。

2 2nd week

　音楽棟の最上階に、リハーサル室がある。この学校のオーケストラは三つあり、いずれもこのリハーサル室にはお世話になっているが、十曜の夕方は一番大編成のオーケストラが占有出来る事になっていた。

　一番大編成のオーケストラだからといって、一番上手だと言う訳ではない。

　実際、もっともメンバーの実力が高いのは、二番目の規模を持つ室内オーケストラだ。ここは殆どが音楽科学生で占められているので、初心者は勿論中レベル程度の経験者ですら入れない。大編成であるのは初心者を歓迎している結果でもあり、ソリスティックな難曲を得意とする室内オーケストラに比べ、よりサークル的な雰囲気の強いオーケストラになっていた。

　とはいえ、その演奏会の曲目は決して難易度の低いものばかりではない。

　現に今年も、メインプログラムはサン＝サーンスの交響曲第三番『オルガン付』で、美しいメロディーと華やかなフィーナーレの陰で、弦楽器はアンサンブルの難しさに泣かされる、といった具合だった。

　現在の団長は、ドウコ・ジェファーソン・オルグレン、中国系で、ファーストネームは漢字で書けば『童虎』となる。パーカッションのパートリーダーだが、上級第六学年の彼は、この十二月の定期演奏会で引退し、Aレベルテストに備えて最後の追い込みに入る。同じくこの十二月で引退するコンサートマスターのシオン・メルベリ・ハーシェルは、童虎と同じローズ・ハウスで去年まで同室であり、誰もが認める童虎の親友だった。こ

の二本の柱のもと、今のところ、この大オーケストラは音楽・人間関係共に非常に良好な状態を保っているが、彼等が心配するのはこの十二月以降、自分達が抜けた後のことだった。

来年はどうしても少しレヴェルダウンするだろう、と、彼等の常任指揮者で、コントラバス弾きでもある音楽部の教授ミスター・ブレインが彼等に言ったことがある。もともと、彼等の学年は人数が多いのだ。それに反比例するように、彼等の一つ下の学年は人数が少ない。そのまた次の学年は、歴代二二を争うヴァイオリン経験者が入ったことと、全てのパートに比較的バランス良くメンバーが散らばったことで安定しているが、更に下の第四学年は、残念ながらやはりあまり人が入らなかった。――したがって、気が付けば彼等の話題は、今年入団する第三学年の新入生を如何に集めるか、になってしまうのである。

下級生の面倒ばかりみて自分の練習が出来ないコンサートマスターの常で、リハーサル開始時間より一時間早くホールにやって来たシオンは、リハーサル室の扉を開けた途端に聞こえて来たティンパニの音に驚いた。彼の耳には、童虎の叩くティンパニの音を聞き分けるなど雑作もないことであり、聞こえて来たのはまぎれもなく、この五年間練習時間五分以上前に現れた事のない童虎本人の音だったからだ。

「童虎！　どうしたんだ、こんなに早く～――――」

残り三か月になって魔が差したか、と続けようとして、シオンは言葉を飲み込んだ。バス・ドラムの陰から、小さな赤毛の少年が顔を出したからだ。

「シオン！　見学者留学者だ！」

新人生にティンパニを得意げに叩いてみせた童虎は、遠目にも分かるほど明らかに胸を張ってみせた。

「見学？　パーカッションの?!　この時期に?!」

思わず個人練習の予定を忘れて駆け寄ると、その小さな新人生は礼儀正しく頭を下げた。

「カミュ・ルーファス・バーロウと言います。パーカッションの経験はないのですが、是非見学させて頂きたくて参りました。どうぞよろしくお願いします」

「こちらこそ！　よく来たね…びっくりしたよ。パーカッションはいつも最後まで人が来ないから…私はシオン・ハーシェルだ。ヴァイオリンを担当している。よろしく」

手を差し出すと、赤毛の新入生は臆する事なく握り返してきた。こういう反応の良さは、特にパーカッションパートには重要な資質だ。細身の身体に似合わず、手がしっかり育っているのもいい。シオンは、『人当たりのよい』と教授陣に受けのよい笑顔全開でカミュに笑いかけた。何事も、第一印象が肝要だ。折角の金のタマゴ、逃してなるものか。

「よろしければ、動機を伺ってもかまわないかな？　何故パーカッションを？」

「それは……」

少年が所在なげに俯いた。おや？　と不思議に思ってその顔を覗き込むと、童虎がははは、と笑って縮こまっている新人生の肩を叩いた。

「オレがスカウトした」
「お前が？　どこで！」
「礼拝堂。この間のスクール・クワイヤの練習だよ。バスが足らんとかいうんで手伝いに行ったんだが、そうしたらもっとチビっこいボーイソプラノと一緒に彼が見学にきててな。練習が終わってもパイプオルガンをずっと見上げてたから、オルガン弾きたいのか、と声をかけたんだ」
「……お前、まさか……」
「そ。正確には、うちのオケは今オルガニストを募集している、と言ったんだ。今入れればもれなく、サン＝サーンスのオルガンパート付きだぞってな」
「童虎……！」
流石に目眩を感じて、シオンはカミュの前であることも忘れ、右の親指と人さし指でこめかみを押さえた。…人様のサークルに見学に来た新入生を横取りし…いや、この際、それはお互い様だと忘れてもいい…しかし、いくら火の定期演奏会が『オルガン付き』だからって、『オルガニスト募集』はないんじゃないか?!　そんないたいけな新入生を騙すような真似をしてもよいのだろうか。
常に閑古鳥が鳴いているパーカッションの老獪には、何もせずとも希望者が殺到するヴァイオリンの人間では太刀打ちできないということなのかも知れないが。
「すみません、あの！」
思わず考え込んでしまったシオンに、漸く狼狽から脱したカミュが声を上げた。
「…動機が不純なのは認めます。サン＝サーンスのオルガン付と聞いて、どうしても弾いてみたくて…普通にオルガンが弾ける程度では、絶対にそんな機会はないですから。でも、オーケストラにも興味があるんです！　僕はオルガンの他にはピアノくらいしか弾けませんから、何をやっても初心者ならパーカッションパートも面白そうだと……」
本当は、パーカッションを選んだのにはもう少し理由がある。パーカッションならば、誰か特定の一人とペアになることはあるまい、と思ったからだ。
先週の金曜日、化学実験の後に、ポールと合唱の見学に行った。噂通りのレヴェルで、団員も数少ないアルトの見学者であるカミュを大歓迎してくれたにも関わらず、カミュは結局入団届を出さなかった。
それが、帰り際に呼び止められた童虎から『オーケストラ』と聞いた途端、あれほど音楽をやるなら一人で、と決めていた決意がゆらいでしまったのだ。
もともと、合わせることは好きなのだ。ただ、そこで起こる人間関係のいざこざが嫌いなだけで……
合唱は、人が多いようでいて、実はコミュニティとしては結構狭い。なにしろ、パートが四つしかないから、大所帯の割には家庭的な雰囲気が強いのだ。そこへいくと、オーケストラはもっと色々な人種が集まっていて、もう少しドライな関係を保てそうだった。

だが、それは流石に口にすることは出来なかった。カミュは後ろめたさも手伝って、『こんな動機ではだめですか？』と上級生二人の顔色をうかがった。

シオンはたっぷり五秒ほど呆気にとられ、それから漸く我に返ってぶっと吹き出した。彼の盟友は、お気楽な性格だが人間観察で失敗をやらかしたことはない。オルガニストのエキストラ代を浮かせる一方で、ちゃんと見込みのありそうなのを引っ張って来たというわけだ……

「失礼！　君を笑ったのではないよ。なりふり構わぬ童虎の勧誘が可笑しくてね……だが、彼の目は確かだったようだ。カミュ、君の動機は、オーケストラへの動機としては満点だと思うよ」

「……え？　どうしてですか？」

「オケに興味を持つ人間の殆どは、あの楽器がやりたい、この楽器なら弾ける、と売り込みに来る。室内オーケストラの連中なんぞは、『私はこの楽器が得意です』と自信満々の人間ばかりだ……だが、我々は、個々のプレイヤーである前にオーケストラの一員だ。まず、オーケストラという集合体への興味がなければ、何事も始まらないんだよ」

その上で、自分の適性や興味を考えてパートを選んだらいい。あまり強すぎる得意意識は、アンサンブルの邪魔になる…そう付け加えて、シオンはカミュの肩に右手を置いた。

「我々は、君を歓迎するよ。早速、今日の練習で弾いてもらってかまわないかな？　練習なので、本物のオルガンは用意できないが……」

「勿論です。…ありがとうございます！」

「では決まりだ。童虎、YAMAHA の DX7 の使用許可は貰ってあるか？」

「ほ！　御大を持ち出すか？　オレは、今日のところは電子オルガンで間に合わすつもりだったんだが」

「どうせなら、デビューは派手な方がよかろう？　このところ、休みボケで気合いが入っていない奴が多いからな。なるべく生に近いオルガンの音をスピーカーでガンガンに聞かせて、是非本番まであと三か月しかないことを思い出して貰おう」

「わかった。コンマス様のご指名だ。カミュ、思う存分弾いていいぞ。オレは DX7 とスピーカーを借りて来る…ああ、これが楽譜だ。オレので悪いが」

カミュはヨレヨレに使い古された楽譜を喜んで受け取った。なにしろ、オーケストラの伴奏なんて初めてだ。しかも、オルガン弾きでなくとも一度は憧れるサン＝サーンスだ。

第四楽章までページをめくり、オルガンパートを覗き込む。一瞬、そこに記されているものが分からずに眉をひそめ、それから何とも言えない表情になった。

……この楽譜、音名が全部アルファベットで書き込んである……！

「あ、オレはリズム譜しか読めんから、音符には全部音名をふってある。読みやすいだろ？」

「ええ、まあ……。すみませんが、電子オルガンをお借りでき

ますか？　少し練習しないと……」
「勿論だ。練習時間まで好きに弾いてくれていいぞ！」
「ありがとうございます！」
カミュは丁重に頭をさげ、移動の時間ももどかしく部屋の隅のオルガンまで走った。…真っ黒に書き込まれた音名が邪魔して、音符がよく読めない。早く練習して暗譜しないと、とても合奏で合わせるなんて無理だ……
暫くして、人が集まり始めたホールに『オルガン付き』の終楽章のテーマが流れ始めた。いつもの辿々しいタッチと打って変わって流麗に流れる旋律に、団員たちのどよめきが広がる。『誰？　あれ！』という囁きや指差しにも、カミュは気付かない。必死の形相で童虎の楽譜と取っ組み合う新入生を、一人事情を察したシオンが遠くから気の毒そうに眺めていた。

3rd week

一週間後、カミュが大オーケストラに入団した事実は、下級生争奪戦の勝者の喜びに満ちた噂と、敗者の恨めしげな噂に分かれて伝播していた。勝者の噂というのは、ほかでもない同じオーケストラの団員とその友人たちの間でかわされるものであり、それは次の合い言葉で始まっていた。
「オルガニストが入団した！　エキストラ代が飲み代にまわせるぞ！」
一方、敗者の噂は、合唱団の一部の人間とその周辺で囁き交わされていた…最終的に所属団体を決めるのは新入生本人とはいえ、優秀なアルトと出来る伴奏者を奪われた痛手は深い。カミュの声を知っている人間が数人居た事が、更に喪失感を煽っていた。大体、オーケストラは声が変わっても出来る。だが、優秀なボーイ・アルトの声は、一年も過ぎたら失われてしまうのだ！
上級第六学年のメンバーの中には、本気で童虎に恨み言を言いに行った者も居たが、童虎の軽いあしらいを受けてすごすごと引き下がらずを得なかった。
「頼むよ、ルーファス、変声するまでいいんだ！　スクール・クワイヤじゃなくて、教会付きの聖歌隊でいいから、入ってもらえないか？　僕：従兄弟のグレックに言っちゃったんだ…すごいアルトがいるって…グレック、すごく喜んでたんだ……」
慌てた合唱団の度重なる勧誘を尽く辞退してきたカミュは、三週間目に音楽棟で泣きついて来た同室の少年を見下ろして、とうとう来たか、と溜息をついた。
もともと、合唱団への入団を全く考えていなかったわけではない。ポールの存在は予想外だったが、彼がいなくても遅かれ早かれ合唱団の練習は見に行ったであろうし、そこに童虎がいてサン＝サーンスの話を振られたりしなければ、おそらく入団

していただろうと思うのだ。ただしオルガニストとして、だが。

ポールの従兄弟グレッグは、スクール・クワイヤと教会聖歌隊の両方に属している。スクール・クワイヤの方はそれなりにメンバーがいるのだが、教会聖歌隊の方が危機的状況にあるのだ、とポールは訴えた。理由は日曜日の午前中が礼拝でつぶれるからで、なるほど、よほど信心深い人間でなければ続かないに違いなかった。

「それ…練習日は、オーケストラと重ならないかな?」

思いがけず前向きな返答が得られた事に、ポールはびっくりして顔を上げた。

「勿論……　あ、土曜の夕方が重なっちゃうけど、それはオーケストラを優先していいって言ってたよ。君ならもう声も出てるから大丈夫だって。…本当に、考えてくれる?」

「…教会聖歌隊の方だけなら…。礼拝には、もともと出るつもりでいたし……」

「本当に?!　ありがとう!　ルーファス!」

ポールは、小さな両手でカミュの右手をがっしりと掴み、ブンブンと振り回した。カミュは、同学年の中でもかなり落ち着いて大人びている。そんな彼が自分を見下ろして優しく微笑ってくれているのを見て、ポールは有頂天になった。クラスでは、ミロ・フェアファックスが『美人』だと騒がれている。だが、ポールの目には、ルーファスの方がよっぽど美人だと映っている…自分の小さな背丈がもどかしく、早くルーファスのようになりたい、と思うのだ。

優しく微笑んでいた赤茶色の瞳が、ふと小さな少年から外れて、何かを追った。ポールがつられて振り返ると、一度ミロ・フェアファックスがヴァイオリンケースを抱えて音楽棟に入って来たところだった。一瞬、視線が合ったが、ミロはそのまま一番入口近くの練習室の鍵を空けて入ってしまった。おそらく、選択音楽の課題の練習に来たのだろう。

「…彼はどうかな……」

ふと、カミュが独り言のように呟いた。

「…え?　何が?」

「いや、あの身体なら、まだ当分ソプラノが出るんじゃないか、と思って…。聖歌隊、人が少ないんだろう?　勧誘してみたら?」

その瞬間、ポールの頬にかっと朱がさした。彼以外のソプラノにルーファスが目を奪われた、そのことが、たまらなく悔しかったのだ。

「フェアファックスなら、先輩が勧誘したよ!　でも、ものすごい勢いで断られたって。あいつ、ちょっと見た目がいいからって、すごくつんけんしてるんだ。性格悪いよ!」

口にした途端に言い過ぎたと後悔が差したが、止められなかった。大体、先日の化学実験で同じ班になって以来、カミュはどうもあの金髪の少年に興味を引かれているらしい。それはカミュ自身さえ気付かないような僅かな変化だったのだが、ずっとカミュの視線を追っているポールにはそれが分かるのだ。

「そう…かな……」

カミュはミロの姿の消えた練習室のドアを見詰めたまま、注意半ばにボールの過激な評に答えた。ミロが選択音楽でヴァイオリンをとっていたというのは、意外なようで、納得できる気がする。手先の器用さは折り紙付きであるし、あの凄まじい集中力も音楽の助けになるだろう。

行動が派手、先輩に対して生意気、売られた喧嘩は必ず買う、等等、ミロに対する噂は既に十指に余るが、カミュにはそのどれもがミロの本質を表していないような気がするのだ。

「ルーファス、ルーファス！」

ボールに袖を引かれ、カミュは慌ててボールに向き直った。何故か、ボールは面白くなさそうだ。理由に思い当たる前に、たたみかけるように言われた。

「今日の夕食、いっしょに食べない？　グレッグにも紹介したいし…あ、グレッグもうちのハウスだよ！今第五学年なんだ」

「ああ…ありがとう。でも少し遅くなるかも…今日はこの上のリハーサルホールでオーケストラの練習なんだ。四時からだけど」

「わかった。じゃあ、六時半に食堂で！」

礼拝堂に走り去って行くボールを見送って、カミュは再び練習室に視線を投げ、それから最上階への階段を上り始めた。まだ所属サークルが決まっていないらしいミロ・フェアファックスが、ひょっとしたら見学に来るかもしれないな、と思いながら。

4th week

九月も第四週目になると、夏の名残もほとんど消え去り、冷たい秋の気配が大気に満ちて来る。

天候の変化に添うように、慌ただしい新入生の生活も漸く落ち着き始めていた。

教室の移動で戸惑う事もなく、同学年や同じハウスの先輩の顔にも馴染んできた。先週の水曜日から土曜日にかけて行われた各クラブの新入生歓迎行事で、所属するクラブも殆どの学生が決めている。カミュの周りでは、小さな出来事がいくつかあった。カミュ自身、オーケストラと教会聖歌隊に入団届けを提出したし、ボールはスクール・クワイヤと教会聖歌隊のかけもちをすることになった。そして、あのミロ・フェアファックスが、オーケストラのコントラバスパートに入団した。

いつも同室のアイオリアと一緒に飛び回っているミロがオーケストラに入団したことは、クラスでもいくらか話題になっていた。アイオリアはさっさとラグビー部に入団届けを出していたので、当然ミロもラグビー部に行くのだろうと思われていたからだ。口さがない連中は、ミロの身長が足りないのでラグビー

部に入れなかっただの、入部してみたらチアガールの衣装を渡されてその日のうちに退部しただのといい加減な噂に興じていたが、これらの噂を口にする者にはミロ本人がたっぷりと報復を食らわせて今は落ち着いていた。

カミュとは相変わらず、化学実験の際にほんの少し喋るだけだった。実験のパートナーとしての接点しかないカミュには、やはりミロに対する風評が本人の本質を表していないように見える。実験中のミロは慎重であり、真面目であり、知的好奇心の塊でもあった。その集中力故にたまに突拍子もないことをやらかすが、それはクラスメイトが言うように目立ちたいがため奇を衒ったものでは決してない。カミュにはその性格が好ましいものに見えていたので、とかく落ち着きなく見られてしまうミロが気の毒に思えたし、化学実験以外の接点を探してもいた。しかし、いつもアイオリアと共に飛び回っているミロの生活とカミュの生活は噛み合わないことが多く、三週間が過ぎてもまだ互いに友人と呼べる距離にはほど遠かった。

彼らの新たな接点が生まれるのは、四週目の月曜日のことである。それは、カミュにとって思いがけない失敗から生まれたものだった。

霧のような、細かい雨が、赤錆色の煉瓦の校舎に降り注いでいた。

最後の生物の時間、始まって十分ほどでレポートを提出して生物棟を出て来たカミュは、誰も居ないグラウンドを見遥かし、ハウスの方へと歩き始めた。

授業中の学校は、人影もなくまるで静かで、まるで別の場所のようだった。

たまたま以前に宿題の範囲を間違えて書いておいたレポートが、今日役に立った。クラスメイトは、今一生懸命レポートを書いている。皆が授業をしている時間に外を歩くのは、何か特別な機会を貰ったようで嬉しかった。

音楽棟の横を過ぎて、芝生の中の小径を歩いてハウスに向かう。その途中で、ふと気付いた。

今日のオーケストラの練習は、音楽棟最上階の八角堂だ。

そして、八角堂には、グランドピアノがある――――

不意に、カミュは雨の中を走り出した。息を切らせてスミス・ハウスにたどり着き、自分の部屋へ戻って楽譜の入った鞄を取り上げる。そのまま、またハウスの外へ走り出て、一直線に音楽棟を目指した。

ここでは、ピアノが弾きたければ、練習室を予約しなければならない。

練習室のピアノは決して悪いピアノではないが、アップライトだった。家ではグランドピアノを弾いていたカミュは、たまにどうしてもグランドピアノが懐かしくなる。しかし、数が少ないグランドピアノは、音楽奨学生に優先的に割り当てられる

ため、カミュはこの学校に入学してからただの一度もグランドピアノに触ったことがなかった。

もしかしたら。オーケストラの練習時間より前に、八角堂の鍵が開いているかも知れない。

しのつく雨で細く頬にはりついた髪を払って、カミュは八角堂のドアの前に立った。そっとノブをまわして押してみると、扉は音もなく開いた。

――グランドピアノだ……――

コンサートグランドではないが、ベヒシュタインのセミグランドピアノが、綺麗にカバーをかけられて八角形の部屋の中央に置かれていた。

そっと後ろ手にドアを閉め、カバーを外す。幸い、蓋に鍵はかかっていなかった。椅子の高さを調節し、譜面台をたてて、椅子に腰掛けた。

…何を、弾こうか。

持って来た鞄に入っていたのは、ベートーヴェンのソナタアルバム、ラヴェルの小曲集と、バッハのフランス組曲だった。

…バッハがいい。折角のベヒシュタインだから。

ベヒシュタインは、とてもまろやかな優しい音を出す。ベートーヴェンのような強いフォルテを要求される曲を弾くのは忍びない。

指ならしに、暗譜しているインヴェンションとシンフォニアを二三曲弾いた。よく調整され、学生の力任せのタッチにさらされていないピアノは、こんな雨の日にも、澄んで柔らかな音を出す。いつもなら初めにハノンなり何なりの指の練習をやるのだが、今日はそんな時間が勿体なかった。フランス組曲の楽譜を譜面台に乗せ、最初のキィに指を沿わせる。ベヒシュタインは、カミュが思う通りに、自在に音色を変えた。

夢中に弾き続けて、何度目かの終止符にたどり着いた時、カミュはふと背後に視線を感じた。はっとして振り返ると、入り口のドアの脇に、ミロが楽譜を抱えて所在なげに立っていた。

「あ……ごめん！　ピアノ空くの待ってた？」

「え、いや、待ってない！　ごめん！　聞いてたんだ…」

聞いていた、と言われて、どきりとした。一体ミロはいつから聞いていたのだろう？　あんなにも無防備な姿を見られてしまったのが、無性に恥ずかしかった。カミュは、理屈っぽい議論を好む割には、自分の感情を言葉にするのがあまり得意ではない。その埋め合わせであるかのように、彼の音楽には感情の色がかなり強く現れる。カミュにとってピアノは自分自身に向かって語るための道具であり、特に人前で弾くと決めたとき以外は、ごく私的な日記帳のような意味合いを持っていた。

秘め事を見られたような羞恥心から早く逃れたくて、カミュは慌てて話をミロの方に振った。

「でも、その手の楽譜……」

「あ…これは…ちょっと触れたら触りたいなって思って…別に目的が有った訳じゃないから気にしないでくれたら有難い。それより、このまま聞いていてもいい？」

冗談じゃない、とは言えず、思わず引きつった笑いを浮かべ

て『今日の練習は終わった』と返す。目に見えてがっかりしたミロの姿に、ほっとして漸く冷えた頭が、ほんの少し良心の呵責を訴えた。

大体、彼は何故人の弾くピアノなんぞ聞きたいのだろう。

つっかえたり、同じところを繰り返したり、もどかしいばかりの練習なんて……

「君、ピアノも弾くんだ…凄いな」

なんとか元気を取り戻して欲しくて、カミュはミロ自身の話に話題を移した。

「たしか選択音楽はバイオリンだっただろ？　オーケストラではコントラバスだし…どっちか経験者？」

「あーっと…コントラバスは全然初めて。ヴァイオリンは少しだけ家で…」

「やっぱり。ボウイングがきれいだから、きっと弦楽器の経験があるんだと思ってた」

カミュにはその難しさは分からないが、弦楽器初心者が最初につまづくのは運弓の難しさだといわれる。同じコントラバスの二年上の先輩であるアイオロス・エインズワースに指導を受けるミロの姿は、明らかに弦楽器の弓の特殊な扱いに慣れていて、ミロはどうやら弦楽器経験者らしいと、既に上学年では噂になり始めていた。

「どうしてヴァイオリンに入らなかったの？」

納得ついでにもう一つ尋ねたら、意外な答えが返って来た。

「…だって、サガがいるから……」

「え？　サガ先輩辛辛なのか？」

ミロが挙げた人物の名前は、カミュもまた童虎とシオンを除きほとんど最初に覚えた上級生の名前だった。オーケストラではヴァイオリンを受け持つ。歴代でも一、二位を争う腕だと言われており、実力だけ比べれば現在のコンサートマスターであるシオンよりも上だという……伯爵家の出自もさることながら、姿、立ち居振る舞い、ヴァイオリンの音色全てにおいて優美な上級生だ。

「苦手なんかじゃないよ！　そうじゃなくて…すごく尊敬してる……」

ふわっと、ミロの頬が赤くなった。カミュはびっくりして、ミロをじっと見詰めた。

「だからつまり、気後れするっていうか…その…あの人に聞かれるのは恥ずかしいっていうか…あんなに弾ける人が居るんだから自分が入ったら邪魔じゃないかって、そんな感じ」

間の悪い時というのは、存在するものだ。カミュが己の練習風景を見られたと悟ったときも、あと数分ミロの到着が遅れてくれれば、と思ったものだったが。

カミュは勿論、ミロ本人もまた、このとき、ミロがこの練習部屋に一人早くからやって来た本当の理由を忘れていた。すなわち、ミロは、とある先輩から呼び出しを受けていたのだ。

はたして、ミロが赤くなりながら俯いてぼそぼそと喋っている最中に、その人物は八角堂の扉を開けて部屋に入って来ていた。カミュが先に気付き、あ…！　と驚きの形に口を開けたが、

ミロは気付かなかった。

「そんな気後れをする必要はないよ。折角入ったのだから、是非遠慮しないで弾いてもらいたいな」

新たにやって来た上級生、ミロを呼び出したサガ・チェトウィンドは、ミロの台詞の言葉の言葉尻だけをとらえて言った。勿論、このときサガはミロの遠慮の相手はコントラバスの上級生だとばかり思っていたのだが。

「ああ、先輩と待ち合わせだったんですね」

カミュが、硬直しているミロの代わりに話を継いだ。いい機会だ、と思った。そんなに憧れているなら、ちゃんとそのことを伝えて、もっと近くに近付けるようになれたらいい、と思ったのだ。

「お話中失礼。待たせたかな？」

「……待ってません全然!!」

ミロが文字どおり真っ赤になってその場にしゃがみ込む。軽い気持ちで、カミュはミロの援護射撃をした。結果がどうあれ、カミュはそのつもりだったのだ。

「ミロはピアノを弾きにきたんですよ。ヴァイオリンも経験者だそうです。サガ先輩に気後れして言えなかったみたいですが」

だが、その一言が放たれた途端、ミロの真っ赤だった顔は一変して蒼白になってしまったのだ。

「いや、違うんです！　ピアノは、ホントちょっと触ってみたかっただけで、ヴァイオリンは…もう、聞かなかったことにして下さい!!」

ミロの急激な変化に、サガも少し戸惑いを覚えたようだった。微笑んでいた口元が少し真面目に引き締められ、彼の用件をつとめて事務的に述べた。

「いや、そのヴァイオリンの話をしに来たのだけれどね…」

「…え？…」

「カミュ、悪いけど席を外してもらえるかな？」

どうやら何か、自分はまずいことを言ってしまったらしい、とカミュが気付いたのはこの時だった。カミュの認識では、ミロはあくまでコントラバスパートの人間だった。ミロがいくらサガに憧れているといっても、今実際に楽しそうにコントラバスを学んでいるミロの今後を左右するものではないと信じきっていたのだ。

だが、他でもないサガが、直接ミロとヴァイオリンについて話がある、というのは……

「あ…はい、お邪魔しました」

いずれにしても、これ以上ここに留まることは出来ない。カミュは丁重に頭を下げて、八角堂を辞した。

「悪いね」

「…座らないか？」

カミュの姿がドアの向こうに消えたのを確かめて、サガは傍

らに畳んであったパイプ椅子を二つ取り出し、ミロの前に広げた。ミロはまだ、赤とも青ともつかない緊張した面持ちをしたまま俯いていた。

「さっきは済まなかったね。立ち聞きをするつもりはなかったんだが…まさか、カミュが居るとは思わなかったから。カミュはピアノを弾いていたのかい？」

とにかく緊張をほぐしてもらおうと、本題に関係のない話を持ちかけると、ミロは小さな声で返事を返してきた。

「…弾いてました」

「どうだった？」

「上手かったです。凄く」

相変わらず俯いたままだったが、凄く、という最後の言葉に力がある。おそらく、カミュの演奏はそれなりのレヴェルだったのだろう、と、サガは少し目を見張った。

あの童虎の譜面を見ながらオルガンパートを弾きこなしてしまったのだから、確かにそれなりの力があるのかも知れない。

「そうか…それは惜しい事をしたな。私も、もう少し早く来ればよかった。」

ミロにもう一度椅子を勧めて、自分も腰掛けると、サガはおもむろに用件について切り出した。

「時間がないから、単刀直入に言うけれど、今、ヴァイオリンパートは経験者を必要としている。例年なら、十人とれば一人くらいは経験者がいるんだが、今年は全員が初心者なんだ。ヴァイオリンパートは必ずコンサートマスターを出さなければならないから、全員が初心者だと相当厳しい。かといって、もし途中から経験者が入団したとしても、それまで頑張って来た他のメンバーを差し置いてコンサートマスターに据えるというのはかなり難しいんだ」

例年、この時期はどのパートも新入生集めに必死になる。唯一の例外はヴァイオリンで、大抵経験者が定員を溢れるのだが、ヴァイオリンには他のパートにはない悩みがあった。未来のコンサートマスターになる人物を予め見当をつけておかねばならない、という点だ。

初心者が五年間必死で練習して、コンサートマスターに見合う実力を付けた例が過去にない訳ではない。しかし、そのために彼は重要な教科の単位を落としてしまった。また、全員が初心者だとなかなかコンサートマスターが決まらないという問題もあった。押し付けあいになるか、ポストの奪い合いになるか、表向き押し付けあっていても裏で激しい工作が行われているか…いずれにしても、あまりいい雰囲気にはならない。

そんな事情から、ヴァイオリンパートは毎年必ず一人は経験者を入れるべしという条件が暗黙のうちに課されている。他のパートがとにかく新入生集めに躍起になっている間に、ヴァイオリンパートでは水面下での経験者勧誘が行われていた。今年もかなり人脈をたどって勧誘したのだが、今年はもともと経験者が少なかった上、その殆どが室内オーケストラに行ってしまって誰も捕まらなかったのだ。

「それで、連日皆で頭を悩ませていたときに、アイオロスから

君の話を聞いた。君がどうやら弦楽器の経験者らしい、と。私も、確かに君は運指や運弓の飲み込みが早いと思っていた。ただ、ポジション移動はそれほど出来るわけでもないから、大きな楽器の経験者ではないだろう。ヴィオラの経験者はまずいないから、きっとヴァイオリンなのではないか、という話になったんだ。…その…もし言いたくないなら無理して言わなくていいんだが…君は、とにかく、この学校に来るまでにもヴァイオリンを弾いていた、と思っていいのかな？」

ミロはもう俯いてはいなかったが、両の青い瞳が内面の強い葛藤を浮かべて、じっとサガを見詰めていた。膝の上に置かれた両手は固く握りしめられ、唇は真一文字に横に引かれている。失敗したか、とサガは一瞬、ひやりとした。…やはり、ヴァイオリンを弾いているというのは、知られたくないことだったのか。

思わず息を潜めて返答を伺っていたら、小さな呟きのような声が返って来た。

「思ってもいいです」

思ってもいいです、とはまた難しい返答だ。思ってもいいが、あまり公にしたくない、ということなのか、単純に言葉尻をとらえただけなのか……。

いずれにしても、経験者であることは確かなようなので、サガはまさしく身体を張った努力で新入生を集めて来たアイオロスに心中で幾重にも詫びながら、今日の本題を口にした。

「それなら…本当に、不躾な質問で申し訳ないのだけれど…もし嫌でなければ、答えてほしい。今、私が君に、コントラバスを諦めてヴァイオリンに来てくれと言ったら、僅かでも考えてみてもらえる余地はあるだろうか？」

ミロは、先ほどにもまして硬直したまま、じっと両目を見開いていた。驚くのは当然だろう。彼はコントラバスパートに入って来たのだ。ヴァイオリンを弾く為にオケに来たわけではないのだから。

「こんなお願いは、君にも、コントラバスパートのメンバーにも本当に失礼だし申し訳ないと思っている。勿論君は、私やヴァイオリンパートに遠慮せず、君が一番いいと思う道を選んでくれていい。私がこんな話を君にしたのは、万が一、君の中でヴァイオリンとコントラバスがほとんど拮抗する選択肢であった場合に、ヴァイオリンパートに経験者が来てくれる可能性を諦めたくなかったからだ…だから考えた末やはりコントラバスがいいと思うなら、是非コントラバスで頑張って欲しいと思っている。…どうだろうか？　返事はすぐでなくて良いから、考えてみてもらえるだろうか？」

「……あの…」

漸く、小さな声で返答があった。

「…きっと、困ると思うんですけど…コントラバス…オレが入った事、本当に喜んでくれたし…。それに、やるって言ったのはオレだし…」

サガは、何も言わず黙って頷いた。そんなことはない、とは言えない。それは、事実だったからだ。

だが、結局、義理で続くものでもないことを、サガは知っていた。この学校のカリキュラムも、オーケストラの練習も、それほど甘くはないのだ。

だから、一言だけ尋ねた。君は、コントラバスが好きなんだね？　と。

「はい。…ただ、バイオリンも嫌いじゃないです。…でも、本当に、オレもどうしていいのか全然分からない…。だから、考える時間をくれるって言ってもらえるなら有難いです」

やっとのことでミロがそれだけ言い終えた頃には、話を始めてから既に三十分が経過していた。もうじき、団員が集まって来る。サガはとりあえず前向きな返答を貰った事にほっとして、ミロの肩を叩いて立たせた。

「有難う。ゆっくり考えてくれていい…決まったら、私のところまで連絡をくれるかな？　寮の部屋は三階の三二四室、君と同じハウスだ。できれば、来週あたりには答えを聞かせてもらえると有難いのだけれど……」

ミロは、最後までしっかりとサガの視線を受けていた。そして、黙って椅子から立ち上がりそれを畳むと、ようやく一言口にした。

「分かりました。考えます。……失礼します」

カミュが再び八角堂に戻ってみると、既に団員は集まり始めていて、練習の準備が始まっていた。慌てて部屋を見渡すと、一番奥の隅でコントラバスに埋もれるようにして、ミロが一心に音階を練習していた。

その表情は、最後に見た表情と同じく、固く強張ったままだ。

サガの用事が何であったのか、その表情が全て物語っている気がして、カミュは胃の底に鉛を飲んだような冷たい後悔に襲われた。

きっと、ミロはヴァイオリンへの転パートを迫られたのだ。ヴァイオリンは今、切実に経験者を欲しがっているから。

心底、己の迂闊さを悔やんだ。ヴァイオリンは、経験者を欲しがっている。知っていたのに、なんと軽々しく喋ってしまったのだろう。ミロのヴァイオリンの経験を。

心の底に、サガとアイオロスの友情に対する信頼があった。かなり早いうちにオーケストラへの入団を決めてしまったカミュは、コントラバスやヴィオラの五年生が躍起になって人集めに奔走する姿を目の当たりにしてきた。アイオロスがどれだけ苦労して新入生を集めて来たか。ましてミロは、その一人目だったのだ。

まさか、そのコントラバスパートから引き抜くような真似はすまい……

その思いが、口を軽くしてしまった。

今にして思えば、親友だからこそ、アイオロスはサガにミロの転パートを許したのかも知れないのに。

「カミュ、カミュ！　四楽章からだ！」

考え込んでいたら、童虎に肩を掴んでゆさぶられた。
「どうした？　ぼうっとして。始まるぞ！」
「はい…すみません！」
慌てて、童虎の楽譜を借りて清書しなおした自筆のオルガン譜を広げた。今は音楽に集中しよう。いずれにしても、ミロとは一度話さねばなるまい。
…きっとミロは、ヴァイオリンの経験については語らないつもりだったのだろうから。

その日の合奏は、いつもより長引いて食事時間に食い込んでしまった。カミュは終わるなり初心者が集められている練習部屋に駆け込んだが、新入生たちは既に解散してしまってミロの姿はなかった。

翌日、カミュは昼食の時間にミロを訪ねた。ミロはいつも、アイオリアや同室の仲間たちと昼食をとっている。楽しそうに談笑しているところを邪魔するのは気が引けたが、時間を作ってもらえないか、と頼んだら意外にも今すぐでかまわない、と返答が返って来た。カミュはミロと連れ立って、音楽棟の裏の芝生に面した小径へ向かい、ベンチに腰を下ろした。
「つき合ってくれてありがとう」

時間を作ってくれたことに例を述べたら、かまわないよ、と明るい返事が返って来た。
「それで、話って？」
「その…昨日のことなんだけど……」
存外明るく見えるミロの姿に、ほんの少し戸惑いを覚える。カミュが誘いをかけた理由が分からない筈はなかった。気を遣ってくれているのを肌で感じるから、余計に辛い。
「…サガ先輩に君のことを色々話してしまってごめん。軽はずみだったと思ってる……」
ようやくそれだけ押し出したら、びっくりしたような声が返って来た。
「いや！　君は何にも悪くないよ！　ただ…その…自分の気持ちの問題ってだけだから恥ずかしいけど…だから、ホント、気にしないでいい」
「サガ先輩の話って、転パートのことだった？」
「……うん……」
ミロは、否定しなかった。様子を伺っただけでなく、はっきりと転パートをもちかけられたのだとカミュは悟った。
「ごめん…僕がよけいな事を言ったから……」
「え…？　何が余計な事？」
「君がヴァイオリンの経験者だって漏らしてしまっただろう？　サガ先輩、今年の新入生はヴァイオリンの経験者が一人もいないって、随分前から経験者を探してたんだ。ヴァイオリンはやっぱり、いずれコンサートマスターになる人材を育てないと

いけないから…僕が余計なことを言わなければ、サガ先輩だってそんなにあからさまに転パートを持ちかけなかったかもしれない」
「え、そんな事！　いや、要は自分が弾けないから恥ずかしいってだけで、経験者とかそんな風に言われて誤解されると少し困るけど、でもそれは俺の問題だから…結局君は何も悪くないと思うよ。俺だってまさかそんな話だなんて思ってもいなかったし」
「でも、サガ先輩に頼まれたら、君はなかなか断れないんじゃないのか？」
　あれほど熱意を込めて『憧れ』を口にした相手の頼みをそう簡単に断れるわけがない。少なくともカミュはそうだし、あのときのミロの情熱もその結果を想像させるに十分足るものだった。しかし、ミロははっきりと首を横に振ったのだった。戸惑いの欠片もなく。
「いや。そういうのは関係ない。断るんなら断るし…。ただ…ホント、自分の問題なんだ。多分…」
　ミロのことを掴み難い、と思ったのは、これが最初だった。化学実験で見せた驚くべき集中力、尊敬する人物に対して、普段の派手な行動からは信じられないほどシャイな一面があるかと思えば、それほどの情熱を傾ける相手からの頼みでもきっぱり断れる、と言う。
「それならいいけど…」
　ミロが本当にそう出来るのなら、これ以上自分が思い悩むことに意味はない。ただ、カミュはそうしたいと思っても出来ないことがある事を知っていた。案外ミロは、本当に言葉通り誰に遠慮することなく道を選んでしまうのかも知れない。だが万が一、迷ってしまうことがあるなら、その時に背中を押せる存在になりたかった。多少なりとも、彼の前の道に分岐路を作ってしまった人間の責務として。
　午後の始業の予鈴が鳴った。カミュは立ち上がり、再度礼を述べて右手を差出し、真摯にミロを見詰めて言った。
「こんなこと、僕が言えることじゃないけど、やっぱり自分が一番やりたい楽器をやるのがいいと思うよ。五年間続けるんだし、誰かに遠慮したりする必要はないと思う」

Epilogue

　一連の事件の決着は思ったより早く、四週目の水曜日についた。そう、それはまさしく事件だった――人が溢れているはずのヴァイオリンパートに、人が足りなくて窮々としているコントラバスから転パートが出たのだから。
　アイオロスを初めコントラバスの上級生はがっくりと肩を落とし、ヴァイオリンパートの上級生はひっそりと集まって胸を

撫で下ろしていた。ただ一人、セカンド・ヴァイオリンのパートリーダーを勤める今回の人事異動の仕掛人だけは、役目と友情との板挟みになって胸中に苦い思いを隠していた。

カミュは勿論、上級生の動きなど知らなかったが、上級生の部屋のある三階から降りて来たミロを見て彼が心を決めたのを知った。ミロの頬は上気していたが、その眼差しは既に揺るぎないものとなっていたからだ。

「ミロ！」

仲間のもとへ戻り、いつものやんちゃな少年に戻ってしまう前に、どうしても聞いておかねばならないことがある。カミュは、降りて来たミロを二階と三階の真ん中の踊り場で呼び止めた。

「……決めたのか？　転パートの話……」

ミロは、まだ緊張の抜けない面持ちで、それでも少し微笑って言った。

「うん。そう。ヴァイオリンに入れて下さい、って頼んで来た」

「ヴァイオリン……」

カミュは、一瞬息を飲み、それから僅かに瞳を伏せた。ああ、やっぱり……。

「…君は、本当にそれでいいんだね？　無理をしている訳じゃないんだよね？」

「無理なんてしてない。多分、コントラバスをこのまま続ける方がきっと無理になるんだ。…あ、でも、コントラバスに今まで無理に居たって訳でもないんだよ？」

きっぱりとしたミロの返事を聞いた途端、カミュは、己の中に飲み込んでいた欺瞞の虚像が砕け散るのを感じた。

…分かっていたじゃないか。こんなことを聞いたって、ミロは無理なんてしてないと言うに決まっている。

分かっているのに訊ねてしまうのは、ミロの本当の気持ちを知りたいからだった。言葉を重ねれば、その内に透けて見えるかもしれない本心を見たい。なぜなら、己が安心したいから――。

ミロは本当に心からヴァイオリンを選んだのだと、安心して眠りたい。あるいは、無理をしていると分かったならば、ミロがコントラバスに戻れるよう、ミロの代わりに何度でも交渉しよう……。

随分と失礼な話だ、とカミュは思った。自分は何も曝け出さずに、相手の本心を知りたいなどと。

これ以上尋ねるのはミロに失礼だと思い至り、それならよかった、と笑って言おうとした時だった。

ミロが、懸命な眼差しでカミュの双瞳を覗き込んで来たのだ。その真剣な瞳の美しさに、胸を掴まれた。何かを伝えようとする意志が、言葉よりも雄弁にカミュの意識に突き刺さった。また、あの不思議な予感が彼を包んだ。多分、これから何かが起こるのだ。彼の想像もしない何かが。

息を潜めて次の行動を待つカミュに、ミロが眼差しを上げたまま語り始めた。

「…オレ、ここに来るまで、バイオリンやっていたんだ。でも、

周りには男でそういうのやっている奴ってあんまり居なくて…。結局それが分かるとからかわれるんだ。それで、バイオリンやってるって人に知られるのが嫌だった。バイオリンや、音楽って、オレにとっては凄く好きな事で、好きだったら胸を張っていればいいんだけど、それは分かっているんだけど、好きなものだからこそ無神経にからかわれるのも辛くて、それで、ここに来たら授業で勉強する以外絶対に言うもんか、って思ってた。」

踊り場の出窓にはめ込まれたステンドグラスから、薄い月明かりが零れてミロの金髪に散っている。カミュは、何か知らない生き物を見るように、じっとその光の中心に輝く二つの瞳を見詰め続けていた。何か、この少年と自分との間に固く存在していたものが、唐突に消滅してしまったかのように感じられた。何故、彼は唐突に彼の内面を語り始めたのだろう？　いつの間にか、自分は彼からこんな告白を受けられる程に近付いていたのだろうか？

「でも、オーケストラの練習見て、分かったんだ。サガって、凄く綺麗だろ？　言っちゃ悪いけど、女の子みたいに綺麗だろ？　でもって、バイオリンを弾いてる。でも、からかわれたりなんてしてない。寧ろ、凄く尊敬されて、大事にされてる。それ見たら、なんか、分かったんだ。オレ、バイオリンでからかわれてたんじゃないんだって。…バイオリンとか、音楽とかじゃなくて、オレ自身が、…ダメでからかわれてたんだって。」

ミロの言葉は正しい。人の感情というものは、我々が考えるほど外見や装飾に誤摩化されたりしないものだ。からかいたくなるのは相手の弱さが透けて見えるからであり、ヴァイオリンだの髪の毛の色だのは、結局のところその衝動を正当化するためのこじつけに過ぎない。カミュはそのことを既に身を以て知っていたが、その苦い体験を誰かに告白することはおろか、自分の中で言葉にして反省したこともなかった。

思い出すだけで自分自身に嘔吐感をもよおすような出来事を、何故にわざわざ言葉にしなくてはならないのか。

開き直りだと自分でも分かっていたが、そう自覚したからとてどうなるものでもなかった。

それを、今ミロはいとも簡単にやってのけている…。

いや、決して簡単に、ではないのだろう。ミロは自分の理屈で、この件に関わってしまった人間に説明義務があると信じての行動なのに違いない。

「そう気が付いたんだけど、バイオリンはもう定員オーバーしてただろ？　だから、正直どうしようかと思ったんだけど、ロスが初心者でも面倒見てくれるってコントラバスに誘ってくれた。それで、オケなんてやったことないから、少しでもそういうのに触れられる機会があったらいいって、それがコントラバスだったら、オレ、低音部が好きだからそれでも十分嬉しいと思って有難く入団させてもらったんだ。で、入ってみて、十分コントラバス楽しかったし、みんないい人ばかりだったから、ちゃんとコントラバスとしてやっていこうって思ってたんだ。」

そこでミロは言葉を切り、ほんの少し、唇を噛んだ。言葉を

生み続けることへの躊躇いは、しかしすぐに決意に取って変わる。

「でも、サガに、バイオリンで経験者が居ないから考えてみてくれないかって言われて…。別に、自分が弾けるって自惚れているわけじゃない。それは違うんだけど、あの人の側で弾く事が出来たら、自分に取ってそれはどんなに糧になる事だろうって、そう考えたら、情けないんだけど、本当に無責任だとは思うんだけど、もし今からでも転向してもいいって許してもらえるんなら、一杯一杯頭下げて、そっちに行かせて貰いたいと思った。」

ミロ、もういい。もう、そんなに曝け出さなくてもいいから。

そう、言ってやりたかった。けれど声は出なかった。

当たり前のことなのだ。軟弱とからかわれるのが嫌だということも、それが自身の所為であることも、安定な居場所を求める一方で、本当の望みを追求してしまうことも……。

だが、それらを素直な内省と共に認めることの出来る人間が、どれほど居るだろう……。

ある者は、それが生身の人間だ、と内省を忘れ、またある者はより見栄えのよい口実にすり替え、そしてある者は敢えて言葉にすることを拒み無かった事にしてしまうのだ。カミュがそうであるように。

「もし、ロスとサガと二人が並んで楽器を弾いていたら、オレはどっちを見るだろうって想像して見た。答えは、すぐに出たんだ。きっとサガだ。サガを一生懸命見ていると思う。コントラバス弾きになろうって思うんだったら、オレはロスを見たいって思えなきゃダメだ。だから、コントラバスは嫌いじゃない。寧ろ好きだ。でも、それは、バイオリン以上じゃない。」

ミロが、深く息を吸った。

「自分にとって一番何がやりたいか決まっているなら、それがやれるチャンスがあるなら、無責任でもいいって決めた。ロスやコントラバスの人には一杯一杯頭を下げようって。無責任でも、自分にとって大切なものから逃げるようなまねは絶対にしない。そういうふうにしか出来ないって、諦めた」

それから、ふと優しい眼差しになって告げた。だから、カミュの所為ということは何もないのだ、と。

カミュはしばらくの間、息をつけずにいた。滔々と流れるミロの言葉に胸が飽和して、ひとつひとつの言葉を感慨で捉えるにはまだしばらく時間がかかりそうだった。このように語ることは、ミロにとって何の苦もないことなのか。そうではない、とカミュは思う。言葉だけの反省は誰にでも出来る。だが、ミロの自省は、実際に悩み、傷付き、後悔と羞恥に塗れた者の生の肉声なのだ。

ごく自然に、頭を垂れた。それはカミュが本当に心から脱帽した、人生で最初の瞬間だった。

「ああ…なんだ。安心した。それじゃ、本当に君は火から君の意志でヴァイオリンを弾くんだ……」

「うん。最初からそうだって言ってるじゃないか！」

ぷっとミロがふくれた。確かに、彼は昨日カミュに宣言した

言葉を守り通したわけだ。その子供っぽさがおかしくて、カミュもついに破顔した。
「失礼…そのうち、君のヴァイオリンを聞きたいな」
「え…？　なんで?!」
「君、僕のピアノ聞いただろ？　だから、君のヴァイオリンでおあいこ。」
ミロがぱちくりと大きな目をしばたく。こうして見ると、さっきの存在感はどこへやら、どこにでもいる普通の少年に見える。
「ええっ？　そんなのあり？」
「なしでもいいけど、君がヴァイオリン聞かせてくれないなら僕も二度と君の前では弾かない」
「ううっ……」
ミロは、先輩の部屋に行くのに合わせて折角櫛を入れた髪を両手で掻きむしった。そこへ、階下から焦れたようなアイオリアの声が飛んだ。
「おーいミロ！　いつまで話し込んでるんだ？　ナポレオンの人数足りないんだ、早く降りて来いよ！」
「いっけね…忘れてた！　ナポレオン抜けて来たんだった！」
二段飛びで階段を降りかけ、ふと踊り場に取り残されたカミュを振り返る。それから二秒ほど首をかしげ、再び踊り場に戻り、カミュのシャツの袖を掴んで勢い良く引っ張った。
「リア！　ナポレオンメンバーもう一人追加！」
「ミロ?!」
カミュもつんのめりながら、階段を駆け降りる。
「馬鹿野郎！　六人になっちまったらまた面白くねーだろ!!」
階下から、アイオリアの怒鳴り声と、少年たちの笑い声が響いて来た。

ある秋 (Side vision of Aiolos)

一

「俺達が不甲斐なかったばっかりに…」
「任せて下さい」
かくして開戦の矢は放たれた。

新入生で混み合う中庭をすり抜けながら、アイオロス・ヴィンセント・エインズワースは、今後の計画を着々とその頭脳に構築させていた。珍しくも真っ青な空が頭上に広がり、乾いた風が彼の榛色の髪を揺らしていた。
肩が軽く中年の紳士然とした男にぶつかった。
「Sorry!」
と短く謝罪したが、彼の大きな歩は変わらなかった。アイオロスはきっぱりと歩いた。彼のゆるぎなく伸びた体を覆って余りある活力と高揚感は、周囲に散逸し十目を止めずにはおれなかった。
と、半分程渡り掛けた所で、彼は銀色の影を見咎め伸び上がるようにして一瞬歩を止めた。そしてぐるり中庭を囲む外廊を、学舎の裏に伸びる広大な敷地に点在するハウスに向かって歩いていたのであろう一人の少年に向かって声を掛けた。
「サガ!」
銀色の頭髪が柔らかく巡り、淀みない足取りで近づくアイオロスに、サガと呼ばれた少年の新緑の瞳が優しく滲み答えた。彼は、サガ・エセルバート・チェトウィンドと云い、ソールズベリ伯の長男だった。
「なに?」
すっかり目前に到着したアイオロスの視線は、サガを見下ろしている。
サガもその血筋から平均値より常に数インチは加算された身長を有しているが、夏期休暇からこちら、アイオロスの背は春の若木のように伸び続けていて、彼等の間にはいつの間にかはっきりと意識できる程に視線に角度が生じていた。
「お前、これから暇?」
二人の脇をすり抜けていった数人の生徒団が、ぎょっとしたようにアイオロスを振り返った。
今年二月の事だった。恒例のハウス対抗行事、取りを飾るのは大ホールでの晩餐会なのだが、これには必ずハウス毎に女装した生徒とエスコートする生徒を仕立て票を競う。評価されるのはエスコートする生徒の側なのだが、どうしても女装した生徒が騒ぎの対象となる。夜会服(ローブデコルテ)をまとい正装した「令嬢」として登場したサガは、以来全校生徒の注目の的になっていた。
それまで、貴族と言う出自に加え物静かな生徒である彼に

遠巻きだった連中が、以後急速にサガ・チェトウィンドとの接点を求めて犇めいた。そして、入学からこの方ずっと同室で「友人」であるアイオロスへ抱く他学生等の心情は、今まで距離を置いてきた彼等自身の後ろめたさとすり替わり屈折した羨望になっていた。

おまけに、それまで漠然だった貴族の出という認識が、ソールズベリ伯爵の嫡子と言う認識にもすり替わった。そんな存在に、いかにも砕けた話し様は、彼等の大分の驚愕を引き起こした。アイオロスにして見れば、それは入学当初から一貫して変わらない、ごく当たり前の態度であるのにもかかわらず。

さて、暇かと尋ねられたサガ・チェトウィンドは、馴染みの深い友人であるアイオロスにしか見せない笑顔で空いていると答えた。

「じゃあ、すぐ部屋に戻るから待ってて」

気持ちよくサガの都合を確保出来たアイオロスは、サガの肩を軽く叩くともと来た道を今度は早足で戻って行った。アイオロスの暴挙を目にした集団から小さく避難の色が飛んだが、サガも気にすることはなく、優雅と呼べる足取りでその場を離れた。

二

「これに、書くのか？」

サガはXLサイズの真っ白なTシャツを見つつ呟いた。

サガが部屋に戻って十分後、勢いよく扉を開けて入ってきたアイオロスの手にはショップの袋が有った。

「そう。これに、デカデカと広告を書く。新入生募集！　大歓迎！　コントラバス！　ってな」

今度はまじまじとアイオロスの顔を見て、サガは口を開いた。

「まさか、それを来て歩くのか？」

イエス！　と大きく笑むアイオロスにサガは圧された。

「授業は制服で受ける決まりだろ？」

「そう。だから、制服の上に着る。制服の上にシャツを着ちゃいけないなんて規則はないだろ？」

アイオロスは、得意顔で言い放った。サガは自分の良識範疇にはない考え方に、深く息を吸い直して呟いた。

「それは…そうかも知れないけれど…」

「まぁ、最初の一発が勝負だな。目をつむってやろう、って教授に思わせればいいんだ。三週間か、二週間の間」

「新入生歓迎会までって事？」

「そう。とにかく今年は何が何でも入って貰わないと…」

腕組みをして深く椅子に座るアイオロスは顰め面に呟いた。

「やばいなんてもんじゃない…」

九月、パブリック・スクールの第四学年以上の生徒達は自クラブへの新入生勧誘に躍起になる。特に、第五学年の学生は、引退を控えた上級第六学年、今後一年間指揮をとる第六学年、新入生からやっと一年を経た第四学年に挟まれ一番自由度が高い学年で、上三学年生から正式に勧誘の指揮を任されていた。

アイオロス・エインズワースは、スクールチーム・オーケストラのコントラバスに所属していたが、この私立学校に入学するまで、楽器の類いには触れた事も無かった。

入学当初、アイオロスは、同室となったサガが敬遠され、クラスの異分子のように在った事と、世間に疎い様を見かね、子分でも従える気持ちで面倒を見て居た。その折りサガがこの学校のオーケストラに入ると言い出したので、取り敢えず付添といった軽い気持ちで見学に訪れた所を、当時から大柄だった体格を見込まれ強引に引き込まれたのだった。

楽譜もまともに読めなかったものがこうもよく続いたのは、気さくな上級生の魅力もさることながら、数十人からなるオーケストラという楽器に、彼が魅了されたということだろう。

オーケストラは不思議な楽器だ。幾種類もの楽器が鳴ったり、止まったり、揺れたりしながら広大な一瞬の幻を作り上げる。如何に録音に残しても、それは過ぎ去った影のようなものに過ぎず、その中に楽器として埋もれていた自らの情熱は、眺めるだけでは味わえない。個性に溢れる人間と楽器達が、まさしく呼吸を合わせて築き上げるものがオーケストラの音だ。その中で、コントラバスは基礎の部分を受け持つ楽器であり、他の高音楽器を更に軽々と歌わせてやるパートだ。テンポをキープしつつ、全体に目を光らせ、骨格を揺るぎなく積み重ね、構築される音楽を抱え上げる。

これ程面白味のあるパートも無い、とアイオロスは考えるのだが、世間ではそうではないらしい。とんとオーケストラのコントラバスには人気が集まらない。

人が集まるのは、バイオリンやフルート、トランペット、チェロやトロンボーンなど、より個性的で独創性の高い楽器だ。

現在のコントラバス・パートの構成は上級第六学年が二名、第六学年二名、第五学年の自分が一名の計五名だ。

昨年の新入団員は無く、間の悪いことに第六学年のクリス・ロージャーは来年からアメリカに渡る事が決まっていた。十二月の定期演奏会終了後、一挙に二名にまで激減してしまうと言う事態に、パート内の危機感はかつて無いほどに高まっていた。

「俺達が不甲斐なかったばっかりに…」

昨年新入生を確保出来ず、その上転校まで決まってしまったクリスに深々と頭を下げられ、アイオロスは言い切った。

「任せて下さい」と。

そして、アイオロスの新学期は始まったのだ。クリスは、アイオロスにコントラバスの楽しさを教えた最初の先生だった。クリスの丸めた背の向こう、ふと見上げた窓の外を、雲

が早足で流れていた――――。

「ぼーっと待ってたって新人生は来ないよな…。よし！　サガ、それ、頼んじゃっていいか？　俺、一巡りしてオケに行くから」

サガのいいとも、厭だとも聞かぬ間に、アイオロスは回想の輪を断ち切って立ち上がり扉に向かった。慌ててサガは呼び止めた。

「構わないけど、本当にこの通り書けばいいのか？」

「そう！　俺が書いたんじゃ読めないから、読めて、目立って、格好よければなおいいって感じ」

「…君の言う『格好いい』が私にはよく理解出来ていないと思うんだけど…」

「構わないよ、サガのセンスでやってくれ」

「そういうのが一番難しいんだよ」

アイオロスは、構わない、と再三繰り返し部屋を出ていった。後に残されたサガは、ため息をついて真っ白の布を見つめた。

三

人好きされる気さくな笑顔で、アイオロスは目ぼしい新入生に声を掛けていた。新学期が始まりまだ三日と日は浅い。どの新入生もまだふらりふらりと落ち着きが無く、アイオロスの誘いにも消極的だ。

そろそろ練習の時間が始まる。そう思って一先ず区切りを付けようと踵を返しかけた時、アイオロスの目に見慣れた弟の、真新しい制服をまとった姿が飛び込んできた。

アイオロスの弟、アイオリア・エインズワースは、今年から兄と同じこのパブリック・スクールに通うこととなった。アイオロスとは髪の色も瞳の色も異なる上に、ストレートと癖毛という髪質の違いも手伝って、まず一目では兄弟と見られない。彼等の両親を見て、人は初めて皆納得したものだ。つまり、アイオロスの榛色の癖のない髪と琥珀色の瞳はまったくの父譲りであり、軽く波打つ明るい金茶色の髪とピーコックグリーンの瞳のアイオリアは母似なのだ。

その弟が、丁度中庭の向こう側を、友人と思しき少年と二人連れに歩いていた。よほど気が合うのだろう。弾けるように二人して笑い歩く姿は、兄としてのアイオロスを少なからずほっとさせた。

弟より小柄で飛び跳ねるように歩く、恐らくこの学校で始めて出来たアイオリアの友人は、夕日に映える素晴らしい金髪をしていた。その印象が、とても強くアイオロスに残った。

四

一週間後、美しい組文字とカリグラフィーによってコントラバスの応募を募るTシャツは、学内中に知らぬ者はなしという状態になっていた。

出来あがったTシャツを両手で広げ、サガに感嘆の言葉を惜しまなかったアイオロスは、今では毎日制服の上からそれを被りハウスでの朝食から、就寝の時間まで、何処に行くにもそれを身に付けて歩いていた。

教授連には、持ち前の機知とユーモアで対処し、なんとか彼の目論見通り苦笑の中に三週間の許可を取り付けている。最初は冷やかしばかりだった言葉掛けも、徐々に彼の成果を尋ねるものに変わり始めた。

「アイオロス！　新入生は入ったか？」

「まだだ。中途採用も受けてるぞ？」

同学年のデスマスクに按配を尋ねられ、笑ってアイオロスは答えた。お互い手を振り合って別れ音楽棟に向かうと、リハーサル室からなにやら雑然とした雰囲気が溢れていた。

ひょいと中を覗き、アイオロスはまさかという思いに包まれた。パーカッションパートに新顔が居るのだ。慌てて中を突き切り同学年のチェロパート、シュラ・アレクサンダー・コーツに尋ねた。

「何？　見学？　それとも決定？」

「決定だ」

ちら、と黒い瞳をアイオロスに向けるとシュラは短く答えた。

「参った……！　嘘だろう…」

アイオロスは前髪を掻き上げ、呆然の体でパーカッションパートを見詰めた。

パーカッションなど…、普通は来ない。もともと募集人数も少なく、一学年に一人も居れば十分というパートだ。それなのに、何故あそこには新入生が居て、コントラバス・パートには余りにも馴染んだ顔しかないのだ。

物欲しげにパーカッションをちらちらと盗み見ている上級生達の姿が無性に悲しかった。彼らの視線を辿れば、鮮やかな紅深の髪をした少年が、童虎に付き添われ楽器の間に埋もれていた。

喘ぐ様に息をし、立ち竦んでいるコントラバス弾きに、更に追い討ちをかけるチェリストの一言が続いた。チェロパートは経験者一名、未経験者一名の希望が既に出ていた。

「サン＝サーンスのオルガンも奴で決定だ」

「……マジかよ…」

がっくりと首を落とし、掻き上げていた手を首裏に回していたアイオロスは暫くじっと瞑目していたが、やがて短く息を吐くと言った。

「しゃーない！　まだ入らんと決まったわけでなし……」

黙って同室の友人を見遣っていたシュラが、面白そうに口

の端を上げると弓手で譜面を捲りながら続けた。
「ちなみに、バイオリン・パートは定員を溢れたぞ」
「あーぁ…、あそこは別格だろ。比べる気にもならないね」
アイオロスは視線の先に、かちこちに固まって椅子に掛けている新入生の間を、縫うように歩いては屈み込み、指示を与えている銀髪のサガの姿を捉えながら答えた。
「アイオロス！」
管パートの方から声が上がった。ファゴットのフレドリック・マコーマックだった。アイオロス、シュラ、サガ、デスマスク等スミス・ハウスの監督生を勤める上級第六学年のスコットランド人だ。
アイオロスは、黙ってシュラに軽く片手を上げて席を外すと、フレデリックの隣に向かった。
だが、アイオロスは腕を引かれ、管パートから外れ、部屋の隅にまで引きずられた。そして、潜めた声出で話しかけられた。
「アイオロス、お前の弟も今年入学して同じハウスだったよな？」
「ええ。そうですけど、何か？」
アイオロスは話の方向が見えず、当たり障りない返答をして宴会好きなファゴット吹きの次の言葉を待った。フレデリックは、アイオロスに詰め寄る様に迫りながら尋ねた。
「お前、今年のうちの新入生見たか？」
「一通り見てると思いますよ」
「そうか。じゃ、お前、先週の金曜日に騒ぎを起こした新入りは見たな？」
「あぁ…あの…。ロウ・ハウスの四人組とスカート穿いて喧嘩した？」
アイオロスは首を捻って、ギロリと自分の顔に標準を当てるフレデリックの目を見返した。
寮の監督生だ。当然、その喧嘩の中に弟のアイオリアが居た事も知っているだろう。騒ぎを起こしたのは第五学年の四人と新入生三人。スミス・ハウスのハウス・マスター に連れられて戻ってきたのは、馴染みの弟と、短い毛をつんつん立たせたひょろりとした少年、目の悪そうな少年、それから、いつだったか弟と一緒に歩いていた金髪の小さいのだった。どうも、その小さいのが無理矢理真っ赤なスカートを穿かされたらしい、と言うことはあっという間で寮中に広まり、アイオロスも放談として耳に入れている。十中八九、フレデリックがこれから話題にのせようとしているのは、その金髪の小さいのだろう、とアイオロスは考えた。
そして、アイオロスの読みは違う事無く、フレデリックは、
「あの、金髪の方な」
と呻いた。
「昨日もハウスマスターに、二回呼び出された」
「は？」
「昨日、町に出て、地元の子供と取っ組み合いやらかした」
「……」

「そのあと、シャワールームのドアにスカート穿いた似顔絵のピンクチラシ貼り付けられてる現場押さえて、貼ってた奴ら追い掛け回した挙句、立て篭もった食堂のドアガラスを勢い余ってぶち破り、本人は救急車で搬送された」
「あぁ…それで…」
今朝は食堂のドアの覗き窓にぽっかり穴が開いていたのか、とアイオロスは納得した。が、言葉には出さないでおいた。横のフレデリックから、陰々とした気が迫っている。
「お前の、弟、仲良いらしいじゃないか」
入学して一週間。同室の人間と「仲」がなかったらそれはそれで問題だろう、とアイオロスは思ったがこれも口に出すのは止めた。
「どうにか、ならないのか？」
微笑みながら睨まれても、返答に窮する。アイオロスは、思案の証に眉を寄せて見せて言った。
「弟にどうにかしろ、と言えと？」
フレデリックは肩で息を吸った。そして。
「止めろよ！　止めさせろよ！　仲いいんだろ？」
蛇がしゅーしゅーと舌を鳴らすように言葉を吐いた。幾分その気迫に押されたものの、アイオロスはそれでも飄々と答えた。
「堅気の奴に手を出してるわけじゃないんだし、暫く様子を…」
「アイオロス！」
フレデリックの大声に、オケの面々が振り向いた。フレデリックは、アイオロスの首に太い腕を回すと、それをぎりぎりと締め込みながら囁いた。
「オマエナァ、先輩の頼みが聴けないって言うのか？　俺の、監督生としての面子を潰そうっていうのか？　さてはロウ・ハウスの回し者か？」
ギブギブ、とアイオロスはフレデリックの腕を叩いたが、彼の目の色は変わらなかった。
今年は新入生の当たりが悪かったのだ、と監督生を気の毒と思いつつ、アイオロスは件の新入生を少なからず面白いと思い始めていた。小さいくせに全く物怖じしないらしい気性、無鉄砲に感情のままに動く覇気、そういったものが、アイオロスは嫌いではなかった。
今は、自分のパートの人員確保が最大重要事項だ。監督生の心痛は、監督生自身で解決してもらおう、と内定を出した時、彼の耳に先程までとは打って変わる声音が降った。
「金髪蒼眼の美人なんだよ…。ちょっとヤバイんだって、ありゃ…」
弱った…と滲む声。
『美人』と称したフレデリックの言葉に、知らずアイオロスの目はサガの姿を追った。
ヤバイというのなら、サガもこの二月からかなり都合の悪い事体になっていると思うのだ。サガ本人が、上手く事を公にしないように務めているので気付く人間はかなり限られた者だけになっているが、件の仮装から上級生、同学年は言う

に及ばす、下級生からも誘いが来ているらしい。
その内勘違いした輩が、思い詰めたあまり傍迷惑な結果を選びはしないか、アイオロスはそっちの方が余程窮迫の事態だと思っている。あまり目に余るような者が出てきたら、アイオロスからフレデリックにそれとなく助力を願い出ようかと考えていた程だ。
「湖水地方の結構鄙びた所から出て来たらしいんだ。親類なんかもこっちには全くいないらしいし…。兎に角、何かあってからじゃ遅いんだよ。去年はバーミンガムの方で自殺があっただろう?」
自殺という言葉に思考を引き戻され、アイオロスは思った。ここまでフレデリックが食い下がるということは、ハウス・マスターか監督教官あたりから言い含まされたのかもしれない。
「分かりました。弟には言いっときます。ついでに俺も気を付けときます」
監督生に、またその裏に居るのであろうハウス・マスターや教官に恩を売っておくのは悪くない。打算に裏打ちされた親切を申し出るとフレデリックは安堵の息を漏らした。ようやく首に巻きついた腕が緩み、アイオロスは小さくため息を付いた。
「弟からそれとなく、定期的に情報を聞き出してくれよ。名前は、ミロ・アーヴィン・フェアファックスって言うからさ」
フェアファックス! 聴いた瞬間、アイオロスは吹き出しそうになった。
フェアファックスとはつまり『Fairfax』だろう。とすれば、意味するところは『金髪』だ。しかも『Fair』という言葉自体が、美しいとか綺麗、清い、などといった意味合いを持ち、語尾に『fax』を付ければ、フェアリー、つまり妖精となる。なんとも分かりやすい姓ではないか。そう思った所に、フレデリックに声が掛かった。
入り口に、新人生の顔と第五学年のファゴット奏者のイリヤの顔が並んでいる。つまり、音が出るまで三年と言われるダブルリードに入団希望者がやって来たということだろう。手には黒く重そうなケースを持っていることから、少なくともブレッブでかじるか、本格的にやっていたのだろう。
宜しく頼むぞ、ともう一度アイオロスに念を入れてから、フレデリックはいそいそと呼ばれた方へと去っていった。その足取りが踊っているようだと見るのは自分の僻みだろうか。アイオロスは去る者の背を睨め付けそうになる自分を押さえ、張り付いていた壁から背中を引き剥がした。そして、練習を始めるべくパートに戻ろうと歩き出す。
その時、今度はヴィオラ・パートの第五学年アンドリュー・シーファに呼び止められた。次は何だと足を止めかける。とても済まなさそうに、アンドリューが十センチ幅の布を差し出した。
「アイオロス……、凄く悪いと思うんだけど、これもついでに付けてくれないかなぁ…」

差し出された布を手に取って見ると、布は輪になっており、そこには太々とヴィオラ・パート募集中とかき巡らされて居た。ご丁寧に安全ピンも付けられている。

「……何だ？　これ…」

アンドリューは乾いた笑顔を見せた。その後ろに、同じように乾いた笑顔が四つ、アイオロスに向かって並んでいる。アイオロスのきりりとした眉は手加減無く寄せられ、ヴィオラの面々は彼の冷ややかな視線の餌食になった。

五

食事の後に呼び出されたアイオリアは、約二週間ぶりに対面する兄の姿に口を開けて見入ってしまっていた。

「なんだ、馬鹿みたいに口を開けて兄貴を見るな」

「…だって、ロス…こないだ見かけた時よりもっと凄いことになってない？　そのTシャツ…」

アイオロスは眉間に皺を寄せ、被っているTシャツを見下ろした。

一番初めに描かれたサガの美しいモノグラムやアラベスクは、様々の弱小部活動の募集書き込みによって乱されていた。またさらに、書き込みだけでは飽き足らず、チラシを上から張り込まれ、背中の裾に、折角だからと物理教官自作のレポート提出期限を告知する尾ひれが張り付いている。

アイオロスはちらほらと食堂から出て行く学生達を目の端に捕らえながら、弟のコメントには答えず、腕組して廊下の壁に寄りかかると尋ねた。

「お前の部屋にフェアファックスって子がいるだろ」

「うん。…何？　ロスに何かやったの？」

「…何かやるような奴なのか？」

「……悪気はないと思うけど…」

アイオリアの表情は、一瞬硬くなり、次に恐々と窺うようなものに変わった。言葉は常に無く切れが悪い。

「ミロって、お前より頭半分小さい、くしゃくしゃな金髪頭している奴だよな？」

そうだと返ってきた答えに、いつだったかの夕暮れの光景が蘇った。では、やはりあの時の少年が『ミロ』なのだろう。

「ロス！　ミロ、何をやったの？」

弟の心配と必死さの篭った訴えにアイオロスは組んでいた腕を解いた。左手を腰に当て、右手で額をこする。

「なんにもやってないさ。ただちょっとな、お前のトモダチは目立つっていうんで心配してる人間がいるってだけさ」

「心配？」

「そ。苛められたりしないかってそういう事だ。ま、十分やり返しているように見えるんだけどな」

アイオロスの言葉を聞いたアイオリアは、ああ…と得心のいった表情をした。それをアイオロスは見逃さなかった。

「なんだ。心当たりがあるのか？」
「心当たりっていうんじゃないけど、まあ、からかわれやすいとは思うよ。物凄く反応が過敏というか…普通だったらそこまで真に受けなくてもいいのにって事でも真っ赤になっちゃったりとかするから…みんな面白がってるんだよ。…でも、すれてないっていうか、純粋な奴だよ」
十三の弟が『すれてない』だの『純粋な奴』だのと、一人前な口をきく、とアイオロスは可笑しくなった。
「追いかけっこぐらいなら可愛いけどな。流血は穏やかじゃない」
「うん。でも、ミロも分かって無いんだよ。みんなは、半分は面白がってるだけだし、羨ましいなってのもあるんだ」
「羨ましい？」
「だって、女の子にもてそうじゃん、あいつ」
アイオロスは盛大に吹き出した。
「なんだ、もうそんな話しが出てるのか？」
「うん。ミロを連れて街に出たいって言っている奴、結構いるよ。それで、こないだの日曜日に出たんだけど…」
「なる程な…まぁいい客寄せにはなるだろうな」
まだくつくつと笑いを納め切れていないアイオロスは、弟の顔を眺めた。
「元気が有り余ってるってだけならいいさ。でも、気を付けろ。こないだスクール・チャーチでお前らが向かって行った奴ら、性質のいい連中じゃない。まともに相手していると痛い目を見るぞ」
お前も小さくなる必要は無いが、出来るだけ無鉄砲は止めてやれ、と言い残してアイオロスはアイオリアと別れた。
フレデリックへの義理はこれで果たした、と一人決め、アイオロスはコントラバスの新入生獲得に意識を集中させ部屋へと階段を上った。
コントラバスに、一人でもいい、新入生が入ってくれれば…すれ違った一人の少年にTシャツを冷やかされて口笛を吹かれた。この際、新入生じゃなくても一向に構わないんだが、と内心で思ったアイオロスは、片手をあげて笑顔でそれに答えた。新入生が入学し、二週間が過ぎていた。

六

翌週、そろそろ頭数の揃ってきたリハーサル室では、新入生に指事を与え終わった上級生等がブルトに収まっていた。三ヶ月後に定期演奏会を控えている団に、客演として確保するしかないと思っていたオルガニストが入団したのだ。練習への熱が格段に上がっていた。
アイオロスはバス椅子に腰掛けると、コンサートマスターのザッツと学生指揮者の白いタクトを待った。
シオンが深く息を吸い込み、部屋に音楽が溢れた。

アイオロスはプルトの一番後ろで、オーケストラ全体を眺めやりながら演奏していた。

ファゴットのフレデリックは、アイオロスが弟に一言いったと伝えた事と、先週末に金髪の新入りが問題を起こさなかった事で随分落着していた。また、パート員の問題がつい先週の土曜日に解決した事で、一心に木管に向かっている。クラリネットもフルートもトランペット、トロンボーンの連面も落ち着いて演奏に集中している。ホルンも一人入団が決まったチェロは雑多な雰囲気だがこの状態が安定している印しだった。このパートにはあまり連帯感はない。ヴィオラの第五学年アンドリューの顔色は少々青い。上級第六学年を含めてやっと六人というパートに、新入団員ゼロはきついであろう。

弦パートは、一学年一プルトは欲しい。しかし、学生オーケストラなど、バイオリンを知るものこそあれ、ヴィオラの名前など始めて聞いたという人間もいる程この楽器の存在感は薄い。結果、いつもバイオリンは人で溢れかえり、ヴィオラは青息吐息の状態が万年化している。発音が悪く、中間音域を支える楽器だからこそしっかりと人数を確保しておきたいパートであるのに、常にこのパートは人員確保に難儀していた。

いつも以上に音を外しているアンドリューに、アイオロスは他人事ではない気鬱を感じた。コントラバスも、未だ入団希望者が現れていなかったからだ。

バイオリンの音が膨らんだ。コンマスであるシオンの堂々とした演奏と、第二バイオリンのトップに座るサガの姿が鮮やかに集団の中で映えていた。再来年のコンサートマスターは、間違い無くサガになるだろう、とぼんやりそんな事を思った。その時だった。アイオロスはサガに向かう一心な視線に気が付いた。静かにその視線の元を辿ると、わずと半開きにしていた扉の影から目の覚めるような金髪が覗いていた。

扉は、この時期少しでも新入生を獲得できるよう、音や練習風景が自由に見聞き出来るように開いている。中に入って勝手に見学して良いという事になっていた。

しかし一向に金色の頭は扉から内へは入って来なかった。そのうち、だんだんに少しずつ、少しずつ覗かせる頭髪の面積は広くなり、とうとう小さな不審人物の面が扉の影からはみ出した。

ミロ・フェアファックスだった。

アイオロスは適中した予測ににやりと笑いを浮かべる筈だったが、それは不発に終わった。

ミロは、呼吸も忘れているのではないかといった様子で、ただただひたむきに第二バイオリンの先頭席を見詰めていた。アイオロスはその後もサン・サーンスが終わるまで注意をミロから放せなかった。甘さの欠片もない、食い入るような眼差しがミロに対する第二印象となった。

曲が終わり、学指揮の注意が渡り始めると、ミロの頭髪は扉の影からすっと消えていた。

「クリス…！　ちょっと外す」

アイオロスは前プルトに着席し運弓の確認をしていた先輩奏者に声を掛け、静かに楽器を床に寝かせてから慌ててミロ・フェアファックスを追いリハーサル室を後にした。

「フェアファックス！　フェアファックス！」

音楽棟のアトリウムを、つんと頭を擡げて歩く少年に、アイオロスは大声を掛けた。二度無視されて、三度目にぐるり振り向きざまに青い瞳に睨み付けられた。脳裏に、ちらほらと入っているミロ・フェアファックスについての噂が弾けた。

曰く、生意気、不遜、自惚れ屋、気位が高い、喧嘩っ早い。

アイオロスは、ひとまず足を止めさせる事に成功した新入生に、俗受けする親しみを込めて話し掛けた。

「フェアファックス、さっきオケの練習を覗いていただろう？興味があるんならちゃんと中に入って見ていかないか？」

親指で今来た階段を指すアイオロスを、ミロは尚も詰めた眉間を解かずに見上げていた。薄い唇は硬く引き結ばれ、少しの事では開かないという意志が取って見える。

「フェアファックスって呼ばれるのが気にくわないか？」

アイオロスはにやりと笑った。さてどう答えるか、と様子を伺うとますます額に皺を寄せて唸るような返事を返して来た。

「好きじゃ無い。ミロかアーヴィンがいい」

「よし！　じゃあ、フェアファックス、さっきの返事はどうなんだ？　オケの見学はもうしないのか？」

呆気に取られてアイオロスを見上げる青い瞳は、険を忘れて緩み、その拍子に奥に隠された幼さが透けて現れた。年相応よりむしろ子供っぽいとも見えるミロの反応は、アイオロスを楽しませた。反撃の機会を与えず、さらに話し掛けた。

「オレはアイオロス・エインズワース。あのオケのベースだ。それからお前と同じスミス・ハウスの第五学年」

きっともっと驚いた顔が見られだろうと、姓と寮の名前を言ったのだが、どうだろう、ミロ・フェアファックスは、すうっと真円に目を見開くと、つい一瞬前の警戒心など微塵も残さず。

「ああ…！」

と、大きく声を吐いたのだった。

「リア…じゃなくて、アイオリアの兄さんか…」

ミロは、大きく息を吐いて肩の力を抜き再度アイオロスを見直した。

「ああ…気が付かなかった…Tシャツの話は聞いてたのに…」

もう一度ミロはため息を付くと、今度は気恥ずかし気に微かな笑みを顔に浮かべていた。

今度はアイオロスが言葉を失う番だった。この二学年下の少年の持つ感情の起伏の激しさ、他人の視線を斟酌しない無防備さ。臨戦態勢から一切の警戒を解いてしまったあどけない状態へのこの落差。

この落差には、中間の棚は存在しないのか？

すっかり和らいだ態度でアイオロスを見上げる二つの青い視線には、友人の兄という人間への信頼と親しみが入っていなかった。

アイオロスは初めて相対したミロという人間に、にわかに興味を覚えた。一方で、スミス・ハウスの監督生兼オケの仲間であるファゴット奏者、フレデリックに託びた。これは、渦中の源に十分なり得る、と。

こうも露骨に、そして簡単に人を信じ切った姿を見せる少年の幼さと、気を許してしまった相手への無防備な柔らかさは、半端に覇気がある分厄介だ。この少年は十分征服欲の対象になり得るだろう。飾りのようにこの少年を傍らに置いて歩いてみたいと思い、それを実行に移す馬鹿がそのうちきっと現れるだろう。

だが、飼い慣らせれば、面白い。

「あー…つまり、なんだっけ…そうだ！　オケの話だ！　お前、やりたい楽器とかがあるんじゃないのか？」

毒を食らわば皿までだ。とアイオロスは考えた。取敢えず、自分が面倒を見られる範囲に入ってきたら、この少年に手を尽くしてみようと、そう思った。

「いや…特には…。ただ、オーケストラを生で、あんなに近くで聞いたのは初めてだったから…つい…」

ミロの話振りは、ぽつり、ぽつりと言い淀んだ。しかし、視線はしっかりとアイオロスを捕らえ反らさなかった。これは、言葉に対して非常に慎重なのだ、とアイオロスは判断した。そしてその判断は不快なものではなかった。

「で、どうだった？　お前、たしかリアと一緒にはラグビーに入らなかっただろ？」

「うん…。ラグビーは嫌いじゃ無いけど、上手くやっていけそうになかったから…止めておいた」

「それで？　オケも上手くやっていけそうにないか？」

アイオロスはなんとなく、何を少年が気に止んでいるのか分かる気がしてゆっくりと再度尋ねた。

「実は、見ての通り、オレのパートは人手不足でな」

アイオロスは、ちょっと着ていたTシャツの前を掴んで見せた。

「もう、ホント、この際誰でもいいから入って欲しい訳だ」

「…でも、俺、コントラバスなんて弾けないよ」

「初心者大歓迎、懇切丁寧に教えると書いてある」

もう一度布を引っ張ると、アイオロスは笑って続けた。

「教えるのはまずオレだから嘘は言わない。お前、今の身長の割には手も足もデカイし、骨もしっかりしているから弾くのに不自由はしないと思うけどな」

何か踏ん切りがつかない様子だったミロの表情が、一息に明るくなった。

「因にオレも楽器は初心者で、楽譜も読めない状態だった」

アイオロスがにやっと笑ってみせると、ミロも釣られて唇が弛んだ。そんな少年を見て、アイオロスはもう一度笑うと、今度は背筋を伸ばし改めてミロに向き直った。

「さて、フェアファックス、どうだ？　少しは考えてくれる気になったか？　もし、少しはやってみてもいいと思えていて断る理由がはっきり掴めないという状態だったら、一度楽器

に触ってから結論を出して欲しい。出来ればな。外から聞いているのと、音の中に入って自分もそこに加わるのとでは楽しさも全く違うと思う。オレは少なくともそうだった」

アイオロスの眼差しは、オーケストラの一員であるという誇りと喜びに暖かく、それはミロの、入学以来ずっと張り続けて来た緊張感をずっとやさしく柔らかいものにした。

「明日…明日からでもいいですか？　今日はちょっと片付けなきゃいけない事があって…」

「もちろんだ！」

言って、アイオロスは右手を差し出した。ミロはその手をしっかり握り返し、じゃあ明日、と言うと全開の笑顔を見せ勢い良く頭を下げるとそのまま駆け出して行った。

アイオロスの足も、最上階を目指して駆け上がりリハーサル室を目指した。そして、リハーサル室の扉を勢い良く押し開けるや否や、アイオロスは目指す友人を背後から強く抱き締めた。

「やったぞ！　サガ！　コントラバス、一人ゲットだっ！」

休憩時間に突然背後から首を絞められ、サガは慌てて振り向いた。そこには喜びに輝くアイオロスの笑顔があった。

「良かったね。今？」

つられて微笑むサガの姿には、どこかほっとした雰囲気があった。

「そう！　たった今だ！　さっきのサン＝サーンスを扉の裏でずっと聞いている奴が居たんだ。追っかけて行って口説いたら、落とされてくれた！　万歳だ！」

サガがもう一度おめでとう、と声を掛ける暇も無く、アイオロスはパートに戻り、そこでは忽ち雄叫びが上がっていた。

苦笑を湛え眺めていると、コンサートマスターのシオン・メルベリ・ハーシェルと目が合った。

「曲を弾いている最中に『ずっと』見て居たって事が分かる弾き方ってどうなんだろうな」

憮然としたその物言いに、サガは思わず失笑してしまった。

翌日、練習開始数分前、金の髪をまとまり悪く跳ねさせたままのミロ・フェアファックスがリハーサル室を訪れた。あれが噂のフェアファックスかと好奇の視線もあったが本人が全く取り合わず、真直ぐアイオロスの名前を訪ねた事で、彼はなんなくコントラバス・パートに収まった。

アイオロスに楽器を教わっている姿は至極真面目で、持て余す楽器を一生懸命にさらっている姿がオケの中で見慣れたものとなった頃、コントラバス・パートには常に無邪気に笑っているミロの姿が見られるようになっていた。

七

「こりゃ、笑えない事態だな…」

スクールが持つ七つの寮の内の一つ、スミス・ハウスの一室では第五学年の生徒四人が車座に集まって話し合っていた。

四人とは、アイオロス・ヴィンセント・エインズワース、サガ・エセルバート・チェトウィンド、シュラ・アレクサンダー・コーツ、アンドリュー・ジョージ・シーファで、奇しくもみなスクールチーム・オーケストラの団員だった。アイオロスはコントラバス、サガは第二バイオリン、シュラはチェロ、アンドリューはヴィオラという選択だ。

「三週間終わって、入って無いのはヴィオラ・パートだけか…」

アイオロスの呟きに、アンドリューはがっくりと項垂れた。

「ヴィオラの場合、まず楽器を知らない奴が殆どだからな。はっきり言って新入生で初心者、バイオリン希望といったら恐らくバイオリンとヴィオラの違いなんぞ知らん人間ばかりだと思うが？」

シュラの淡々とした口振りにサガは苦笑した。

「そうだね。弦楽器がやりたい。でも、コントラバスもチェロも大きくて扱いが不安だ。残った楽器で知っているのは、バイオリン。だから、バイオリンに入ろう。そういう子が殆どだと、私もそう思うよ」

サガの答えに頷くと、シュラはアイオロスに言葉を投げた。

「お前、手抜きをしているんじゃないだろうな？」

自らを広告塔にしたてて新入生を募って来たアイオロスは、その努力の甲斐あってか、今年は三人の新入生をコントラバスに誘致する事が出来た。三人と言う数字は異例中の異例で、正に快挙と言ってよい数字だった。

「抜いてない。誠心誠意真心を込めてヴィオラに入ってくれそうな子には声を掛けてる」

アイオロスはワイシャツとジーンズといった格好で椅子の上に胡座をかき、困ったようにアンドリューを見遣って言った。サガが労を惜しまず作ったTシャツ広告は、指導員ら他教授との公約通り先週一杯でその役目を終了する事となっている。

「もう新入生歓迎会も終わっただろう？　今はまだ止めたりまた入り直したりっていう人の動きもないし、難しいんだ」

「そうすると、やっぱり溢れているバイオリン・パートから人間を回してもらうという線が現実的だな。サガ、バイオリンは正確には何人入っている？」

シュラの問いにサガは簡潔に答えた。

「九人だ。全員初心者」

「初心者ばかりか…バイオリンも頭が痛いな。室内オケの面子で掛け持ちしてもいいって奴は結局出なかったのか…」

「出なかった。でも、無理もないと思う。室内に入団出来る腕を持っていて、うちに入団したらその子が将来コンマスになるというのは予定じゃなく決定だ。室内とコンマス兼任は難しいだろう…」

ヴィオラは募集が無い事に苦しんでいたが、バイオリンは溢れる募集の中で、たった一人でいい、経験者が欲しい、と軋むような願いを埋められずにいた。

バイオリンというパートはオーケストラの中の一楽器とい

う他に、他の楽器と一つだけ異なる役目があった。
コンサートマスターとは、オーケストラの中で音楽に対する最高権力であり、指揮者の意図を音に変えて団内に伝える役目を担う。技術・責任、両面に於いて厳しい役割で、これだけはどうしてもバイオリン・パートから選出しなくてはならないという決まりになっていた。技術があっても調和を知らない者では勤まらないし、調和を知っていても、技術がなくてはオーケストラという雑多な楽器の集団を一つの音楽に導いてゆけない。
それが、この先初心者ばかりの集団から選ばれるとなると…数年、学生オーケストラで学んだだけでは、いかにも重い責務だった。何とかして“そこそこ弾ける”経験者を探し団に引き込むと言う作業は、水面下ながら団全体で進めて来たにもかかわらず、結果が出ずに今に到っていた。
重苦しい空気が垂れ込める中、今までぼんやりとあらぬ方を見ているばかりだったアンドリューがアイオロスを見遣って言った。
「いいな‥君の所は…。三週間目に入ってフェアファックスが入団してから週末に二人も美男子が来たじゃないか」
アイオロスに六つの視線が集中した。苦笑してアイオロスは答えた。
「ホント、有り難いよ。助かった。結構縁起ものかもな、フェアファックスは」
「そう思うよ。あの子、何だか色々噂されているけど、ちっともそんなことないし、明るいし、良く笑うし…」
「まぁ、オレ等んとこじゃすっかり未っ子扱いだからな。犬っころみたいによく懐いてくれて助かる」
くしゃりとアイオロスは笑って見せた。ミロ・フェアファックスは、オーケストラでは非常に友好的に振る舞っていた。
「そう言えば、フェアファックスって名字で呼ばれるのが嫌いだって有名じゃなかったっけ？　なんでうちでは平気なんだろ？」
アンドリューの首を捻りつつの疑問にアイオロスは大らかに二笑いすると答えた。
「分かんないか？　あいつ、すっげぇ単純だぜ？　自分が好意を持ってもらっている人間には絶対吠えついたりしない」
ぽかんとアイオロスを見つめるアンドリューに、まぁ待てと目で制し、アイオロスはシュラに聞いた。
「シュラ、お前もあいつの事姓で呼んでるよな？　何でだ？」
「フェアファックスはフェアファックスだろう」
シュラは、詰まらない質問をするなと、いかにも面倒臭そうに答えた。
「だよな。で、バスの上級生連は、とにかく入ってくれた！万歳！　てなもんで猫可愛がり。で、オレは単純にあいつの反応が楽しいからそう呼んでる。さてここには、あいつに対する侮りも当て擦りも、何にもない。悪意なく呼ばれる事には、あいつだって反発出来ないさ」

「…成る程。吠えついたりしない、な…。つまり鼻も効くというわけか。で、躾は誰がするんだ？」

急に隣のパートが賑やかになり、少々うんざりしているシュラが話を続けた。アンドリューは吹き出し、サガは同調出来ずに、少し控えめな態度で話を聞いて居た。

「悪かったな、まだ仔犬なんだ。うちの。でも、そのうち見てろ。立派な…」

「なんだ？　ピレネー犬ぐらいにはなって人様の役に立つのか？」

「…いや…そこまでは…でも、うまくいけばラブラドールくらいにはなるんじゃないかな…なって欲しいというか……」

アイオロスとシュラの歯に衣着せぬやりとりに笑い出したアンドリューが口を挟んだ。

「可哀想だよ。本人がいない前でそんなに言っちゃ」

「本人が居ないから言えるんだろ？」

「本人が居る前で言うような悪趣味は持っていない」

アンドリューは一瞬言葉に詰まった。シュラは、アイオロスの大雑把で物事を軽視しがちな側面を気障りと判断していたし、アイオロスもシュラの四角四面で排他的な態度を揶揄するところがある。お互い敬遠しあっているが、一番ものの考え方が揃っているのは実はこの二人なのではないか、と口にしたら猛烈な反発を受けるような事をアンドリューは思う。ちらり、とサガを見ると視線が合い、サガの口元に笑みが浮かんだ。それは暗黙の同意の信号だった。

アンドリューは、くすりと笑い返し話題を変えた。

「でもさ、本当によく頑張っているじゃないか。器用だし、耳、いいよね？」

アイオロスに訊ねる。

「ああ…。そうだな。耳はかなり出来てるな。集中している時は特に…。そういえばAの四四二と四四一の違いが分かってたって言ってたかなクリスが…」

アイオロスを除く三人の視線が絡まった。四四二と四四一の違いを聞き分ける？

「それはパーフェクト・ピッチを持っていると言うに等しいぞ」

シュラが、アイオロスを探るようにして言った。

「いや、チューナーで音を合わせて居た時に、レベルが四四一になっていた事に気が付かなかったクリスに、いつもより低いって不思議そうな顔をしていたってだけなんだが…」

アイオロスが急に鋭さを増した空気にたじろいだ。

「だが、始めて弦楽器を触ったにしては、弓の扱いが慣れているな…。アイオロス、本当に奴は初心者なんだろうな？」

弦楽器の弓は、楽器によって多少扱いの差があるにせよ、毛を張った細長い道具で、四本の弦を擦って音を出すという原理は同じだった。始めての者は、まずその長い棒を自分の身体の一部の様に扱えず、四苦八苦するのだ。それをミロ・フェアファックスは、多少のぎこちなさはあるものの、すでに聞ける程度の音を出していた

「コントラバスは弾いた事がないって言っていたさ。楽譜は母

上がピアノを弾かれているから読めるとは言っていたけどな」
困ったようにアイオロスは答えた。アイオロスはあまり細かい事は気にしな質なので、このように尋問されると答えに窮するのだ。アイオロスにとってミロは、やっと出来た始めての後輩という以外の何者でもなかった。
「実は、何か弦をやっていたとか…ないかな…？」
アンドリューがあまり期待を込めないようにそっと疑問を投げかけた。
「何かって、何をだ？」
シュラがその問いに乗った。
「コントラバスは始めてなんだろう？だったら、チェロかバイオリンか、ヴィオラとか…」
「…チェロ…はどうかな…。どうもあいつはチェロ奏者には向いていない気がする…」
「向いて居ないから入らなかったんじゃない？」
「……でも、そういやあいつ、変な事を言ってたな…」
アイオロスは記憶を辿りよせ話した。
「最初の週で健康診断とかやるだろ？　あいつ、それで聴覚検査の時に左耳が突出して広い聴覚域を弾き出して、三度計り直したとかって…。特に高音域が滅多にいないって呆れられたって、言ってた…」
「左耳…」
四人の推測が一点を目指して駆け上がった。バイオリンは、楽器の尻を左顎と鎖骨で挟む様にしてバランスを取り音を出す。
「サガ、お前の耳は？」
アイオロスの問いにサガは静かに答えた。
「通常の域よりは聞こえているみたいだけれど、特に左耳だけがって事はないよ」
「アイオロス、サガはオーケストラで弾いている。自分の音も、外の音も聞こうとしている筈だ。単純に比較は出来ないぞ」
「でも、じゃあ、ずっと独奏ばかりやっていたら、そうしたら、そういう事ってあり得るのかな…？」
誰もが思っている事を口に出せずに居た。
「とにかく、本人に確認してみるのが先決だな」
シュラの言葉を聞いたアイオロスの表情が、さっと変わった。僅かな変化だったが、見咎めたサガが、慌ててシュラに問った。
「シュラ、本人に確認するって…」
「簡単な話だ。フェアファックスがバイオリンの経験者であった場合、パート転向を打診する。人間が余っているバイオリン・パートはヴィオラへ転向してもいいと言いそうな人間を二人程作る。コントラバスは、例えフェアファックスが抜けても二人残っているわけだから、取りあえずは大丈夫だろう」
淡々と、誰もが最良の対処だと納得出来るが、そう一筋縄では括ってしまえない事をシュラは言ってのけた。そして、アイオロスに同意を求めた。
「…その通り」
アイオロスは両手を挙げてシュラに賛同した。

「多分、それが今オレ達に見えている中では一番真っ当で善い案だと思う。転向を促したい奴の意志は十分尊重するって条件付きでな」

そして、おどけた仕草と表情を真顔に戻し言った。

「明日、ドウコやシオンに相談してから動こう」

三人をぐるり見渡し、異論が無い事を確認するとアイオロスは、よしっとかけ声を掛けて立ち上がり、歯を磨いてくると言い置き部屋から出た。シュラもアンドリューも何も言わなかった。二人ともこの三週間、どんなにしてアイオロスが新入生獲得の為に走り回ったか知っていた。あちらこちらのハウスに顔を出し、誰にでも声を掛けて居た。確かにアイオロスは気安い質の人間だったが、常にあの派手なTシャツを被り、衆人の注目を集めながら気楽を装うのはそれなりの努力を払っていたと推察される。その上、自パート以外にも募集にも一役を買って出ていた。

黙って扉を見つめるか、本に手を伸ばすかする少年達の中、サガだけが扉を開けアイオロスの後を追った。

アイオロスが洗面室に降りようと階段に差し掛かった時、サガが追い付き、彼の腕を取った。

「アイオロス！　君は本当にそれでいいのか？」

アイオロスは苦笑して答えた。

「いいも悪いも…フェアファックス次第だって言っただろ？そりゃ、もしかしてそっちに行っちまったら…まぁ、かなりがっかりはするが、それがいいってフェアファックスが希望してそうなったら、団にとってもそれがいいわけだから、仕方が無いし、気にしないさ」

そう言って、アイオロスはまだ自分の袖を掴んで放さないサガの指をそっと外した。

「何？　お前も歯磨き？　じゃないよな、さっき磨いて来てたもんな。気にするなよ。部屋に戻ってみろよ、きっとアンドリューが、なんでみんなヴィオラの経験者かもしれないって少しだって思ってくれないんだ、って泣いてるぜ？」

くすりと小さくサガが笑ったのを合図に、アイオロスは階段を降りた。この話がどうなるか、アイオロスには、サン＝サーンスを覗いて居たあの時のミロの瞳が既に答えなのではないかと、そう思えてならなかった。

翌日、パートリーダーとコンサートマスターのシオン、団長のドウコ、常任指揮者である音楽部のブレイン教授を交えてこの事が話し合われ、結果、現在過剰人数になっているバイオリンからヴィオラへの転向を了承してくれる生徒がいないか働きかけてみる事、ミロ・フェアファックスにもパート転向の意志は生まれないか訊ねてみる事、が決まった。

交渉にはサガが当る事になった。ミロへの話はアイオロスが行ってもよいと言ったのだが、ミロの誤解を生じさせる恐れがあるのでこれもバイオリン・パートの募集をまとめていたサガが行う事になった。

話は、来週の月曜日、練習前の時間を空けてもらい訊ねて行くと、そう決まった。

八

一番嫌な役をやらせてしまった。と、アイオロスは思っていた。

今週の月曜日、霧雨の夕刻に、サガはアイオロスが連れて来たミロ・フェアファックスにバイオリンの経験と転向の意志を訊ねていた。他にも、三人、バイオリン・パートからヴィオラ・パートに転向してもらっても構わないか、と訊ねていた。うち、二人からその日のうちにパート移行承諾の返事を貰って居た。しかし、今回一番採めたミロの返事がまだない。

月曜日の練習時間前、サガに話を持ちかけられたのだろうミロは、その日とうとう硬い表情を崩す事なく練習を終えて行った。昨日は、普通に振る舞う事に神経を注ぐミロの姿があった。そして、今日は…。

何かを決心していたようだった。いつもより念入りに楽器の手入れをし、仕舞って居た。その仕種はとてもコントラバスを慈しんでいるようで、余計に悪い予感がした。

最悪、オケ自体を辞めると言い出さなければいいのだが…。

容姿とは裏腹に、存外真面目で頑な後輩をアイオロスは思った。一言だけ、本当に彼自身がしたい道を取れ、とアイオロスは言ったが、今日の練習も終わり、夕飯も済んだ今、一週間ぐらい考えて貰って構わないと言ったから、と話すサガの元にミロは答えを持って現われない。

一週間も答えの出ない少年ではない、とアイオロスは踏んでいたので、こうして待つだけと言うものは存外辛いものだった。

同室のシュラは読書に耽り、アンドリューはベッドに寝転び雑誌を捲っている。サガは今年の新入生用の教材作りに没頭していた。

サガに、一番嫌な役をやらせてしまった。ともう一度アイオロスは思った。先週、自分を追い掛けて掴んだ腕もそのままに、本当にそれでいいのか？　と訊ねたその時の何とも言えない必死の様が目蓋に残っている。

早く来い。とアイオロスは胸の内でミロに呼び掛けた。と、丁度その時、軽いノックの音に続いてまだ変声期前の少年の声が部屋に通った。

「ミロ、フェアファックスです」

サガがすっと立ち上がり、ドアに向かった。まだ細い背中が緊張しているのが手に取るように分かる。

そんなに緊張しなくても大丈夫なのに…きっとフェアファックスならバイオリンを取る。

アイオロスはドアが開き、続いてサガが部屋を出る音が聞こえるのを待った。

しかし、次に飛び込んで来たのは、しっかりとした変声前の少年の声だった。
「自由時間に済みません。こないだの、月曜日の話の答えを言いに来ました」
フェアファックスの存外の行動と声の大きさに、部屋の住人全員の耳が一斉にドアの方へと向かった。
「きちんと考えて来ました。…バイオリンに入れて下さい。お願いします」
部屋に張り詰めていた空気が一気に弛んだ。続いてサガの静かな声が聞こえた。
「自分でお願いしておいてこう聞くのは失礼だと思うけれど、本当に君はそれでいいんだね」
「はい」
短いが、はっきりとした答えが返った。たっぷり一呼吸の間、サガはミロを観察していたが、やがてほっと息を付くと、笑顔で手を差し伸べた。
「ありがとう。バイオリン・パートは君を歓迎するよ」
始めは遠慮がちに、しかし、すぐにしっかりと握り返してきたミロの手にサガはもう一度笑った。徐に、手が離れた後、ミロは安堵して弛んだ姿勢をすぐにまた引き締めてサガに訊ねた。
「すみません。アイオロス：先輩の部屋を教えて貰いたいんです。自分で、決めた事とお礼を言いたいんです」
「アイオロスなら…」
言い淀んだサガの後ろから、此所にいるぞ、とアイオロスはのっそりとミロの前に姿を現した。
「お前が決めた事は、さっきちゃんと聞かせて貰ったからもういいぞ」
そう言ってアイオロスはミロに些か苦味の覗く笑顔を笑見せた。が、ミロの方は目を見開いたまま硬直していた。なんだ、知らなかったのか。そう呟くと、アイオロスは自分の身体を斜にずらして部屋の中を見えるようにしてやってから更に加えた。
「ほら、あいつらも同室だ。便利だろ？」
ミロの視界の先にはオケで見なれた上級生の、手を振っている姿と無表情にこちらを見ている姿が見えた。
アイオロスは、なんとか自分を立て直し託びの一言でも述べようとしている後輩に向かって破顔した。本当に、この少年は分かりやすいと、そう思った。
「ああ、もういいぞ。お前は焦って何かをしようとするとボロが出るからな。一つだけ注文だ。走るバイオリンにはなるな。下が泣く。それから、パートが変わったからといって遠慮する事はないぞ。何かあったらオレのとこに来い。そいつは、案外世間に疎いから頼りにならないぞ」
にやりと笑ってサガを指差すアイオロスに、ミロは少しだけ泣きそうな笑顔を見せた。
「オレ、本当にコントラバス好きです。ただ、バイオリンには負けたけど」

「分かってる。頑張れよ。バイオリンは音符の数が三倍はあるぞ」
笑いあってお互いに就寝の挨拶をした。元気よく上級生の部屋ばかり並ぶ廊下を駆け出し、少し行ったところで注意され、静かに歩き直して階段へ向かい、やがて一応敬意を表して何度も櫛を入れて来たのであろう頭が見えなくなると、サガは静かにドアを閉めた。
アイオロスはサガと顔を合わせずそのまま部屋の中に戻ると、自分のベッドへダイブした。うつ伏せに寝転がるアイオロスの表情は見えない。
「まぁ、順当な落着だな。コントラバスには今度の犬は少々血統が良すぎたんだ」
「でも、僕としてはフェアファックスがヴィオラに来てくれても全然構わなかったのにな…」
「お前等なぁ〜っ」
枕に押し付けた口から漏れるアイオロスの声は酷くくぐもっていた。それでもベッドから起き上がろうとしないアイオロスをそのままに、チェリストとヴィオリストの二人は席を立ち、サガに良かったなと声をかけシャワー室に向かって行った。
ドアの閉まる音がして、部屋の中はシンと静まり返った。一人残されたアイオロスは、思っていたよりずっと気落ちしている自分に呆れていた。彼等が戻ってくるころまでには吹っ切らなければ、そう考えていると、幽かにドアの開く音がし、陶器の擦れあう音とダージリンの香りが鼻を付いた。
「飲むかい？」
驚いて顔を上げると、ベッドの脇にサガがティーカップとブランデーのミニボトルを載せたトレイを持って立って居た。
「…お前…そんなの何処から持って来たんだ？」
アイオロスの目はミニボトルに注がれている。アルコールは上級第六学年にならなければ持ち込みは禁止だ。加えて、上級第六学年といえども、自室へのアルコールの持ち込みは許可されていないハウス毎に設けられたバーに預けてある。
「前からあるよ？　君が気付かなかっただけで」
あまりにもしれっと答えるサガに、アイオロスはがばりと飛び起きた。
「前からって、お前のか？　それ！」
「そうだけど…？」
アイオロスはがっくりと項垂れた。
「…いつの間に…」
それだけ言うのがやっとだった。サガを、入学した当時のままの印象で考えてしまうのはアイオロスの悪い癖だった。入学当時、学校に通った事もなければ、同年齢の子供どうし

で遊んだ事もないというサガは時々途方にくれ、そんな時に頼るのはいつもアイオロスだった。
「紅茶に入れる？　それともストレート？」
それが、今はさらりと酒を持ち込んでいると宣い、こんな事を聞いてくる。サガの友人の幅が広がったと結果と、喜んでいいものやらどうなのか。アイオロスの頭はキシキシと痛んだ。
「…ストレート…。でも、紅茶も貰う」
サガは、手近にあったグラスにブランデーを注ぐとアイオロスの目の前に差し出した。そして、言った。
「…ありがとう…。責任を持って育てるよ」
アイオロスは一瞬驚いたようにサガを見詰めたが、直ぐに口の端を持ち上げ、にやりとして言った。
「そうしてくれ。何て言ったって血統がいいそうだからな」
「血統書付きを育てるのは君のお株だったのにな…。でも、ミロはバイオリンを弾いてもバイオリン・パートには居着かないと思うよ？」
「血統書付きは一匹で十分だ。いつの間にか駄犬にまみれていらない知恵を仕入れてくる」
憮然としてアイオロスは答えた。しかし、一つ気になる。
「居着かないって、上手くやっていけそうにないのか、あいつ？」
「違うよ。それだけ君に懐いているってこと。まずコンパの時はベースの席に混じっているだろうな…」
半分は自分への慰めだと分かっていても、自然アイオロスの顔は綻んだ。
「そうでもないぞ？　あいつ、サン＝サーンスの時、誰をずっと見ていたか知っているか？」
アイオロスは紅茶を一口含むと、にやりと笑んだ。
「あいつは、お前をずっと見てたんだ。それこそ熱烈にな。気が付かなかったか？　ホント、鈍いよな、お前って」
珍しく、サガが赤くなった。赤くなったといっても、ほんの少し、耳の先に朱が差した程度なのだが。
「君と違って、ちゃんと指揮者を見ていたのでね。…でも、ミロが遊びに行ったら、暖かく迎えてやってくれないか？　それこそ私では、バイオリン以外のことは大して教えてやれないし。それに、ミロが君を見上げる瞳も結構熱烈だと私は思うよ？」
「コントラバスの心意気は、来る者拒まずだ。そっちの手に余ったらいつでも末っ子は引き取るさ」
笑って答えたアイオロスの瞳は静かで優しかった。
「…ミロは、いいベース弾きになったと思うよ…」
サガの口から、胸に密かにしまっておいた一言が、その優しい瞳に問を外されて溢れ出た。ミロには、どちらの素質も確かにあったのだ。ただ経験があるというだけで、バイオリンに絞らなければならない理由など、本当はなかった。サガはそう考えていた。
「当然だ。オレが教えるんだからな」
ベッドに腰掛けサガを見上げるアイオロスの瞳が、照れを

含んで弛んだ。
そんなアイオロスを見て、サガは、もう大丈夫だろうか…、と思う。またいつものように、両足で大地を踏み締めて、誰もが頼る基幹(ベース)になれるだろうか、と。
不意に、ある衝動がサガの胸の奥底で生まれた。自分より背も高く、いままで寧ろ彼が頼りにして来たはずのアイオロスに対して、頭を撫でてやりたい、と思ったのだ。今はまだ強がって、やっと顔を上げている魂を、親が子にするように、あるいは、人が大切な誰かにするように。
サガは身を屈めてアイオロスの手から空になったカップを受け取り、トレイの上に片付けた。そして、身体を起こす直前に、ほんの一瞬、右手でアイオロスの髪を梳いた。
「!」
考えもしなかったサガの行動に、アイオロスの言語機能は一瞬止まった。
「カップを洗ってくるよ」
サガは素早く身を躱し、そのままドアのノブを回した。背中にアイオロスの罵声が聞こえたが構わず押し開けた。アイオロスは追って来なかった。
サガの脳裏に、一瞬だけ目にしたアイオロスの真っ赤になった顔が焼き付いていた。
アイオロスは、ドアの閉まる音と共に、もう一度ベッドに倒れこんだ。

こうして開戦の矢は、静かに的に当たり、それぞれの新学期(シーズン)が流れ出した。

ある幽霊

Dingle dingle doosy;
The cat's in the well,
The dogs away to Bellingen
To buy the bairn a bell.

ディングル・ディングル・ドゥージー
ネコは井戸の中
イヌはベリンゲンへ行った
子供に鈴を買うために

ミロは、息を詰めて手に握るカードを見た。青地に、銀色のルーン文字「アンサズ」(オーディン神)が記されていた。スミス・ハウスの食堂では、あちらこちらで少年達がカードを見せ合ってパートナーを呼び合っていた。

毎年十月三十一日の晩、各寮の新入生達を集めてちょっとした肝試しが催される。一チーム三〜四人の編成でスクールの敷地内を指示に従って進み、四つのスタンプを集め、帰着する速さを寮毎に競う。一位から三位までには特別に点数が加算されるので、一年の終わりに決定する寮対抗の学校杯獲得に絡む最初の大イベントだった。

ミロは、ちらちらと手の中のカードを確認しては、まだパートナーを見つけていない雰囲気の少年達を物色した。誰でも思う事だろうが、ミロもまた、少しでも自分と親しい友人と一緒になれたらいいのに、と願っていた。人間の好き嫌いはしないようにしているが、折角夜の校舎を自由に歩いていいと許可が出たのだ。楽しくやりたい。そう思って尚も首を精一杯伸ばし続けていると、ミロの手の中からカードをひょいと掴み上げたものがいた。

アイオリア・エインズワースだ。彼は、ミロのカードのマークを確認すると、ひょっと自分の背後に首を回して言った。

「見付けた」と。

ミロは慌てて全身で振り返った。アイオリアの隣に、濃いグレーのタートルネックのセーターと、真っ黒なパンツ姿のカミュ・バーロウが居た。いつもだぼだぼの服を着ているミロとは違い、カミュの服はぴったりと彼に合い、長い手足を引き立たせていた。

「よろしく」

カミュが、ミロに友好的に微笑みかけた。よろしく、と、つられてミロも口の中で返事を返した。制服姿よりも一層大人びて見えるカミュに、ミロは少しばかり戸惑ったのだ。

カミュとは、化学のクラス、課外活動のスクール・オーケストラで一緒だった。けれど、カミュといつも行動を一緒に

しているボール・リッジウェイにどうやら快く思われていない。それで、入学してから二ヶ月にもなるが、ミロがカミュと話した回数はそれ程多くない。

「なに猫被ってんだよ!」

アイオリアが、らしからぬミロの態度を笑い、彼より頭ひとつ分低いミロの頭頂を掻き混ぜた。

出発時間の欄にスタンプを押してもらい、三人は配られた懐中電灯一本を手に寮から校舎に向かって歩き出した。各寮の生徒がそれぞれの寮から五分おきに出発していた。薄闇の向こうから馴染みの友人達の声が聞こえる他、芝を折る足音、微かな虫の声など、昼間の喧騒はひっそりと何処かに消えていた。空気の厚さが増し、ぽつりぽつりと灯る光が彼方に在るようだった。

先方に見える校舎は墨色に染まり、濃藍の空に歪んだ洞窟のように立つ。無言の道行きを破ったのはアイオリアだった。

「ミロ、お前幽霊見たことあるか?」

「ないよ」

ミロはきっぱりと言った。故郷のニア・ソーリでも夏の夜は遅くまで外で過ごしたものだが、そんなものにお目にかかった事はない。

「ロンドンに居たお前の方が見る機会があったんじゃないのか?」

ミロは、カミュにも聞いてみたかった質問をアイオリアに向けた。

「俺もカミュも見たこと無いよ。じゃ、このチームは安全だな」

何が? と首を傾げたミロに、カミュがアイオリアの言葉を受けて説明した。

「幸い僕は見えない性質だからいいんだけど、実は兄が見える方でね。昔から、この手の催し物で結構危ない目に遭ってるんだ。迷信だと馬鹿にする人は多いけど、素人が遊び半分に手を出すのは本当は危険なんだよ。この学校、結構古くていくらでもその手の伝説はありそうだしね…でも見えない人間ばかりなら、相手も手出しのしようがないから大丈夫だろう」

ミロは、カミュの思いがけない一面を見たように感じて、そっと彼の顔を盗み見た。カミュは、至って真面目な顔をしている。彼がそう言うのだから、きっとそういうものなのだろう。ミロは自分の出した結論を、するりと飲み込み三人の先頭を歩いて行った。

三人が、校舎の正門にさしかかると、そこには机と数人の教官が立っていた。真夜中にも拘わらず灰茶色の髪を一筋の乱れなく結い上げ、モスグリーンの襟の高いスーツ、胸元に琥珀のブローチをあしらったミズ・クレジオがきちんと椅子に腰掛け彼らを迎えた。

「今晩は。ミスター・フェアファックス、ミスター・エインズワー

ス、ミスター・パーロウ」

彼女の声は、昼間の教室で聞く調子と全く同じだ。細長い眼鏡の奥から、三人を観察すると、彼女は告げた。

「ここが、第一ゲートです。質問に答えると、代わりにスタンプが一つ押されます。代表で答えても、相談して答えて下さっても結構です。ただし、正解の回答を得られなかった場合は、スタンプは押しますが、マイナスの点数をつけます。以上です。了解できましたか？」

ミズ・クレジオは、にこりともせずに一息言い切ると、問題用紙を三人の前に押し出した。

「……フランス語だ…」

フランス語は、彼らの必須授業でミズ・クレジオは彼らの教官だった。思い当たって後ろに控えている人物を確認すると、みなフランス語の教官達だった。

用紙には、単語の格変化を問う問題と一枚のイラストが印刷されていた。

ミロとアイオリアはお互いの顔を見合い、それからカミュに視線を移した。

「僕がやる」

カミュが問題用紙をするっと二人の手から奪い、一歩前に出た。

カミュの母親はフランス人だった。カミュにとって、フランス語は第二の母国語だ。代表で答えてもよいなら、このゲートはもらったも同然、とカミュは内心で拳を握り締めた。

ミズ・クレジオが軽く頷き、質疑応答が始まった。

全てフランス語でのやり取りに、ミロとアイオリアは目を丸くするばかりだった。あっという間に問答は終わり、ミズ・クレジオがA五判の地図を差し出した。

カミュは、地図を後ろでぼんやりと立っていた二人に見せると、次の目的地に向かって走り出した。

「あいつ、意外とこういうのに燃える奴だったんだな」

アイオリアが横を走るミロに耳打ちした。ミロも頷くことで同意を示す。すると、前方を走るカミュから言葉が投げられた。

「やるからには優勝を狙わないとつまらないだろう？　僕はこのメンバーなら狙えると思うよ」

「でも、折角夜に出歩けるのに、直ぐに終わったらつまらないじゃないか」

カミュの言葉に思わずミロは口を挟んだ。

「ゴールしてから好きなだけ歩くのはかまわないよ。幸い明日は午前休だし」

本当にゴールしてから好きなだけ歩けるのかな、と呟くミロに、アイオリアは、本当に何事もなくゴール出来ればいいけれど、しみじみ思った。

コの字型の校舎の中庭を突ききり、三人は図書室へ向かっていた。途中、二、三のグループとすれ違う。彼らの走る姿を見、慌てて駆け出し館内に消えていくチームもあった。

正面玄関から入り、右翼の図書室を目指し階段を駆け上っている時だった。鋭い悲鳴が暗い校舎で木霊した。三人の足は止まった。彼らの視線は互いの顔を交差し、揺れた。

と、カミュが手摺りに掛けていた手をさっと引いた。何か、冷たく塗れたものが甲に触れたのだ。じっと己の手を見詰めるカミュに、他の二人の視線は集中した。

「なんだ。驚かないのか」

のんびりとした声が上から降ってきた。さっと首を折って見上げたミロが、声を弾ませた。

『ドウコ！』

「よう、頑張ってるな。お前ら二緒のチームか」

駆け上がると、二階の踊場から階下に向けて釣り糸を垂れたドウコの姿があった。折角バーロウの悲鳴が聞けると思ったのになぁ、と笑うパート・リーダーに、カミュは僅かに眉を寄せた。しかしドウコは気付かず、気前よく種明かしをした。針の先に、水に濡らした『devils tongue jelly』つまり、蒟蒻を吊るしているのだ。

「……先輩も趣味の悪い……」

カミュは、つめていた息を吐いた。盛大に驚くのは癪に障るので何でもない風を装っていたが、気味の悪さに息を呑んだというのが本当のところである。

「何処で手に入れてきたんですか、そんなもの…中華街にだって滅多に売ってないでしょう！　日本人街ならともかく…」

呵々と笑うドウコはあっさり答えた。

「そんなもの、一年前から準備してるに決まってる。おい、ミロ、あんまり弄るな。それはまだ使うんだからな」

自分の横で、黙って初めて目にする蒟蒻を両手でぐちゃぐちゃと触るミロから、ドウコは大らかにその玩具を取り上げた。

勢いを削がれた格好で三人は図書室に到着した。部屋の中にはジャック・オランタンが暖かくそこかしこに配置されている。

「いつ作ったんだろう。オレも作りたかったな」

「来年になれば嫌でも準備させられるさ…」

ミロの悔しそうな声を受けて、アイオリアが些かうんざりした調子で答えた。いくつかのテーブルに歴史の教官たちが腰掛けている。既に三組のチームが試験を受けていた。三人は、空いている一番奥のテーブルに回った。小柄で丸い眼鏡をかけたミスター・モリスンがにこにこと笑いかけていた。

「座りたまえ。きっと時間が掛かるからね」

ミスター・モリスンの言葉に戸惑いながら、三人は椅子を引いた。ミスター・モリスンは、テーブルの上にゆっくりと両手を上げ軽く組んだ。

「さて、我が大英帝国は、これまで七十代の首相を迎えてきた。十人の名前が言えれば合格。二十人ならプラス十点。全部言えたら三十点とパウエル歴史賞にノミネートするよ」

にっこり笑って、モリスン教官は言葉を切った。

「まずは、マーガレット・サッチャーだよな…」

ミロが呟いた。

「その前が、ジャイムズ・キャラハン、エドワード・ヒース…」

カミュが更にそれを受けた。
「有名なのは、サー・ウィンストン・チャーチル、アーサー・ネヴィル・チェンバレン、ロイド・ジョージ、ディズレイリ、初代のウォルポール…これで何人？」
とミロ。
「八人だ。後は、グラッドストーン、小ピット…これでクリアだな」
カミュが折っていた指を止めて言った。
「駄目だ、二十人は狙えない」
「…あと三十点、欲しいか？」
ふと、それまで沈黙していたアイオリアが口を開いた。なにやら思うところがあるらしく、天井を見上げ複雑な顔色を表していた。
「あと三十点？」
カミュは、アイオリアを振り返った。二組の視線を横顔に受けて、アイオリアは一息に初代から現首相まで、七十人の名前を挙げきった。

「…しかし凄いな…まさか、本当に七十人全員覚えているとは思わなかったよ」
無事第三ゲートへの地図を手にし、図書室前の広場の外灯にそれをかざしながら、カミュはアイオリアへの賞賛を惜しまなかった。

「君のおかげで三十点追加だ。大分寮に貢献したな」
「兄貴も言えるよ…。じいちゃんが軍人で、覚えるまで許して貰えなかったんだ。ついでに、第二次世界大戦時のイギリス将校の名前も全部言えるけど、何の役にもたたないよ…」
肩を落として呟くアイオリアに、カミュは小さく笑った。
ところでミロは、少しばかり気落ちして二人のやりとりを見ていた。カミュは、第一ゲートで、アイオリアは第二ゲートでそれぞれ十分に力を振るった。第三ゲートで挽回が出来ればいいのだが…と。
ふと空を見上げると、細い新月が僅かな光をしんしんと降らせている。校舎を見、後ろから聞こえる次の目的地を耳に挟んだ時、ミロは、敷地内に横たわる森を抜けて行くことを提案した。目的のシアター・ホールへはぐるりと森を迂回し進まなくてはならない。しかし、森を突ききれば距離は半分で済むのだ。
「ミロ、でも今日は月も細いし、道を外れると足元もよく見えないよ？　森の中は足場も悪いだろうし…」
カミュが小首を傾げてミロを見る。
「あるいは、よく知っている抜け道でもあれば話は別だけど…」
「知ってる。ついてきて」
ミロは短く返答すると駆け出した。
残された二人は、慌てて、薄く金髪を輝かせて走る小さなミロの後を追った。アイオリアが、走りながら、なんて事を言ってくれたのだ、とカミュを責めた。
「何がまずかったんだ？」

カミュは訊いた。
「あいつ、すげえ方向音痴なんだよ！」
アイオリアが呻いた。
「でも…目的地に向かって迷わずまっすぐ走っていくじゃないか…」
「あいつにとっての『まっすぐ』が俺達にとっての『まっすぐ』と同じならな！」
アイオリアの、もはや何も語りたくない、といった諦め顔を横目に見て、カミュは裏寒い予感に囚われた。
アイオリアは、ミロがこのスクールへやってきた初日からミロと行動を共にしているのだ。その彼がこんなに絶望的な表情だというのは……
「…ミロ、懐中電灯を持って行かなかったけど、大丈夫かな」
「あいつは殆ど野生児だから大丈夫だろ」
「でも森の中は足場が……」
「どのみち今更遅いさ。喋る間に真面目に走らないと、あいつ見失うぞ」
なるほど、野生児と決め付けられるだけのことはあって、既にミロの姿は森の深い闇に融けかかっている。取り残された二人は、それぞれに意味の異なる溜息をついて、全速力でその小さな人影を追い、闇に潜った。

暫く、先を行くミロの足音を頼りに進んでいた二人は、森の中でばたりとお互いの顔を見合った。足音が消えたのだ。
「ミロ？」
アイオリアが言った。
「ミロ！」
カミュも声を出す。
しかし、ミロからの応えは返ってこない。口の横に手を添えて、徐々に大きな声でミロの名前を呼び出した頃、やっと二人の許にミロの声が届いた。
今度は声を頼りに進む。ぽつんと立ち尽くすミロの姿が現れたとき、二人はそれぞれに胸を撫で下ろした。
「迷ったんだろう？」
ざくざくと下生えを踏みつけてミロの側に立ったアイオリアは、ミロの頭を軽く殴った。カミュもほっと息を吐いて、その傍に立った。
「何事もなくて良かったよ…。いきなり足音が消えたから、洞か窪みにでも落ちて怪我をしたかと思った」
「サガがいたんだ！　それで、そっちに行こうと思って走ったんだけど…見失った」
途方に暮れたミロの表情に、カミュとアイオリアは、再びお互いの顔を見た。こんな場所の、こんな時間に、オーケストラの先輩であり、兄の友人である人が何故居るのか。このイベントには、有志の上級生が、先程のドウコのように下級生を怖がらせる役を担い、校内に一定人数配置されているが、こんな森の中にまで采配するであろうか。様々な思惑に気を取られ、ア

イオリアの気が僅かにミロから逸れた。その時、ミロは、嬉しそうな声を上げた。

「あ、やっぱり居た！　ほら、あそこだよ！」

ミロの腕を掴んでいたはずのアイオリアの腕は、するりと落ちた。ミロが、再び走り出した。

「待てよ！　ミロ！」

アイオリアの、怒気を孕んだ声がミロの背中で跳ね返った。

何故あれほどまでにミロの足は危なげないのか。

カミュの照らす懐中電灯の光を頼りに進む二人の足元は、刻一刻と不確かなものになっている。つまり、人が踏み入っていない場所を進んでいるということだろう。それともミロは、本当にこの道に慣れているのか。

だが、時に立ち止まり、きょろきょろと辺りを見回してはまた唐突に駆け出す様を見ていると、どうしてもそうは思えない。

「…アイオリア。さっきから不思議に思っているんだが…」

「…何？」

走りながらアイオリアは応えた。カミュも勿論走っている。しかもそのスピードは決して遅くない。

「サガ先輩は、どうして懐中電灯を持っている我々の方に来ないんだと思う？」

「…俺はさっきからもっと怖い事考えてるよ…」

カミュの気が一瞬凝った。

「…君は、さっきちゃんとミロの腕を掴んだんだろう？　だったら、それは、ナンだ」

「察しがいいな、相棒。でも…実は、だんだん自信が無くなってきた…」

カミュは、ごくりと唾を飲み込んだ。先刻アイオリアがミロの腕を掴んだ。その事実を頼りに思って走っていたからだ。自分は、まだ『見た』ことはない。少しでのその手の感覚に見込みがあれば、いくらでも兄と同じ光景を共有する機会はあった。三度心に言い聞かせて、カミュは返答した。

「足音が聞こえてるんだから、そっちは大丈夫だろう。…問題は、ミロが追いかけているものの方だ。こちらは僕にも君にも見えていないし、足音も聞こえない。…第一、サガ先輩が、ミロ並みに夜目が利くなんて事、あると思うか？」

ミロの行く先に、懐中電灯の灯りは見えない。アイオリアは、一瞬体中の毛穴が縮こまったように感じた。

「カミュ、とにかくダッシュだ。ミロの奴をとっ捕まえてここを出るんだ！」

アイオリアは一気に加速した。柴が連々音を立て、体は左右にぐらぐらと揺れた。運動部でもないカミュが、そんな悪条件の中、自分にぴったりとついてくることに、アイオリアは内心で舌を巻いた。そしてミロは、ウサギのようにジグザクに走り、なかなか思うように追いつけない。

ミロを、真っ白なサマードレスを纏い日傘をさしたサガが、ゆっくりと先導する。途中、小さな犬もサガの足元をまとわり突き始めた。それを見て、ああ、そうか、とミロは思う。

ミロはよく、十曜か日曜に、こっそりこの森に入ってはバイオリンを弾いていた。練習室は予約を取らなければならなかったが、その手続きはミロにとって有難くない作業だった。

彼は、自分の気の向いたときに、気の向いたように弾き事が好きだった。そのうち、あまり人気のない森の中に何度か分け入り、気に入りの場所を発見した。ぐるり雑木に囲まれた中、ぽっかりと開いた小さな空き地だった。ニア・ソーリでも丘陵の景色のいい場所を選んで気ままに弾いていた。外で弾くことには抵抗はない。気持ちよく二三曲弾き終わると、いつからか子犬が現れるようになった。いつも藪の影から外には出てこなかったが、そのうち慣れれば寄ってくるだろう、とミロは構わず弾き続けたものだった。

ああ、そうか、とは、今、サガの足元にじゃれ付く犬が、その犬だと気付いたからだ。茶色のちりちりの長毛種、何と言う品種だったかなかなか思い出せないが、もう一つ気づいた事がある。サガも、彼の憧れる上級生も、この森でこっそりバイオリンを弾いていたのかもしれない。そうすると、あの子犬にとってはサガがご主人なんだろう。なんだか嬉しくて、小さく笑った時、突然森が開けた。

サガが、少し先に見える建物に向かって静かに歩いていた。

あれは、ジュディ・ハウスだ。

蔦の絡んだこじんまりとした影に見覚えがあった。サガの姿は、一瞬見えなくなったが、建物の影が伸びる中に入ると、白い服が際立った。そして、ハウスの裏に当たる一つの窓で、ふっつり消えた。

ミロは、すくざまその窓に駆け寄った。窓は開いていた。少し高いが、指はかけられた。十本の指に力を入れて、ぐっと体を持ち上げた。その瞬間、頭上と背中から名を呼ばれた。

「ミロ！」

と。

ミロはバランスを崩し窓枠から転げ、拍子にカミュとアイオリアを下敷きにしていた。

「お前、何でこんなところから入ろうとしているんだ？」

窓から、顔が覗いた。頭頂に大きなのこぎりのオブジェをつけ、血のりで大胆に顔を染めた、アイオリアの兄であり、カミュとミロのオーケストラの先輩でもある、アイオロス・エインズワースだった。

アイオロスの長い腕で、三人はジュディ・ハウスの中に次々と放り込まれた。アイオリアは荒い息の収まるのも待たず、取り敢えず一番身近な人間に苛立ちをぶつけた。

「兄貴！　なにやってんのさ、こんなところで！」
　アイオロスは一瞬だけ弟からの視線を反らしたが、直ぐに彼を見下ろすと、にやりと笑って指にはさんだものを見せた。
「お袋には言うなよ？」
　とアイオロスが言うと、アイオリアは、今から煙草など吸っていたら未は肺癌で死ぬと脅したが、彼の兄は歯牙にかける様子もない。
　ミロは、暗い廊下を漂う煙草の臭いに、鼻の頭に皺を寄せた。
「それにしても速かったな。お前らが一番だぞ。裏から来るとは思っていなかったから、たっぷり脅かせなかったのが残念だが、ま、同寮だ。いいとするさ」
　アイオロスは、喋りながらどんどんと進み、三人を従えてジュディ・ハウスを突き切った。途中、白い布を被った巨大でオーソドックスなお化けや、吸血鬼、ミイラ男、アイオロスと似たり寄ったりのなんだか知れない、とにかく血だらけの上級生がうろうろし、彼らは口々にアイオロスにそれが今年の優勝者なのかと確認していた。時々同じスミス・ハウスの上級生ともすれ違ったらしく、彼らはアイオロスと手を打ち鳴らし勝利の感情を叫び声に変えていた。

　着いた先は厨房だった。そこには処狭しと観葉植物が置かれ、その真ん中に、ハモンド校長が満面の笑みで座っていた。ぼろぼろの白衣と爆発した白髪の鬘は、昨年公開されたロバート・ゼメキス監督の映画、バック・トゥ・ザ・フューチャーの博士を模したものらしい。周りを囲むヘッド・マスター達が妖精の格好をしているところを見ると、まるで『勝者の楽園へようこそ』といった趣向で、見るものを唖然とさせた。
「素晴らしい速さだったね。きっと我が校始まって以来だな。さあ、カードを見せてくれたまえ」
　ハモンド校長は、色水入りのフラスコを並べた机の上に右手を差し出し、掌を上に向けてカードを握っているアイオリアを手招きした。

　アイオリアは、びくりとも動かなかった。そして、我慢しきれず、といった風に口を開いた。
「ハモンド校長……、それが、」
　アイオリアは低い声で言った。
「なんだね？」
　ハモンド校長が訝しさに笑顔を半分消して応えた。
　しんとした厨房に、アイオリアの声が渡った。
「まだ途中なんです、俺たち」
　アイオリアは、俯いたまま、印の欠けたカードを机の上に差し出した。もっと早くに言うつもりが、あまりに上級生が騒いでしまったので言えなかったのだ。
　ハモンド校長は、驚いたように目を見開いて、かけていた伊達眼鏡を外した。

「しかし、この場所は秘密になっていただろう？　最後のゲートを通らずに、どうやってここを探り当てたんだね？」
憮然とするアイオリアを庇い、ミロが言った。
「オレです。オレが全部すっ飛ばしてここに来たんです。これたのは…」
ミロは言い淀んだ。これを言えば、恐らく彼が一番に敬愛する先輩に迷惑が掛かる。ミロは、與う限り言葉を選んで校長に言った。
「オレが、森の中を突っ切って第二ゲートを目指して、そこで、サガの姿を見かけてここまで追っかけてきてしまったんです。ごめんなさい」
ミロは、おもちゃの人形のように勢いよく頭を下げた。
「何だって？　サガとは、第五学年のサガ・チェトウィンドかね！」
ひゅうっ、と項垂れた三人の背後から口笛の音がした。勿論三人を連れてきたアイオロスだ。そしてさらに、なかなかやるな、と嘯いたのを、ジュディ・ハウスのケヴィン・ウォーターが聞き咎めた。
「ちょっと待て、チェトウィンドが同寮のメンバーをわざと案内したのか？　反則行為だぞ！」
ケヴィン・ウォーターは、頭先から爪先までゴシック・ホラーの帝王、ドラキュラ伯爵の衣装を身に纏う。彼の漆黒のマントの向こうから、徐々にスミス・ハウスの不正を責め立てる声が膨らみ、本来見逃されていた身冒瀆も槍玉に上がり始めた。
「スミス・ハウスは減点だ、いや、いっそ全員失格だ！」
とパーク・ハウスのジョン・ブリッジが叫べば、
「お前らだって自分のハウス冒瀆してただろーが？」
とロウ・ハウスの何某からも返る。きりが見えなくなり、とうとう誰かが叫んだ。
「チェトウィンドを呼べ！」
と。カミュとアイオロスが冷静に話を聞いて欲しい旨告げていたが、効果は上がらなかった。
数分後、押し出されるようにしてサガ・チェトウィンドと御付役をこなしていたアンドリュー・シーファが衆目の前に晒された。サガは、確かに白いネグリジェのようなドレスを身に着け、長い金色の鬘を被っている。
サガは、好意の見られない視線を順々に追い、無言だった顔を動かし、説明を求めた。
アイオロスが代表して事のあらましを告げると、自身とスミス・ハウスに向けられた猜疑にサガは表情を硬くした。アンドリューもスミス・ハウスである。アンドリューと帝に居た事は、森に足を踏み入れては居ない証明にはなるまい。
アイオロスが、自身の代わりに、汚れていない靴　真っ白なままのスカートの裾、これらを取り上げて弁証を試みていたが、ぐるり取り巻く顔の一つも納得の色に染まっていない。
ふと、不信ばかりの色の中に、凍りつく色を見付けてサガは言葉を飲み込んだ。ミロが、真っ青を通り越し、蒼白の顔色でサガを凝視していたのだ。

ミロの青い眼からは、涙がこぼれそうだった。
それで、サガは得心した。おそらく、ミロは誰かと自分を見誤ったのだ、と。ミロの気を静めて落ち着かせてやれば、解決の糸口は見えるだろう。そう考えた時、
「騒がしい限りだな。デュラハンがこの寮に立ち止まったのか？」
戸口から、悠然とした声が響いた。

デュラハンとは、人が死ぬ前になると出現し、街中を走り回るという妖精である。女の姿だが首は無く、その首を脇に抱えていることもあるという。走り回るときには、コシュタ・バワーという首無し馬に引かれた黒い二輪馬車に乗っている。デュラハンはこの馬車で、街のいたるところを走り回った後、目的の家の前で立ち止まる。馬車の音に家の者がドアを開けると、桶一杯の赤い血をかけられるという。そういう話だ。
さて、戸口に立っていたのは、ジュディ・ハウスの第五学年生、シャカだった。長い髪を括る事もせず背中に垂らしている。インドのマハラジャの息子で、彼の母が英国人であった。多くの召使に囲まれて育った故か、このシャカもまた、サガとは異なる趣ながら常に泰然としその所作を荒らす事のない生徒であった。

「騒がしい限りだな。デュラハンがこの寮に立ち止まったのか？」
とシャカは言ったのだった。その彼に、事の経緯を説明しようとする学生達の動きが、ざつ、と鳴った。だが、シャカはそれを腕の一振りで押さえた。
「うるさ過ぎて全て聞こえた」
とシャカはぴしゃりと言う。
そして、するすると凍えきったミロの傍らに寄り、片膝を付いた。
ミロは、背骨に柔らかな温度を感じた。シャカが、ミロの背に腕を回している。シャカの指が触れた部位を、ミロは暖かいと感じていたのだ。
「フェアファックス、落ち着いて思い出したまえ。君は、その白い人の顔をしっかと見たのか？」
シャカの声は部屋に満ちた熱を下げた。何拍かして、ミロは答えた。
「…しっかりと見たわけじゃない。ただ、なんとなく、凄く綺麗で、優しい感じがしたから、サガだって…そう思ったんだ……。サガって呼んでも、違うって言わなかったし…」
「なるほど。それで、犬を君は以前から森で見かけたと言っていたが、それはどうか？」
「そういえば、音の感じで犬だって思っただけで、ちゃんと姿は見てなかったかも…。でも、今日はちゃんと見たよ？」

シャカの口元に、微笑が浮いた。
「君は、耳がいいな。では、その白い貴婦人の足音はしたか？」
「聞いてない」
「君は、足も速いと聞く。君が全力で追いかけて追いつかないのだ、彼女の走る姿はかなりの勇姿だな」
「いや……。凄く綺麗な後姿だった…。走ってなんか、いなかった」
みっしりとした沈黙が、部屋に枝を伸ばした。その枝に、絡め取られたかのように、誰も動かない。ただ、シャカのみが、するりと立ち、ゆうるりと衆人を見渡し笑んだ。
「さて諸君。これで解決だ。昼には姿が見えず、闇にその姿を表し、音もなく現れまた消える。実にハロウィーンに相応しい訪問者ではないか？」
数拍後に上がった意味をなさない様々な叫び声は、あっけに取られているサガ・チェトウィンドの肌もゆすった。
そしてその耳に、
「おめでとう。幽霊とそっくり大賞。おまけに女」
とのアイオロスの言葉が届けられた。

「どうしよう。オレ、サガに凄く悪い事しちゃったよ…」
ミロが言った。
「お前の早とちりは一生治んないな。サガも、一年ぐらいしたら、もしかたら、忘れてくれるかもな」
アイオリアが応える。
結局、彼らのゴールは無効になった。回答で得た得点は失わなかったものの、暗い森を走り回り、不正を行ったと一方的に攻め立てられ、挙句に背中に冷水を浴びるような心地を味わった。
アイオリアの不機嫌は、無理もない。
「まあ、でも、好意的な相手でよかったじゃないか…きっと、ミロのヴァイオリンを聞かせてもらったお礼に、協力してくれたつもりだったんじゃないかな。幽霊にも聴かせられる腕なら大したものだよ」
一方、心霊体験の怖さを知っているカミュは、むしろミロがいてくれて良かったと思っていた。彼女たちの静かな夜を騒がせたことは事実であるし、もしかしたら――本当に『もしかしたら』だが――いざとなったら森の端くらいは掠めて走ろうと自分も考えないではなかったからだ。
「やっぱり、是非僕等も一度聞かせてもらわないとな。ミロのヴァイオリン」
むっつりとしたアイオリアと、ひたすら自分を責めているミ

ロの間で、カミュは殊更明るく言い終えた。
ミロは、スミス・ハウスに向かいながら、何度も何度も後悔と反省の念を口にした。ジュディ・ハウスを出る時、サガに向かってこれ以上ない程に頭を下げ、精一杯謝り続けた行為も、こうして静かな夜道を歩いているとまだまだ足らなかったようにミロには思えるのだ。
「どうしようカミュ、明日の練習…」
ミロは、声を絞り出した。カミュとミロは、新入生ながら十二月の演奏会の舞台に乗る。二人は、新入生だけで固まって練習するのではなく、上級生の間に混じりそれぞれの仕事をこなしていた。
ミロは、セカンド・バイオリンに配置され、そのグループのリーダーがサガだった。ほとぼりが冷めるまで顔を見ないで済ませられる間柄ではない。
「そんなに心配しなくても、サガ先輩はいつまでも人の失敗を気にする人じゃないと思うよ？　濡れ衣も晴れたことだし」
すっかり他人事のカミュは、さらりとそう言って笑った。実のところ、あのシャカが華々しい登場をする直前、サガがミロに向けた眼差しをカミュは見ている。
それは、自分を窮地に追い込んだ相手を非難するものでは決してなく、むしろ失敗をして動揺している後輩を守ろうとする親鳥の如き眼差しだった。
サガは、誰が見ても間違いなくミロに好意を持っているのに、肝心のミロだけがどうしてもそれを理解しない。
「だから、その分頑張って弾けばいいんじゃないかな？　きっとそれが一番サガ先輩も喜ぶよ。…ただし、また幽霊を呼び寄せるのは勘弁してほしいけど」
その途端、カミュの右袖がさらに重くなった。更に、というのは、ジュディ・ハウスを出てからこちら、ミロががっちりとカミュの右袖を掴んで離さなかったからだ。
「…おい、ミロ、ジャケットの型がくずれる」
同様に、左袖にしがみつかれているアイオリアが憮然と言った。
「だって……！」
「だーっ！　うるさい！　お前も少しは寒い気分を味わえ！　お前が幽霊と追いかけっこしてる間に俺達がどんな薄気味悪い思いをしたか……！」
ぶるっ、とアイオリアが身震いする。カミュはまあまあ、とアイオリアを宥め、ミロの手を自分の袖からそっと外した。
アイオリアに反論しようとしたミロの言葉が飲み込まれた。
ミロは、左手に温かい指の感触を覚え、立ち止まった。
「これで、どうかな？」
カミュは、固く縮こまっているミロの手を開き、自分の手の中に握りこんだ。ミロは驚き、口ごもった。その顔をカミュは、微笑みの中に一片の真剣さを込めて見下ろした。
「…服の袖は、いつのまにか別のものになってるかも知れないからね。僕はこの方が安心できるな。…まだ、僕等の寮まで道のりは長いし……」

アイオリアが暫く凍り付き、それから無言でカミュに倣った。
両手を友人の手に預けて歩くと、なにかしみじみとした暖かいものが胸の内に満ちるようで、ミロはずっとこごったままだった息をふうっと吐いた。今は、この手の温かさが何より嬉しかった。
入学してから二ヶ月、やっと自分の居場所を見つけたように、ミロは思った。

細い光の中、三人の少年が手を繋ぎあって寮への道を歩く。
少しづつ小さくなる三つの影を、茶色の小型犬がいつまでも見送っていた。
影もなく、長い毛をそよ風にゆらされることの無い犬が。

ある観察（マイケル・ガーネットの手記より）

マイケル・ガーネット。これがボクの名前だ。いつか、そう後二十年もしたら本屋にこの著者名の本を平積みにしてみせる。ボクは、作家を志している。

だから、自分の為に、この記録をしたためる。まずは自分の日常を文章にする。これは大作家への欠かせないトレーニングと肝に銘じて。

本当は、この学校に来るのはボクの本意じゃなかった。一流の作家を目指すんなら、ロンドンを離れるべきじゃない。ボクは、断固たる態度で父に抵抗したが、敢無く放り込まれた。経済的自立を盾にとって扶養者を制御するやり口は、大人のもっとも卑怯な攻撃方法のうちの一つだ。ボクは、決して自分の子供にはしない。

チェリングクロス駅から列者が動き出した時、ボクは自分の未来がどんどん暗闇に飲み込まれていくようで、不安と理解されなかった悔しさで一杯だった。景色はボクに構う事無く平らに、緑色に染まりながら伸びていった。辿り着いた先も、第二次世界大戦の爆撃から取り残され、旧態依然の赤レンガの町と石畳。ボクは、休暇を取りに来た老人じゃない。もっともっと刺激を受けて鋭敏に感覚を研ぎ澄ませていかなきゃならないんだ。

それから駅よりバスに揺られて十五分。ボクは、校門の前でがっくり肩を落とした。

だだっ広い緑の芝生。灰色の石造り校舎、そのずっと奥に茂る雑木林。その間に光る寄宿舎の屋根。こんな田舎で、どんな事件が起こるっていうんだ？　どんなインスパイアが？

父は、ボクの将来を潰す気なんだ。

部屋にはもう三人の少年が居た。

一番に声を掛けてきたのは、ボクより三インチは優に高いアイオリア・エインズワース。ボクだって結構背は高い方だったのに。次いで、ダークブラウンの髪を刈り込み前だけつんつんと立たせたエドマンド・ハウ。

「エディって呼んでくれ」と、気取って手を差し出されたが、誰が呼ぶか。馴れ馴れしい奴め。最後に、ウィリアム・バンキンとおずおずとした声が聞こえた。デブだ。やだやだ、こういう奴は足を引っ張る。

名前だけ名乗ってさっさと窓際の一番端のベッドに直行した。ベッドは五つ。扉から入って右側の壁を頭に三つ。左は大きめな二段ベッドだった。エインズワースはこの二段ベッドだろう。

さて、目指したベッドの上には既に荷物が置いてあった。デブがこわごわといった風で人の顔色を伺っている。

「オレ、爺さんの遺言で、絶対窓際で寝なきゃいけないんだよね」

ちろっと眼鏡の端からデブ・ウィリアムを見たら、彼は荷物を移動した。エインズワースとハウが呆れたようにボクを見たが、構うもんか。ボクは、もう、ビタ一文だって譲る気はないんだ。ボクは、来たくてここに来たんじゃない。

三日経った。何にも無い毎日。明日からやっと授業が始まる。相変わらず部屋は四人。土壇場で入寮を止める生徒もいるそうだから、もしかしたらそういう事かもしれない。

十三にもなって、まだ居るんだ。親から離れて生活できない奴が。例えば、デブ・ウィリアム。ヨレヨレのテディ・ベアなんか抱えて寝てる。あーやだやだ。

机に向かって書き物をしていると、最初は好奇心に任せて覗き込んできた連中も、連れない態度で応じてやった結果、近寄らなくなった。せめて、授業でも始まればまだ気が紛れるのに。書く事が無くなって、指が紙の上で止まる。刺激がなきゃ作家になれない。気分が苛立った。

と、その時。ドアをノックする音がした。エインズワースが立ち上がった。ハウも声を上げる。扉が開かれた。一人の、少年が立って居た。

ボクは、断じてゲイじゃない。これは、聖書に誓う必要もない程明白な事実だ。だから、ボクが多少顔に火照りを感じ、ほんの、ごく僅かだが、所謂、上がってしまったような状態に近い高揚を覚えたのも、それは、彼が、真っ当な常識から判断した場合、

通常のこの年頃の少年より美的なものが優れていたからだ。ボクだけじゃない。普段騒がしいエインズワースも、お調子者のハウも、一瞬は確かに見惚れていた。自分の外見に見劣りを感じているデブ・ウィリアムなど口を開けて見入っていた。

彼の名前は、ミロ・アーヴィング・フェアファックス。癖っ毛とも、巻き毛とも見える華やかな金髪と、白い華奢な体の少年で、真っ青な瞳をしている。睫毛なんて閉じたり開いたりする度に音が出そうだ。レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロの天使を連想させる。名乗った声も、澄んで明るく、文学的表現を使うなら、鈴の転がるような、というものに違いない（表現者は、時に大胆に、羞恥心を捨てる事も大切だ）。もしかしたら、聖歌隊でソプラノをやっているのかもしれない。

オレンジ色のリュックサックと、長方形のごついバックが、小柄な体に不釣合いで、一層荷物が大きく見える。ブルーグレーを基調にした繊細な幾何学模様のセーター（アイルランド風）とブルージーンズ。どれもダボダボで余計に彼の華奢さが目に印象付けられる。もしかしたら、数人の男兄弟の末っ子なのかもしれない。人懐こく出された手を握ると、指の長い、大きな手だった。手の甲には青い血管が透けて見えていて、冷たく乾いていた。

空いているベッドは一つしかなくて、エインズワースにごごこ微量の妬心を感じる（作家は自身の心に正直でなくてはならない。ただし、これは本当にごくうっすらとしたもので、無視してもいいくらいだ。本当だ）。

早速に、ベッドの周りに彼らは群がり下らない質疑応答のやり取りが始まった。聞く気はなかったが、狭い部屋の事。聞こえてしまったので書き留めておく。

氏名、ミロ・アーヴィング・フェアファックス。家を手伝っていて本日到着。三人兄弟で妹二人。ハイランドの父とイタリア人の母。イタリア語、流暢。何処から来たのかと問われて、「ピーター・ラビットの故郷から」と答える。

三人は分からなかったようだが、ピーター・ラビットの故郷と言えば湖水地方だ。ロンドンのユーストン駅からオクスンホルムに三時間。そこから単線で確か二十分ぐらいでウィンダミア駅。ウィンダミア駅が湖水地方の拠点駅でそこから先は車か歩くしかない。ウィンダミア湖を挟んで駅と反対側にピーター・ラビットの作者、ビアトリクス・ポターが居を構えたニア・ソーリ村がある。まったく、そんな事も知らないのか？　教養のない奴らだ。ボクが声に出して説明してやると、エインズワースとハウ、デブ・ウィリアムが感服したといった様子でボクを見詰めた。フェアファックスは、嬉しそうににっこりと笑った。悪くない。ボクは満足して机に椅子を戻した。

すると、背後で高い声が上がった。フェアファックスはピアスをしているらしい。

「オレ、ガキの頃体弱くて伯母さん達が糜除けだって言って開けられたんだ。取ると塞がるし、塞がると会った時面倒臭いからそのままにしてる」

ハウが物珍しそうにフェアファックスが取って渡したピアスを、手の平でひっくり返しながら見ている。こういうタイプはいつか自分から進んで開けそうだ。

「開けた時、痛かったか？」

ほらな。

ハウは、外されてどこか寒そうなフェアファックスの耳朶を伸ばしながら聞いている。フェアファックスは、赤ん坊の時に開けたから分からないと苦笑交じりの返事。

彼は、本当に体が弱かったのだろう。エインズワースからデブ・ウィリアムの手にと回ったピアスに付いた石はラピスラズリだ。小さいけれど、あんなに青が深くて金がくっきりしている石は安物じゃない。身体が小さいのもきっとその所為だろう。フェアファックスは、どんな下らない質問にも極めて愛想良く答えていた。感心な人間だ。きっと、周囲から大事にされて育ったのだろう。掃き溜めに鶴とはこの事か。

始業日。朝は同室の者が揃って寮の食堂で朝食を取った。同室だからといってつるむのは如何にも小心者のする事で気に入らないが、昨日到着したばかりのフェアファクスに居心地の悪い思いをさせるのも大人気ない。ボクは、静かに見本的な姿勢とマナーで食事を進めた。ふっと、物凄い赤毛が目に入る。隣部屋のバーロウだ。カミュ・ルーファス・バーロウ。実に気さくな態度と落ち着いた物腰で、この寮の新入生の中では格段に大人びている。隣にはキンキンと高い声で話す茶色の巻き毛の小さいのがまとわり付いているが、嫌な顔一つしない。なんとなく、詰まらない。

二十分もして、食事を片付け席を立つ段になり見回すと、フェアファックスがまだ食べ終わっていなかった。ヨーグルトと牛乳、シリアル、そしてフルーツだけなのに…。体が小さい子供は大体食べるのも遅い。焦らずに完食する事を薦めると、真っ直ぐに

こちらを見返して頷いた。瞳を見開くと、余計に彼の顔は幼く見えた。

始めの教室へ、五人で移動する最中、すれ違う上級生にフェアファックスは口笛を吹かれたり、無遠慮な視線と値踏みにもみくちゃにされた。だんだんと苛立っているのがよく分かる。気の毒に、と思ったその瞬間、高らかに上がった口笛の主を、彼は激烈に睨み返した。

……そんなに、我慢し切れない程ストレスが溜まっていたのか…？　今度は助け舟を出そうと心に決める。病弱な子供に、過度のストレスはいけない。あらゆる病気を併発させるのだ。無神経に彼を冷やかす無知な生徒と自分は違う。そんな自分は、きっとフェアファックスの目には頼り甲斐のある存在として写るだろう。実際、病弱な子供は、どんなにそれが卑劣な評価だとしても、子供社会の中では弱者であり、恩寵から見放された者となってしまうのだ。

教室に着くと、空いている席は前列だけになっていた。エインズワースがさっさと腰掛、フェアファックスがその隣に座った。次に、と出した足を押しのけて、ハウがその隣に座った。…君、今、ボクの足に圧力が掛かった事に気付いていないのか？失礼な奴だ。むっとした隙に、デブ・ウィリアムがハウの隣に腰掛けた。長いすが揺れた。こいつの隣か？　かなり気分が悪かったが、教官が入って来たのでなるべく離れて腰掛けた。白くて、ブヨブヨしていて、おなじ白いのでもフェアファックスとは大違いだ。ちらっと横に視線を走らせると、水風船のようなウィリアムの体に隠れて、フェアファックスは殆ど見えない。ボクは、見苦しいモノは嫌いだ。作家は感性を大切にしなくてはならない。大事な武器を、ボクは今非常に不愉快なモノで冒涜されている。次からは決して二の足は踏むまい。

ボクは、イライラしながら自分の名前が呼ばれるのを待ち、クールに返事をした。ボクの後に、ミロ・フェアファックスと教官の馴れ馴れしく陽気な声がした。

と、そこで、ぎょっとする程デカイ声が返った。クラス中の視線が、フェアファックスに集中し、笑い声が炸裂した。

なんて失礼な奴らだ！　緊張の所為で旨く気分をコントロール出来なかっただけじゃないか！　教官も失礼だ。笑いながら「元気のいい返事だ」などと言っているが、笑っている事で彼もクラスの共犯者だ。品性のない奴らの猿のような笑い顔を記憶に留めてやろうと出来る限り視線を滑らせると（作家はなんでも選り好みせず見るのが仕事だ）赤毛のバーロウだけが笑っていなかった。

……。いや、きっと最初は笑っていたに違いない。それで、ボクが笑っていないのに気付いて慌てて体裁を整えたのだ。こんな状況で、笑わないでいるというのは、それなりに人格が出来ていなければならない。そして、そんな風に出来ている人間は、そう滅多にはいないんだ。日頃から、覚めた目で状況を判断する訓練を自分に課していなければ、ほら、教官だって笑っているのだから。

午前中、四時限終えて昼食。ハウス毎のテーブルでの食事。テラス側の席でエインズワースという声が聞こえた。見遣ると、第六学年の生徒か、非常に上背のある生徒がそう呼ばれていた。焦茶のストレート。解け掛かったタイが無造作に胸のポケットに突っ込まれている。あまり似てないが、どうやらこちらのアイオリア・エインズワースの兄弟のようだ。あちらは『アイオロス』とも呼ばれていたからな。

それにしても、よくもギリシア神話の風神の名前を子供に付ける親がいるものだ。……まあ、それなりに、整った顔立ちはしているが…。目付きの悪い黒髪の男と、気の弱そうな男、それから、一瞬白髪かと思ったが、どうやらとても色素の薄い髪の男(背を向けられているので顔は分からないが)、と親しいらしい。

さて、こちらのテーブルに目を戻すと、相変わらず進みの遅いフェアファックスの食器が目に入る。どうやら、人の話に耳を傾けている時は、手、のみならず口も止まってしまうらしい。おまけに左利き。物書きには観察力が大切だ。頭の中で呪文のように唱えつつ、ちらちらとフェアファックスを見る。熱心に話しに耳を傾ける表情は、とても好感の持てるものだった。

しかし、何故今朝から二度目、食堂から校舎に戻る方向を間違えるんだ? 方向音痴なのか? だが、間違えようにも、こんなに単純な方向、間違えられる筈が無いと思うんだが…。まさか、明るい表情とは裏腹に、無意識下に於いて登校を拒否するような、何か内向的な形質が影響した行動結果なのだろうか…。

授業開始二日目。

昨日は、寮内のシャワー室や食堂、給湯室、図書室、監督生、ハウス・マスター、医務室を案内して歩いた結果、フェアファッ

クスが極度の方向音痴だと分かった。あまり、一人で出歩いた事がないのだろう。人間の感覚器官は使わなければいとも容易に退化するのだ。だから、ボクも自分の感受性が鈍らないよう、日々努力しなければいけない。

さて、フェアファックスだ。きっと、湖水地方などという辺鄙な地域から出てきたばかりで物珍しい事が多々あるのだろう。彼は、兎に角何処の扉でも、曲がり角でも曲がりたがり入りたがる。結果、意図する場所に辿り着けないのだが、神は二物を与えないものなのだろう。彼は、ギリシア神話を借りるならば、きっと美の神に愛されている少年なのだから、泣き所があっても仕方あるまい。いや、寧ろこの極端に不安定な方向に対する論理的拝察の脆弱さは神の戯れというものなのかもしれない。

まあ、元気に走り回れるのはいい事だ。

昼食を取りに、食堂を目指して駆け出す彼の姿を見てそう思う。心配性のエインズワースが、また迷うとかなんとか大声を出して後を追ったが、知らないのか？　まとわり付くものはいつか拒絶されるものだ。

ゆっくりと食堂に向かっていると、突然鋭くフェアファックスのファースト・ネームを呼ぶエインズワースの声が届いた。流石に、緊急事態かと思い駆け出すと、フェアファックスが、ブックエンドで固く縛った教科書とノートの塊で、上級生に殴り掛かっていた……。

何事だ？　いったい何があったんだ！

現場に到着した時には既に、上級生の三人は駆け去った後だったが、フェアファックスの瞳は炯々と怒りに燃えていた。昼食を取りながら事情を聞いた所、足の悪い新入生（ローズ・ハウスのトリガラみたいな奴だろう。作家は人間観察・記憶力に優れていなければならない）が、どうやら件の三人の上級生の内の一人にぶつかり、上級生が彼の教科書を取り上げ彼の頭上で回し投げをしていたらしい。それを、フェアファックスが奪い返した。

ハウは、上級生を殴るなど何事だと大層な剣幕で、しきりにフェアファックスをバカ呼ばわりした。

何故、彼の必死の行動を正当に評価しない？

もちろん、こうした閉塞的な集団の中で、年齢によるヒエラルヒーは覆しがたく、一年の差が圧倒的な体力・腕力の開きを生じてしまうこの特異期に於いては、屈辱的であろうとも無難と思われる選択肢があるのは確かだ。だが、先程パワー・ハラスメントの被害者となった少年より、フェアファックスは小柄だった。その彼が、三人もの上級生に立ち向かったのだ。まずは褒め称えてやるべきなのではないのか？　見ろ、彼はまだ興奮で唇が赤い。言葉使いまで荒く聞こえるのは、余程緊張を強いられた

のだろう。

今後、彼が、この小さい体を張るような事態が発生しない事を祈る。大体なんなんだ。エインズワースの奴、ファースト・ネームで呼んでおきながら…、本来、その馬鹿デカイ図体したお前が立ち向かうべきだろうが！　イライラしながらグリーンピースをより分けていたら、フェアファックスが、食べると言って来た…。躾がいいんだな…。ボクは、グリーンピースだけは駄目なんだ…。その日の体調によっては、セロリとかピーマンとかクレソンとかも駄目な時があるんだが…。

と、フェアファックスがアイオリアの皿にポークソーセージを入れてやった。

…いつの間にそんなに仲良くなったんだ？　そういや、ハウまでフェアファックスの事をファースト・ネームで呼んでいる。その上デブ・ウィリアムまでだ。なんたる侮辱！

三日目。

ミロ、と呼ぶことになった。短くていい。

彼の姓をからかいの対象として口にする輩が増殖している。フェアファックスというのは、金髪を意味する所もある名前なのだ。今や、彼、ミロと友好的な関係である者のみが、彼をファースト・ネームで呼んでいる。

さて、ミロは余程エインズワースと気が合うのか、今日は奴と一緒にラグビー部の見学に出かけていった。あんな野蛮なスポーツの何処がいいというのだ。人間には知恵があるのだから、欲求不満などは知的刺激で解消するべきだ。ただ闇雲に走り回って過剰エネルギーを消費するなど、動物と同じではないか。ミロもきっとエインズワースに無理矢理誘われたのだろう。今や、ミロは集団に発生するちょっとした注目点になっているので、連れて歩けば当然エインズワースも注目される。

見た目のいい子はよくそういった扱いを受ける。酷くなる前にそれとなくミロに気を付けるよう注意しておいてやった方がいいかもしれない。

と、彼らが帰ってきた。エインズワースはもう決めてきたらしい。意気が揚がっている。が、一方のミロは眉を寄せ、目の縁に少し険を滲ませていた。エインズワースは恵まれた身長から歓迎されたらしいが、ミロはマネージャーにしておいたらどうだ

と問われたのだ。失礼な話だ。どうして自分の肉体に自信のある人間は、他人の肉体についてそうも冷酷であるのだろう。彼らには想像力が乏しい。やはり、もう少ししたらミロには記者クラブか文学部を勧めてみよう。両方ともボクが入っているから面倒をみてやれる。

四日目。

エインズワースの兄が、奇天烈な姿をしているのを目撃する。制服の上から恐ろしく大きいTシャツを被り、そのTシャツでスクール・オーケストラのコントラバスを募集していた。彼の格好は見掛け倒しか、と鼻で笑ってしまった。あんなにスポーツ万能です、みたいな自信たっぷりの態度を見せているのに。いや、まてよ、でかい奴ほど動きは鈍いって言うからな。それに、今日分かった事だが、兄エインズワースはまだ第五学年だった。人間、デカけりゃいいってもんじゃない。なのに、彼は上級生からも一目置かれているようだ。結局は、みんな見かけで判断するのか、とそう思うといっそ気の毒にもなってくる。人間は、所有する知性で正当に判断されるべきだ。

今日の昼食時、ハウがボクの眼鏡を面白半分に掛けて目を回していた。眼鏡の度数とボクの沈着さをロゴスの片鱗も無い言葉でからかってきたが、ボクは相手にしなかった。バカと話すとバカがうつる。ミロも手を伸ばして来たので貸したところ、まあ、びっくりしたみたいだけれど、それから虫眼鏡を使って光の収束の話から化学の話になったので、すっきりした。ハウの奴、少しはミロの爪の垢でも飲むがいい。

大変気持ちよく、本日の学科最後の化学の教室へ移動した。

化学は、実験台が机になるから一グループ四人だ。エインズワースやハウは二百歩ぐらい我慢してやって同じ班でもいいが、デブ・ウィリアムだけはお断りだ。そう思って、いくつか席取りのシミュレーションをしつつ扉を潜ると、教官が既に班を決めて席を指示しているところだった！　びっくりして教官の机の上に広げられた一覧表を見る。

ミロの名前が在った。でも、同じグループにボクの名前は無い…。気落ちしつつ再度ミロの班を確認すると、バーロウの名前が在った。ボクの唇は、ひくっと痙攣した。他の二人はどうやら違うハウスの人間のようだった。

仕方が無い。がっかりしながら自分の名前を探すと、在った。でも……　デブ・ウィリアムと同じ班だ！　あの、デブでウスノロで、気の利いた会話一つ出来ない、未だにヨレヨレのぬいぐるみに鼻水を擦り付けてるような奴と！　信じられない！　一体、何を考えてこんな振り分けをしたんだ？　酷い！　酷すぎる！

ボクは顔から血の気が引いていくのを感じた。酷い屈辱だ。こんな屈辱、今まで受けた事がない。このボクが、プレップでだって人一倍努力していたボクが、こんな低レベルの奴と同じ班だなんて……　もし、これでボクの成績が下がったら、断固抗議してやる！　化学なんて、実験の手際良さと観察力とそれらの結果を纏め上げる大胆な言語力が必要なんだ！　一体教官は何を考えているんだ？　このボクに、ウスノロ・ウィリアムの面倒まで見ろというのか？

ボクが、突然ふってわいた不遇をなんとか理性で沈めている間に、教官はずんずんと今日やる実験の説明を進めていた。なんて無能な教官！　生徒の一人が、彼のその愚鈍な配慮のお陰でここまで精神的苦痛を味合わされているというのに……

教壇には、何時の間にか山盛りのガラス管が現れていた。毛細管とスポイトを作るのが今日の課題らしい。作った器具は、今後の実験でずっと使用される。半分以上聞き逃してしまった。でも、みんなそんなものだろう。作業開始の声がした。ボクは急いで机の上に手を伸ばした。

掴んで、振り向いたその瞬間、ボクの手からガラス管は床に落ちて砕けた。マイケル・ガーネット！　と教官がボクの名前を呼んだ。ボクの名前を！

これじゃまるで、ボクの過失のようじゃないか！　誰かがボクの腕を押したんだ！　悔しさで胸が支えた。ウスノロ・ウィリアムが気にすること無いよ、とかなんとかボクに声を掛けてきた。なんたる侮辱！

カッカする気持ちを抑えながら、ウスノロ・ウィリアムを無視して実験台に向かった。ボクは著しく不愉快な思いをさせられたので何度も失敗した。その結果、なんとも歪な実験器具が出来上がり、これをこれからの授業で使っていくのかと思うとうんざりした。実験の途中、何度かミロの班を見やったけれど、ミロは特にバーロウと話している様子も無く、真剣にガラス細工に没頭していた。

うまく行かない作業をとっとと終わらせ、ノートに実験記録を記入しようとした矢先、小さな悲鳴が耳を突いた。

ミロだ。

慌てて首を回すと、バーロウがわざわざ机の反対側から回ってきてミロの手を覗き込んでいる。そして、さっさと氷の入った

ボウルを引き寄せてミロの目の前に据えた。実に無駄の無い動きだったけれど、ボクは非常に面白くない。だって、バーロウの奴、その後何をしたと思う？　教壇に絆創膏を取りに行き、わざわざ自分でミロの指に巻いてやったんだ！　普段会話もした事無いくせに、なんて奴だ！　ミロもミロだ。上級生や同学年の生徒にちょっとからかわれただけでも直ぐに嫌な顔するくせに、大人しくバーロウのなすがままになっている！

面白くなかった。物凄く、残念だ。正当にボクの能力を評価しない学校側と、結局眼鏡も掛けていない、すらっとした赤毛のバーロウの言いなりになっているミロ。

君だって、散々見かけでは嫌な目に遭っているだろうに、ハンサムだって言われてまんざらじゃない様子のバーロウには下手に出るんだ。それに、エインズワース。そりゃ、あいつは物凄く運動神経がいいけど、ボクの知ってる星の名前の半分、いや、三十分の一だって知らないに違いない。

エインズワースはちょっと目立つ兄貴が居てちやほやされてるだけだし、バーロウなんかいくらハンサムだからって、赤毛の上に、ソバカスだってあるじゃないか。

その晩、ボクは夕飯を彼らと離れて取った。部屋に戻った時、その事について尋ねられたけど、別に、と返した。

そうさ、別に、大したことじゃない。今まで我慢して一緒に食べてやっていたんだ。ボクが居なくなって、会話にウィットが無くなってつまらないんだろう。ザマアミロ。

五日目。

これで一週間分のカリキュラムが終わる。午前の最後の授業は選択科目で、ボクはラテン語だ。将来、文学の末端を担うからにはやはりラテン語だろう。エインズワースとミロはスペイン語。ウスノロ・ウィリアムは倫理、ハウはデザインを選択している。

この授業は擂鉢式の講堂で行われる。曇りガラスの入った窓は白っぽく柔らかな光を教室に通し、格調高い雰囲気を演出している。いい感じだ。授業への期待に胸が膨らみ掛けたその時、目の端に赤い色が侵入して来た。

あの、バーロウだ！　おまけに、チビのキンキン声もくっ付いている。まるでバーロウの腰巾着だ。折角の向学心に水が入った。

バーロウは、母親がフランス人とかで、必須のフランス語の授業でかなり得をしていた。しかし、ボクは、独学でプレップの頃からラテン語を勉強してきたんだ。物見遊山の気分でこの課を選択したなら、きっと後悔する。この学校は、芸術・古典に力を注いでいるのだから。ボクは、ぐいっと顎を上げて黒板を睨んだ。

三十五分後…。あのキンキン声が飛び跳ねるようにバーロウの横で口を動かしていた。

「ラテン語の授業って、もっと難しいかと思っていたけど、思ったほどじゃなかったね。歌で散々勉強したし、面白いや」

こいつ、やっぱりボーイ・ソプラノをやっていたんだ。それで、歌って言うのはきっと教会音楽に違いない。

「いや、今日はまだ最初だから簡単だけど、そのうち難しくなるよ。覚えていない格変化もかなりあるし。テキストが古典ギリシア文学だから、知らない単語も結構あるしね。聖書のテキストを扱ってもらえたら、今まであやふやだった部分も分かりそうなんだけどな」

……バーロウめ……

何が、『そのうち難しくなるよ』、だ！　何が聖書のテキストだ！　知ったかぶりの、高慢ちきめ！　お前は今、ラテン語を冒涜したんだ！

ボクは猛烈に腹が立った。猛然と赤毛のカカシとチビねずみの横を抜いた。彼らはびっくりしていた。ふんっ！　お前らなんかに、ラテン語の高尚さが分かって堪るか！

ボクは、ラテン語の教科書を胸に抱いて寮に戻った。だから、こんな田舎の学校なんて、来たくなかったんだ。勉学のトップレベルの集団でしか味わえない、あの洗練された空気が懐かしい。なんだってボクは、こんな無意味な場所に居なくちゃならない？

部屋の窓を開け、黄色くなり掛けた木立を見ていると本当に鬱々としてくる。ボクの居るべき場所はこんな所じゃないのに、誰もそれに気付かない。慰めもしない。

自らの不遇を省み、ボクはそっと眼鏡を外した。気を落ち着かせる為に、眼鏡用の織布で分厚いレンズを円を描くようにして磨く。もしかしたら、これはボクに与えられた試練かもしれない。偉大な人間程、その人生は試練に満ちている。人生の暗闇の中で一人苦しみに耐えるしかないボクのこの状況は、選ばれた者の証なのかもしれない。

理解されない、孤独なパブリックでの生活を経、独力でオックスフォードに入り、そこで王立文学協会賞をかっさらい華々し

く文壇にデビュー。著作は全世界で翻訳され、みんながボクの生い立ちに興味を持ち、ボクは奇跡の才能と羨望されるんだ。

きゅっ、と眼鏡の縁を磨き終え、蔓を耳に掛けた。世界がすっきりと明るく見えるようになった気がする。無理解を気に病むのは止めよう…。確かに、その無神経な観察力はボクの繊細な心を傷つけはするが、瑞々しい霊感の泉は誰にも汚せない。あと、五年もしたら、きっとみんなボクの真実の姿の偉大さに愕然とし、今こんなにもボクを軽んじた事を死ぬほど恥じて後悔するんだ。激烈に、いい気味だ!

さて、時計を見る。午後は倫理の授業だ。ウィリアムは美術、ハウは初級ドイツ語、エインズワースとミロは音楽の選択だったはずだ。ミロが初日抱えていた長方形のゴツイ肩掛けバックの中身はバイオリンだったのだ。エインズワースも、プレップではずっとトランペットをやっていたと言う。

ふん、と、誰も居ないのでボクは短く鼻を鳴らした。ボクは、所謂表現芸術のうち、音楽と美術は苦手だ。美しさや素晴らしさはきちんと感受性に訴えるのに、手が思ったように動いてくれない。声だってそうだ。ちゃんと頭の中では正しい音が鳴っているのに、いつだってボクは笑われて来た。勉強でボクに敵わない奴らが、ここぞとばかりに嘲笑をボクに浴びせた。

笑うがいいさ。その代わり、ボクは言葉で美しさを、芸術の素晴らしさを表現して見せる。

きゅっ、と手を握り締めた時、階下と窓の外から騒然とした雰囲気と、ボクの神経を一瞬で熱くする一言が飛び込んで来た。

「ミロ・フェアファックスが、スカート穿いて喧嘩してるぞっ!」

何事?!

ボクは窓から身を乗り出した。

グランドフロア、食堂のテラスからエインズワースが物凄い勢いで飛び出していったのが見えた。その後をハウとウィリアムが玄関から追う。野次馬も走り出していた。

ボクは、ずり落ちる眼鏡を抑えながら、もつれそうになる足をなんとか動かして階段を駆け下りた。

ばらばらと集まる野次馬を追って、芝生の上を走る。

喧騒が大きくなる。

スクール・チャーチと池の間の芝生に、小山のような人集りが出来ていた。

人垣を掻き分けて、体をあちこちに捻りながら前へ進んだ。耳元に色んな怒鳴り声が聞こえて頭が痛くなる。おまけに、眼鏡が、

引っかかって、引っかかって中々前進出来ない。
進行方向中央部からは、地面に人の体が打ち付けられる音や、なんだか嫌な鈍い音が聞こえてくる。
人垣には恐ろしくデカイ人間も混じっていて、ボクが無理矢理進もうとすると睨みつけてくる奴まで居た。ああ、上級生だ、と瞬時に分かったが、どうしようもない。ボクは既に自分の意思だけではなく、もっとよく見ようとする野次馬の欲求に圧され、途中下車など不可能だった。
鼻に、がばっと新鮮な空気が入ってきた。
やっとの事で体が圧迫感の無い空間に飛び出したのだ。
……。
赤いスカートと、金髪が見えた…。
エインズワースが、馬乗りになって誰かに殴りかかっていたかと思うと、今度は彼が下敷きになった。背の高さは変わらないが、体の出来具合が全然違う。ハウは、何だかしらないが、必死になって誰かの足に噛り付いていた。赤い色が、ひらり、ひらりと見えて、金色の頭が激しく動いている…。
ボクは、自分の頭がグラグラしているのか、足がゴムみたいにぶるんぶるんと揺さ振られているのか分からなくなった。何か、捕まるものはないのか？
ミロが、自分の倍はあるような体格の、紛れもない上級生に殴りかかっていた…。
ボクが眼鏡を抑えて唖然としていると、スクール・チャーチの方から人垣が崩れ、さあっっと道が開いた。ボクの背中が何かに押された。
あっ、と思うまもなく、ボクはミロ達の中に多々良を踏んで入り込み、後頭部をしこたまぶん殴られた。
なんて野蛮な連中だっ！
衝撃で眼鏡は芝生の上に転がり、ボクの目には涙が滲んだ。慌てて眼鏡を拾おうと芝の上に手を付くと、背中に誰かが倒れ込んできて、ボクはあえなく地球に押し付けられた。
苦しい…！
「何をやっているのかね！　諸君！」

手を打ち鳴らす音と、有無を言わさぬ声が響き渡った。司祭兼生活指導のルイス教官だ。遅いっ！　来るのが遅いよっ！　ボクの眼鏡が、眼鏡が……！

フレームがぐにゃりと曲がった眼鏡を、ボクは両手に掬い上げた。髪も服もぐしゃぐしゃだ…。ボクはよろよろと立ち上がった。その目の前で、ミロが、真っ赤なひらひらのミニスカートを脱ぎ捨てて、地面に打ち付けた。

怖い……。

場が、しーん、と静まり返った。

その中を、あのウスノロ・ウィリアムがびくびくと入って来て、ミロにびしょ濡れのズボンを差し出した。

どうやら、四人がかりで無理矢理スカートを穿かされて、ズボンを池に放り込まれたらしい。

唇の端を盛大に切ったミロは、それでも全然痛そうなそぶりもなく、ルイス教官を睨み付けていた。教官は、ため息を付いて、ボク達四人と上級生（後で分かったが、第五学年の生徒だった）を説教部屋に連れて行った。

なんでボクまで？

その後、ボクらは飛んで来たハウス・マスターに引き取られ、またお説教された。

ボクは、誰にも危害は加えていない！

ハウは膝小僧を破り、エインズワースは手の甲とシャツを破いていた。ミロは右の口端がどんどん紫に腫れていき、制服のシャツが泥と擦り切れた芝草でボロボロだった。上着は殴り合いを始める前に脱いだので無事。

哀れなのは、ボクの眼鏡だ。奴らの傷はほっといても直るが、ボクの眼鏡は特注で、左のレンズにも傷が付いて、フレームも買い換えなきゃいけない。

誰かが、踏んづけたんだ！

もう、あまりの恥辱に唇が震え、言葉が出なかった。ボクは、何度も関係無いと言おうとしたのに、ハウス・マスターは、怒る素振を見せながらも、彼らの超絶に原始的な問題解決方法に耳を傾け、ボクの存在を明らかに無視していた。ハウス・マスター夫人のミズ・ベネットがボクを宥めるように肩に手を掛け、ホットミルクを飲ませようとした。失敬極まれり、だ。ボクは至って冷静だ！

結局ボクの弁は最後まで聞かれることなく、ハウス・マスターの部屋を辞した。夕暮れはとうに過ぎて、夕食の時間終了まで

後三十分も無い。

シャワーも浴びず、みすぼらしい格好のまま、とにかく何か食べたくて食堂に入ろうとした。すると、食堂扉脇の掲示板に、あろう事か、イラスト入りでさっきの出来事が滑稽な壁紙新聞として張り出されていた。

ボクの神経は焼き切れそうだった。

なんて、品性の無い集団なんだ！

息を吸い込みかけた途端、目の前を何かがさっと過ぎって、ビリッと紙の破れる音がした。音のした方を見ると、ミロが掲示板からひっぺがした新聞を豪快に二つ、四つと引き裂いている。それを、エインズワースが引き取って、丸めて、屑箱に蹴り入れた。

ボクの繊細な神経は、すうっと縮み、目の前が暗くなるような心地を味わう。

成り行きで同じテーブルに座り、ボクはぼそぼそと食事を取った。

「あれ、マイケル、眼鏡はどうしたんだ？」

ミロが、大きな青あざを作った顔で聞いてきた。

「壊れた」

笑い掛けてやる気なんてさらさらなくて、そっけなく返事した。なんで、ボクはこいつらと一緒に夕食なんて食べているんだ。

あっち行けよ、バカヤロウ！

「…ごめん…。巻き添え食わせて…」

と、ミロは言った。

その声は小さく、目の前には彼の金色の旋毛があった。

ボクの怒りは硬いのだ。いくら君が殊勝に許しを請うて来ても、誰が許してなんかやるもんか。なおも黙ってその旋毛を見つめていると、彼は、まっすぐにボクの瞳を覗き込んで言った。

「ごめん。本当にごめん。オレ、目だけはいいんだ。だから、授業、全部隣に座るよ、ノート、ちゃんとマイケルの分も取るよ」

そして、唇を白い歯が見えるくらいぎゅっ、と噛んで、今度はテーブルに頭が付くくらい深々とボクに頭を下げた。

視線がボクに集中した。顔に熱が集まる。頭と腕をバタバタさせてこの熱をどこかにやってしまいたい。ミロは、なおも深く

ボクの前に頭を垂れていた。
「…君、短気なの？」
ボクは、緩みそうになる口を意識しないようにして、ぼそっと呟いた。するとミロは、ぱっ、と顔を赤くした。
「短気、って程短気じゃないと思う。ただ、最初に泣き寝入りしたら、それってずっと続くだろ？　だから、今頑張って戦っとかないとって思うだけ」
「お前、頑張り過ぎ」
エインズワースが、横からミロの頭を小突いた。ミロが、撲ったそうに笑った。そして…。
「うわぁぁぁぁぁ！　ミロ、流血してるっ！　口が裂けてるっ！」
ハウが叫んだ。
笑った拍子に、ミロの口から、塞がっていた瘡蓋が弾け、ぽたぽたと血が滴ったんだ。テーブルと、ボクの靴の上に…。
イボと皺だらけの三人の魔女と一緒に、嵐をミロの口の中に突っ込んでやりたいと思った。

六日目。
やっと一人になれると思ったのに、部屋ではミロがまだぐだぐだと寝ている。二段ベッドから細い足が棒切れみたいに突き出ている。
彼が来てから、ボクの周りは何時も騒々しかったのに、それが、嘘のように今は静かだ。エインズワースとハウ、デブデブ・ウィリアムが昼食を取りに行っている。
ミロは、何時まで眠っているんだろうか。キシキシいう梯子に息を殺して足を掛けた。
飛び込んで来た寝顔は、こっちを向いていて、それは静寂と平安に彩られた柔らかな表情だった。閉じた目蓋から伸びる睫毛は本当に長くて、おまけにカールまでしてて、マッチ棒が五本は乗りそうだった。睫毛の根元の皮膚もほんのり青みが掛かって

いて凄く綺麗だ。唇もうっすらと開いて、綺麗なピンク色。
大きな青あざを除けば、これまでボクが見てきたどんな女の子より可愛いと思うのに…。
ミロは時々、苛烈な怒りを見せる。あんな奴ら、ほっとけばいいのにというレベルの相手にまで走り出して行く。
……。
結局、ミロは二時過ぎに起きて、その日は一日ぼーっとしていた。

七日目。
もう、何をどう書いたらいいのか…。ボクの頭は飽和状態だ。まただ。また、ミロが嵐の目になった。
事件は二つ。
今日の昼、街に繰り出そうと数人の新入生が寮を出た。メンバーは、ローズ・ハウスの五人とスミス・ハウスの七人。デブ・デブ・ウィリアムとバーロウ、キンキン声は教会に行っていて留守だった。エインズワースが待ってみるか、と提案したがローズ・ハウスのパトリックに急かされてバスに飛び乗った。ミロはしきりにバスに感心していた。来る時にバスを使わず、二時間掛ったのだと言った。本当は、歩いて二時間くらいだ。
街中に出て、マクドナルドに入る。ミロは、一回も入ったことが無いといって一緒の連中を驚嘆させた。中身がハンバーグだと説明された彼は、結局コーンスープしか頼まなかった。ミロの偏食はもうハウスでは有名で、ミロの側に行けば彼の食べない肉のおこぼれに預かれると単細胞な子供が皿を空けて待っている。もっとも、殆どはエインズワースかハウの胃袋に消えるのだけれど。
ミロは、肉を食べない。肉が美味しいとは思わないから、とあっけらかんと答えていた。彼が食べるのは、野菜や魚、チーズ。そして、牛乳。牛乳は特に、水の様に飲んでいてこれだけでお腹一杯になっているみたいだ。それから、お菓子も好きじゃないらしい。チョコレートもクッキーも、キャンディーも食べない。
それで、あっつ熱のスープを飲んでいたんだけど、店内に、同じくらいの年齢の女の子達が居たんだ。今回のツアーの首謀者、

パトリックがミロに、行って女の子達に話しかけろと命令した。なんで、とミロは嫌そうに顔を顰めたけれど、パトリックに背中をぐいぐい押されて結局彼女達の居るテーブルに行かされた。

女の子達はいぶかしむ視線をミロに上げたけど、ミロが何か一言二言いったら、忽ち弾けるように笑い出した。じりじりとパトリック達はミロの方を見ていたけれど、ミロは一向に戻って来ない。痺れを切らしたパトリックが、咳払いして黄色い声を上げている集団に近付いた。そして…得意満面で僕らを呼び寄せた。

ボクは、無視した。どうせボクが行ったって、女の子達はボクに話しかけやしないし、ボクの話題に付いてこれる子なんて居やしない。あの子達の頭の中には洋服とか化粧とかの事しかないんだ。誰がそんなつまらない事に時間を割くもんか。

氷が解けて薄くなった不味いコーラをチビチビ吸ってボクは時間を過ごしていた。と、そこにミロがやって来て、同じように残ったスープを黙って飲み始めた。

「なんであっちで話さないのさ」

「？　だって話まんないし」

ミロの一言にボクの心はふわっと軽くなった。そうだよな、全然面白くないよな？　でも、最初は楽しそうに話していたじゃないか？

「あのブルーのチェック柄のシャツ着てる子の髪飾りが綺麗だったから、何処で買ったのか聞いただけだよ。妹にプレゼントしようと思って」

ボクは、入れていた肩の力がストンと消えるのを感じた。その後、先般ボクが読んだ本の話になって、今度ミロにも貸してやろうって穏やかに話していたのに、それは突然やってきた。

店の入り口に、ガラの悪い連中が締まり無く立ち群がって、パトリック達に向かって野次を飛ばし始めたんだ。横のミロの様子をチラッと伺うと、彼は平気な顔して無視していたので、ボクは一瞬胸を撫で下ろした。でも、酷くなる悪態に、パトリックが切れた。

顔を真っ赤にして突進して行ったパトリックは、マントヒヒの様だった。たたった一人でバカじゃないか、と思った次の瞬間、ローズ・ハウスの残り四人も飛び出して、往来で掴み合いが始まった。

何をやっているんだ！　ボク等は金も教養もない公立学校の生徒じゃないんだぞ？　十六世紀から続く誉あるパブリック・ス

クールの学生なんだぞ！

相手は七～八人。体格も結構いい。人数からしたらパトリック達の方が不利だ。警察を呼ぶべきなのか？　ボクが店内を見回すと、いつの間にかエインズワースがミロの横に来ていた。

「どうする？　加勢するか？」

何を馬鹿な事を言っているんだエインズワース！　止めるの間違いだろ！

ミロは、ちらっとエインズワースを確認するとじっと取っ組み合いを見詰めながら言った。

「もうちょっと。様子を見て、卑怯な事をしたら行く」

行くって、どこにだ！　ミロ！

ボクが二人の会話を訂正させようとしたとき、隣部屋のパーマーとリチャーズが、人数が不利だから加勢に行ってくるぞ、と、まるでポストに手紙を入れてくるという風に店から出て行った。止めてくれ！　なんて下等な生き物なんだ！　あいた口が塞がらなくて、ミロの方を見ると、エインズワースのポテトフライとスープを交換している所だった。なんでキミ達はそんな態度で居られるんだ！

と、女の子達の声が上がった。喧騒の集団の中で、髪をぐしゃぐしゃに固めた少年が、パトリックの頭に自転車用のヘルメットを振り翳している所だった。あぁ！　また、流血の惨事だっ！　ボクは目を離く瞑った。頬を、風が撫でた。一瞬の風だ。好奇心に負けて薄目を開くと、ミロが、ヘルメットを持った少年の脇腹に飛蹴りを決めているところだった…。

ボクは、喧嘩なんてしたことはない。見る事だってしないできた。だから、よく分からないけれど、飛蹴りを決めるって、どうだ？　もしかして、彼は、とても、こういう事に慣れている？　ボクの頭は真っ白になった。エインズワースが小走りに集団の中に溶け込み、ハウもそれに付いて行った。

結局、十分くらい後、何処にでもいる田舎の機嫌の悪い頑固爺に一喝されるまでそれは続いた。ぱっ、とお互い離れてからも遠ざかる相手に対してそれぞれ下品な言葉を投げかけていた。見苦しい事この上ない。おまけに、女の子達はこの騒動の間に何処かに行ってしまっていた。それでも、彼らは全くそれには頓着せず、お互いの野蛮さを称えあっているのだから救いようの無い愚か者達だ。だったらなんで女の子に話しかけろなんてミロに嗾けるんだよ。低俗な共有体験をした事で、彼らは連帯感を持ちお互いに親しみを感じているようだった。ボクはその中には入っていない。

何故、下らない事に足を踏み入れなかったボクが、こんな疎外感にさらされなくちゃいけないんだ。絶対に間違っている。

結局、その後ぶらぶらと街中を歩きいくつかの雑貨店と駄菓子屋を回った後、ボクらは寮に戻った。

夕食までにはまだ時間がある。明日の予習でもしようかと、部屋に戻ると、ミロは先にシャワーを浴びてくると言った。エインズワースは、食事の後でいいと言う。と、ミロがボクの左手の側面を指した。汚れてる！　なんでこんなところが？　ハウがボクを鈍いといって笑った。ボクは無視してミロと一緒にシャワールームに向かった。

ボク等が使用していいシャワールームは一階の西側で、朝七時から夜九時までだ。四年前に改装したとかで、割と綺麗で使いやすい。二重扉を開けて脱衣所に入ると、それまでボクの前を歩いていたミロが突然止まった。

危ないじゃないか！

口にしようとした瞬間、ミロの背中がビリッと緊張したのが知れた。恐る恐るミロの視線の先を辿ると、個室の一つ一つの扉に、スカートを穿いたミロの似顔絵と卑猥な文句の書かれた、所謂ピンクチランがずらりと貼り付けられていた。

カタン、と音がした。

ミロが音に向かって走った。

ボイラー室に続く戸口から人影が見えた。

人影は二人だ。

彼らの消えた足元に、あのチラシが投げ捨てられている。

ミロが、猛然とダッシュした。

速い！

庭先で明らかになった犯人二人は、ロウ・ハウスの新人生だ。ミロがぐんぐんと距離を縮める。追われる二人は、なんとか身を隠そうと、スミス・ハウスに飛び込んだ。何事だ？　と、押しのけられた数人の生徒が追いかけっこを見送る。二人は必死で逃げている。廊下は突き当たりだ。と、思った瞬間、彼らは左手の扉を引いて中に飛び込んだ。中は食堂だ。バタン、と音がして扉が閉まる。ミロが、扉に手を掛けたのとほぼ同時だ。閉じこもった中から悲鳴が上がった。

「貼って来いって命令されたんだ！　言う事を聞かなかったら僕達にも同じことするって……」

「命令されたら、逃げなきゃならないような後ろめたい事でもやるのかよっ！」

ミロの体から、青い炎が立ち上がったように見えた。何故だか分からない、その場に居た誰もが動きを止めた。ミロの怒気が言葉と共に目に見えない風になってハウスの中を吹き走った。実際、ミロは、言葉と共にドアに左腕を凄まじい勢いで打ち付けていた。

殴打の鈍い、けれど大きな音、それからガラスが割れ、床で更に細かく砕けるあの独特の耳に残る音、それらがいっぺんに響き渡った。

誰も、動けなかった。

その中で、ミロだけが静かにドアを開けた。二人の少年がミロを見上げた。彼らの上にはガラスの破片が降りかかっている。

一拍後、泣き声二重奏がエコーした。

ミロは、びっくりした顔で二人を見下ろしていたけれど、ミロ……そりゃ、泣くだろう…だって、君の左腕、スプラッタじゃないか…。

ハウス・マスターは勿論の事、チューター、フェロー、マダム・ベルリッジまで飛び出してきた。床には見る間に血溜りが出来、ミロは、困ったような顔をして自分の腕を高々と上げて肩口辺りを押さえていた。

結局ミロは救急車で運ばれ、部屋に戻って来たのは真夜中近かった。散々お説教されたらしく、ハウス・マスターのミスター・ベネットの声は掠れていた。ぐいっとミロを部屋に押し込みながら、彼はもう二度と同じ事は繰り返さないように、と最後の注意を与えていた。ミロは、非常に素直に頷いていたが、ボクは、どうかと思う。

ミロは、同じ事は繰り返していない。どれもこれも、ボクが初めて目にすることばかりだ。それとも、いつかはやりつくして『同じ事』しか残らなくなる日が来るんだろうか…。早速、白い包帯に落書きされているミロを見ながら、ボクは少し眩暈にも似た感覚を覚える。

一週間で、流血事故が二件…。駄目だ…本当に眩暈がして来た…。ボクはよろよろと自分のベットに倒れこんだ。

「マイク、俺、右でも字、書けるから大丈夫だよ？　ちゃんと約束は守る」

ミロがボクに声を掛けた。ボクの眼鏡は壊れたまま。新しい眼鏡が出来るまで一週間は掛かる。明日からまた一週間が始まる。ボクの目の変わりにミロはなると言った。でも、ボクは一週間後、無事で居られるんだろうか？　ミロの巻き添えで眼鏡が必要の無い体になってしまったら…あぁ、でも、明日からハンカチを一枚余分に持って行かなきゃ…あのデブデブウスノロ・ウィリ

アムの奴、チョコレート・バーを食べたべとべとの手でドアを平気で開けていた。デブデブウスノロの障ったドアノブなんて、ボクの手をそのまま掛けるわけに行かない。下手をしたら、奴は便所に行っても手を洗っていないかもしれない。母は笑い飛ばすが、空気感染の細菌よりも、皮膚感染の細菌の被害の方が深刻な事態を発生するのではないかと思う。まだデータとして纏めていないが、調査の価値はある。

なんたるバーバリズム。なんたるミゼラブル。ボクのユートピアは遥かな時間の先にある。

黄昏とはいえ、連合王国にかくも未開な土地があるとは…。野蛮で、衝動的で、暴力と沸騰する感情、脆い自己持つ人間達が暮らす土地。チャーチルが百年統治しても消滅しないだろう。

これを、子供の領域と言う。

Title : THE FIRST AUTUMN
Author : Seigi Sagame and Wakai

英国寮生物語(えいこくりょうせいものがたり) (1)

薪朝文庫　　**B - 4 - S**

平成一四年五月三日　初版発行
平成一六年六月一三日　改訂版発行

著者　祥曲星祈(さがみせいぎ)・和海(わかい)

発行者　高橋　鼎

発行所　㈱仔牛ともぐら舎

http://moo-and-mole.com
info@moo-and-mole.com

定価　六八〇円

乱丁・落丁本は送料当舎負担にてお取り替え致します。

印刷・製本　緑陽社
Printed In Japan

ISBN4 - 10 - 208802-3 CO197